チートとぐだぐだ異世界トリップ

ニネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チートとぐだぐだ異世界トリップ

【Ｎコード】
Ｎ１６８５Ｏ

【作者名】
ニネコ

【あらすじ】
剣と魔法のファンタジーな異世界にトリップしたお馬鹿なチート・ヒジリとへたれ一般人・ジョージ。
元の世界に帰るためには、ダンジョンに潜らないといけないの？もっとも病み上がりなジョージには潜れるわけもなく、無駄に日々が費やされていく。
そんな中、回廊都市『ガンビ』で有名になっていくヒジリ。何やら平穏に過ごすのも無理そう？
＊この作品は「Ａｒｃａｄｉａ」でも掲載しております。

ぐだぐだと自己紹介

三回死んで、チートが生まれた。

最初に死んだ後、目覚めれば改造人間になっていた。

次に死んだ後、目覚めれば変身猫耳娘になっていた。

三度目に死んだ後、目覚めれば神ともいえる力を手に入れた。

他人事なら笑い話でしかない冒険は、当事者である私にとっては笑い話にしかするしかない過去である。

おかげで、平穏で平凡な日常を送ることが絶望的。無駄な努力は試みているが、状況はひどくなっていくだけ。三日もがいて諦めた。悩んでいる状況でもなかったが。

とりあえず、今は私ほどではないが、少々異常といえる能力保持者の集団組織に所属している。公的に異能者の存在が秘匿されていることも有り、表向き公開されている情報とは多少違うが一応国家の管理下にある組織である。最初に死んだ時、私を改造人間にして蘇生した組織もここである。

そして、異能が関与しているか異能でしか解決できない仕事をこなす代わりに、日常の不都合を何とかしてもらっている。それなりの権限があるので、離反とかしないかぎりは大抵のことから守ってくれるそうだ。上司や仲間をネタにしたオリジナルＢＬ本を作った時は、あわやの第三次になりかけたけど。

そんな私の最近の主な仕事が、穴を埋める仕事である。

この作業をすると、一秒が一年になったりしてしまう。とても大変で面倒な仕事。

上司は言う。「お前以外がやったら大抵死ぬ」と。

世界と世界の境界に穴が開いたら、それを埋めるのが私の仕事。

自分の仕事の事ながら、漠然としたニュアンスでしか理解していないので説明するのが難しい。残念なことに頭脳の方はチートではないのだ。それどころか仲間の中では一番馬鹿なのではないだろうか。

とりあえず、友人が言っていたことを例にする。

世界を一人の人間とした場合、別の人間がパーソナルスペースに侵入すると互いに影響が生じる。さらに近く接触をすると境界が明瞭となり、状態が不安定になる。そして、傷つけられることが、境界に穴が開いた状態である。人は傷つけられれば痛いし、酷ければ死ぬかもしれない。流れる血は、この場合は世界に暮らしている誰か。

そこで、チート能力を生かして、私がその傷を治したり、流れた血を処理したり、傷をつけた相手に報復したりすることになっている。

じゃあ、具体的にどうやるのかと言われると答えにくい。

大体その場で起きた事態にのって騒いでいれば、結果として穴が埋まる、らしい。多分、上司につけられた刻印とかがそういう作用をもたらしている。

正直に言えば、私は私を持て余している。

上司や仲間に散々叱られているが、私は自分の力に対して大体こんな感じといった感覚で使っている。理解した上での行使ではないし、制御の方法も何となくであり信用が置けるものではない。

必殺技とかは特に無い。敵は殴るか斬るか食うかの三択だし、名前とか付けてもすぐに忘れてしまうし、格好つけたいときにだけそれっぽくしてみるだけだ。

自分と同時期に改造人間となった同胞たちとは、埋め込まれた石が共鳴して相互テレパシー可能。目が赤くなるけど、つい妄想を垂れ流しにしてしまうことに比べれば些細なことだ。私の妄想は、男

性の精神衛生上好ましいものではないからな。
肌が頑丈頑強、荒れ知らずだというのは、乙女としては大変うれしい。顔面土下座スライディングしても無傷だったときは本当に安心した。隕石受け止めたときは痛かったけど、ものの数秒できれいに治った。生水飲んでも無事だし、サバイバル向きだ。
影がどこか特別な場所につながっているらしく、重さとか大きさとか関係なく収納できる。最大収納量は不明。影は服にも変化できた。巨大化した時に裸にならないですむ。さすがに身長１８０ｋｍ用のサイズの服を取り扱っている店は無いからな。便利。これまたサバイバル向きかも。
あまり長期間力を使わないでいたり、何かを生み出す系統の力を使っていたりすると、ものすごい破壊の衝動が沸きあがって暴走しかけるので注意が必須である。ストレスには注意が必要だ。
あとは、何があっただろうか？もう少し考察なり研究なりすべきなのだろうが、無理だ。深く考えたくない。
死亡フラグとかが見える上に、それに食欲がそそられる理由なんて理解したくない。結局、食べられる上にパワーアップした気がしたし。

「このままじゃ、お前、あいつと同じになるんじゃね？」

久しぶりに再開した同胞に、そう言われて自分を分けた。
改造人間な私。チートで猫耳の私。反面教師としてのあいつに似た外見の私。
気分一つで簡単に変わることができるからあまり意味が無いようだけど、気持ちは少し楽になった。
ついでに、守る対象を、依存する対象を作った。彼女がいる限り、衝動に負けて、暴走はしないと感じた。

さて、大分逸れたが、仕事へ話を戻す。

自分でも理解しえていないことを説明するのは難しい。が、説明しようと思考することが理解につながるからと、お前には必要だと、常々言われているので、ここは我慢して欲しい。

先ほどの例だと、人が傷つくような行為を世界の場合に置き換えると、どこぞの創作に出てくるような異常な現象になる場合が多い。

異世界召喚や転生もののテンプレなんかがそうだ。ああいったものは外からもたらされる。

世界にとって、内側に抱える誰かを奪う召喚の儀式や転生トラックといった行為は、人の身体から赤血球一つ奪うのにナイフを刺すようなものだ。しかも、断りもなしに行う、通り魔のようなもの。迷惑極まりない。

世界にだって意思がある。それは私たちにも認識できるものか、または神という存在かは分からない。が、その意思が痛みに悲鳴を上げるから、世界に異能者が生まれる原因になっていると誰かが言っていた。

上司にとっては、自分の庇護対象の人間を拉致される訳だから、異世界に対し攻撃的にもなる。

自称・神や召喚を行った者には悪いとは思うが、上司は当て付けに彼らの世界に私を送り込む。

私は世界を傷つけないで渡ることが出来るという。さすがチート。しかし、ものすごく気をつけて平穏な生活を試みていないと、私のフラグ喰いは世界にとって騒動の種でしかない。上司の力の影響下なら問題は無いが、さすがに世界を超えてまでは届かない。一度かなり強固な封印を施してみたが、結局反動でひどくなっただけだった。

死ぬはずの人が死なない。結ばれるはずの二人が結ばれない。起こる現象が起きない。

結果、多かれ少なかれ、その世界は本来迎えるべきだった未来とは違う歴史を歩む羽目になる。

また、上司が私を送り込まなくても、騒動に自分からいつの間にか係わってしまうことも大変多い。フラグ目当てである。
特に空腹時や寝不足時、酩酊時が該当する。平穏であろうという意思が弱くなって、本能に従っている時だ。
気がついたら、フラグが立っていた本人と一緒に異世界に来ていたとか、良くあることである。

おおっと、また話がずれた。どうも、相棒がいないと話が進まなくっていけない。
私と違って、普通の肉体の人間が何の助けもなしに世界を移動するという行為は、安全バーなしでジェットコースター３０連続乗車するようなものである。死んでもおかしくない。
そこで、私以外の同郷の人間が異世界にいた場合、上司から受けている命令がある。死んでいたら、魂だけでも元の世界に。生き返らせられる状況だったり、生きていたりしたら、理解を求めて協力してもらい、安全なルートでの帰還方法を実施する。
理由は分からないが、元いた世界に帰っても時間が長く経っていることなどない。長くて一週間前後。　そこで生じた空白期間は、上司がなんとかしてくれるし、異能に目覚めていればそのまま仲間になることもある。
ちなみに、私と契約すると、結構お得だと思う。老い難くなるし、死ににくくなるし、私の中での優先順位が上位になるし。ヒモ生活が保障されるし。
デメリットとしては、精神が感応しやすくなって、私に情報が流れやすくなるってとこかな？

「上手く説明できなかったが、以上が私、ヒジリの自己紹介、かな。

不運にも突如発生した穴から、君と一緒にこちらに来てしまったちょっと変わったお姉さんだ。どうだろう、ジョージ君。理解してくれたかな？何か質問はあるかな？」

にっこりと、思い切り歯を見せて笑ってみせる。ついでに腕を広げて包容力もアピールしておく。胸が残念なのは気にするな。

「冗談？」

「冗談じゃないんだよ。ほら、窓の外を見てごらん。月が二つあるだろう？」

窓の外を指差してみれば、そこには大小二つの月が昇り、空を夕闇に染め始めている。

遠くに見える大きな鳥影は、もしかしたらドラゴンなのかも知れない。

町並みも見慣れた日本の建築物と違い、ファンタジー映画の舞台になりそうなものだ。

「え」

しばし、沈黙。

私は待ちの体勢で、ジョージ君は困惑している。

「夢か、寝よう」

私の話を、熱に浮かされた状態で聞いていた少年は、そう答えると再び横になり寝てしまった。夢と、そう結論付けたようだ。

安物のベッドは、そのわずかな動きにも耳障りな音を立ててきしむ。

私の座る椅子も、この個室も正直言って質のいいものではない。ただ病人が身をおくには必要最低限の設備と、それなりの清潔が保たれていた。建物は古いが、働く人の誠実さがここを立派に施療院として成り立たせていた。

「んー、まあ、無理をさせても、ね」

軽く背筋を伸ばして、身体をほぐす。思ったより、気持ちが良かった。緊張していたのだろう。喉も少し渇いている気がした。

さて、これで5度目の説明が、前回同様に夢と片付けられて無駄に終わってしまった。

いいかげん、次の説明に進みたいと思うのだが、少年の具合が悪いことも理解の遅延の一因だろうし、強制することでもない。彼の具合が悪い原因は精神と肉体が乖離しかけているからで、それには安静にして、ただ時間が解決するのを待つしかない。

彼から回収した所持品は、彼がまだ保護されて当然な未成年であることを強調し、庇護欲を抱かせる。寝顔も幼く、まだ中学生といっても通じるだろう。

私が出来ることは、彼が安静で切る場所の提供と、彼が帰還を望む場合は送還を、ここに残ることを望むなら寿命を迎えるまでの手助けをするだけ。あとは彼を害そうとするものからの守護くらいか。

当面は、その為の資金稼ぎが問題であった。彼のいるこの部屋は施療院の一室で無料ではない。むしろ今私が寝起きしている宿屋よりも高い。

こちらに来た当初は、影から取り出したものを売っていた。とは言っても、金目のものなど、そう持ってはいない。正直困った。頭を使うのは苦手である。

が、運よく、ここは剣と魔法とダンジョンのあるテンプレじみた世界だった。

異世界蹂躙で、最強系で、チートな主人公が私ですね。わかります。

ぐだぐだな日常

ヒジリの一日は、同郷の少年、ジョージの入院している施療院に朝市で購入した食料を届け、彼の様子を聞くことから始まる。

そして、施療院をでると、朝食を食べながら、街で一番人の出入りが激しい探索者ギルド運営の斡旋所へ歩いていく。

斡旋所で、ギルド証を提示し、自分のランク内の依頼から日帰りで達成できそうなものを探し、受領する。ギルドに加入したばかりのヒジリに受領できるのは、簡易なものが多く大抵が日帰りで行えるものばかりなので、深く悩む必要がなかった。

依頼をこなせば、また斡旋所に戻り、達成報告と報酬の受け取り、及びギルドの指定買い取り品の売却を行う。低ランクの報酬など子供の小遣いみたいなもので、売却が稼ぎの大半を占めている。

施療院に行く前に、翌日の為に消耗品の補給をし、公衆浴場で一休み入れる。清潔になったところで、手土産とともにジョージを見舞う。調子がいいようなら話をしていく。

最後は宿で夕飯を取りながら、他愛も無い情報交換をした後、就寝。

以上が、回廊都市『ガンビ』にて、ヒジリが探索者となった翌日から二ヶ月、ほぼ毎日のように繰り返している行動である。

回廊都市で一攫千金や身を立てようとする者が多い探索者としては、一般とそれほど変わったところの無い、優等生とも言える一日の流れである。

探索者は仕事の内容からか、腕自慢の者が多く、血気に逸る者も多い。さらに酒気を帯びれば理性の箍が外れ、暴れるものもいる。故に、常に街は騒動が絶える事が無い。また、ならず者に身を持ち

崩すものも多いので、素行の悪い者はもちろん、前歴の不明なものへの周囲の見る目が厳しいのも致し方ない。
特に問題を起こすこともなく、金払いもいい、優秀な探索者候補であるヒジリへの住民からの視線は、最近柔らかいものへと変わってきていた。

斡旋所は今日もにぎやかである。その人ごみの中に今日の探索を終えたヒジリの姿もあった。
買い取りカウンターの近くの椅子で大人しく自分の順番を待っている間も、何人かがヒジリに軽い挨拶をしていく。日が傾きかけたこの時間帯が、低ランク者が帰還して最も込む時間帯である。
光沢の残るまだ新品の金属鎧で全身を覆う者や、なにやら細々と刺繍が施されたローブをまとった者、ぼろぼろになった布でかろうじて大事な部分を隠した半裸の者など老若男女多種多様な人々が、建物内を行き来している。

「よう」

「ああ、ヴィルさんか。珍しいね、こんな時間に」

番号札を手慰みにいじっていたヒジリの横に、声を掛けてきた男が座る。
ヒジリよりも一回り大きな体躯の持ち主に座られ、頑丈なはずの椅子がきしんだ音を立てた。
ヴィルヘルム・アルグレン。『ガンビ』ではそれなりに名の知れた探索者で、『白の猛虎』の副リーダーだ。ビスターと呼称される獣人で、虎の獣相をもっている。ザンバラに切られたくすんだ金髪は鬣のようで、ヒジリは獣相が獅子じゃないのを少々残念に感じていた。
二人が最初にあった時にしていた回廊内での凄まじき猛獣のよう

な形相も、ここでは野性味溢れる男臭い笑顔にすげ変わっている。

「お前さんこそ、今日はもう仕舞いか？結構長い間、ここにいるみたいだが」

自分の手にあるのとヒジリの番号札の数字を見比べる。書かれた数字の差は三十以上あった。カウンターで呼ばれる数字もヒジリの番号よりも大きい。

「査定にさ、時間がかかっているんじゃないかな。数も多かったし」

カウンターの向こうでは今頃大変なんだろうなぁと、どこか他人事のようにヒジリがぼんやりと思っていれば、ヴィルも思い当たるものがあったのか、頭を掻く。

「なんだ、またどでかいの引き当てたのか、お前さんは。毎回、ついてるんだかついてないんだか、微妙だな。おい」

苦笑を浮かべ、太い指で額を小突いてくる。冗談半分だといえ、鍛え上げられた戦士にやられると結構痛いものがある。

軽く手で払いのけると、ヒジリは深く腰掛けなおす。

カウンターでは何やら価格でもめ始めたようで、声を荒げる男と係員を周囲が迷惑そうに見ていた。鑑定結果が不満なのか、それとも別の何かか。

二人の位置からでは周囲の喧騒に紛れ、詳しい内容が分からない。だが、これは当分かかりそうだと踏んで、二人は話に意識を傾ける。

「ちょっと深くもぐったらさ、囲まれちゃってさ。もう次から次と数だけは多くて厄介でさ。まあ、結果として楽勝でしたが」

冗談めかして、肩を竦めて笑ってみせた。
その余裕を示す行為に、ヴィルは若干顔を顰める。

「おいおい、それは結果が良かったからいいものの、奥に行けばやばい奴が、いつ出てきてもおかしくないんだぞ。チームを組んでいるならともかく、お前はフリーじゃないか。庭園くらいまでならそれでも大丈夫だろうが、回廊内でまでそれだといつか痛い目見るぞ」

説教じみてはいるが、これも先達としての心配からの言葉なのだろう。
ヒジリもそれは分かっているので、特に反論もせずおとなしく聞いていた。

「別にお前さんの実力を疑うわけじゃねえ。だがな、回廊はそんな甘いところじゃねぇんだ。最初は上手くいくかも知れねえが、ランクが上がればソロでなんて無謀でしかねえ。何度も言ってるかもしれねえが、早いとこ相棒なりどっかのチームに加入するかして、パーティー組んで仕事しろよ。お前がいいなら、うちのとこに入ってもいいんだぜ」

「うーん、そうは言ってもね」

ヴィルの真面目な言い分に、ヒジリは困ったように首を傾ける。
確かに、このまま探索者を生業としてやっていくなら、ヴィルが言う様にフリーのしかもソロで回廊に潜るというのは自殺行為だろう。
今、ヒジリの探索者としてのランクはカッパー。登録直後のビギナーから一段上に昇段したばかりではあるが、回廊内での行動制限が緩和されており、一攫千金も夢ではない。しかし、それは危険との隣りあわせでもある。

ヴィルが言いたいのはその危険性の部分なのだろう。
回廊内には魔物が巣くう。その中を探索するのだ。遭遇しない、戦わないということはよほど執念深い準備や行動でもしない限り無理だろう。
一瞬の油断がそのまま命の危険につながるのだから、どうしても死角のできるソロよりもパーティーのほうが安全であろう。
自分に関してはそれらの危険性はほぼ無いと、ヒジリは内心断言できる。が、正直に言うわけにもいかない。ようやく周囲の視線が穏やかなものに変わっているのに、ここで自分の特異性が広まるのはまずい。自分だけならどうとでもなるが、今ヒジリには守らなければいけない存在がいる。彼が万全でない以上、あまり歩のない賭けをするつもりはない。

「でも、ジョージ君の体調でその日の日程決めているからなぁ。ソロなら問題ないけどパーティーだと自分の都合だけで仕事選ぶわけにもいかないじゃない。それに頭数増えたら取り分減るし」

「ランクがカッパーなら、受けられる依頼の報酬だって前のビギナーよりマシだろうが。確かに報酬だけなら取り分減るだろうが、その分魔物の戦闘で核水晶の入手率上げればいいだろうが。ソロでやるより大物狙いしやすいしよ」

「だ～か～ら～、ジョージ君優先だから他の人に迷惑かけるの。それが嫌なんだってば。しばらくはソロでいいの。チームとかはジョージ君が退院したら改めて考えてみるよ」

「そうか？まあ、その時になったら考えてみてくれ。フリーのまま助っ人として参加してくれてもかまわねえし」

残念そうな表情を見せた後、ヴィルは耳をピクリとカウンターの

方に動かした。
「お、俺の番みたいだな。じゃあな、ヒジリ、一緒に仕事できるのを楽しみにしてるぜ」
大きな手のひらでヒジリの黒髪をわしわしとかき混ぜると、カウンターへと歩いていった。
残されたヒジリは、掻き乱された髪を手櫛で整えなおしながら、周囲の視線に少々うんざりする。
原因ははっきりしている。ヴィルだ。

はっきり言って、無名の新米探索者に対してここまで熱心に勧誘するヴィルはめずらしい。
所属しているチームが有名なだけでなく、彼自身も『金虎』の二つ名をもつほどの実力者として有名人だ。
派手で勇壮な外見に劣らず豪胆な性格の男は、声も大きい。多分先ほどの会話は周囲に丸聞こえだったのだろう。別にこれといった秘密が話されていたわけではないが、内容が説教のような勧誘だった為だろう。彼の勇名を知る者からの羨望と嫉妬の視線が刺さる。主に男性から。
いやー、ヴィルさん男からモテモテで羨ましいわぁ、などど、内心ふざけていれば、ようやくヒジリの番号が呼ばれる。

カウンターで番号札を渡すのは、短い間ですっかり顔なじみになってしまったギルドのお姉さんだ。
長い耳がふるふると身体の動きに合わせてゆれている。若く見えるがエルフなので見た目どおりではないのであろう。ここで働くギルド員は皆紺色の制服を着ているが、彼女にはよく似合っていると思う。

「大変お待たせいたしました。こちらが今回の鑑定結果と買い取り金額になります」

カウンターの盆の上に、一枚の紙と皮袋が置かれる。

紙には今回ヒジリが持ち込んだ品の個別鑑定額と鑑定手数料、および総計金額が書かれていた。魔物の核水晶が多く、評価もまちまちだったことから時間がかかったのだろう。

書かれている金額は６７２２レリン。中堅カッパーランクの依頼報酬金額の相場が大体角銀貨５枚、５０００レリンだから買取品だけでかなり稼げたといえる。これに依頼報酬も加わるのだから結構な金額だ。『ガンビ』だと普通の宿屋での二食付き一泊が円銀貨３枚前後、３００レリン程度。パンなら一個角銅貨１，２枚、１０から２０レリン位か。しばらく依頼を受けないでも困らないくらいの稼ぎになる。

最初腕試しをした時より大分手を抜いているにしても、魔物を倒すほうが普通にランクに沿った依頼を受けるより効率よく大金を稼げそうだ。だが、そんなことをすれば噂に上らないはずがないので、ヒジリの選択肢に今のところそれは存在していなかった。もっともそれは今更なのかも知れないが。

「はい、毎度。じゃあ、また明日」

皮袋の中を確認し、鑑定結果の書類にサインをする。そして、支払い証明書と皮袋を懐に収めるとカウンターを離れる。

いつもなら軽い会話をしていくところだが、さすがに待ち時間が長かったので早々に斡旋所を出ることにした。

建物に入る前はまだ高かった太陽も大分傾き、空を茜色に染めている。今から日課である公衆浴場に向かえば、施療院の面会時間に間に合うか微妙なところである。しばし悩むが、自分の格好を見てこのままでも良いかと思い直した。

確かに戦闘をし、汗を掻いたが庭園を抜ける前に軽く汚れを落とし身奇麗にはしている。まあ、体調次第では面会せずに差し入れだけして帰れば良いだけだ。

施療院に向かう道すがら、いつものパン屋に寄る。円銀貨数枚でジャムとパンを適当に大人買いする。いつもしている差し入れだ。店主も手馴れたように袋につめていく。

正直、世話になっている施療院は経営状態が厳しいとヒジリは思っている。孤児院も運営しているそこは、建物が古く働いている人間も少ない。その上、通院している者の大半はどう贔屓目に見ても裕福そうには決して見えない。偶然見てしまったが、廊下の影で支払いができないという患者にできる時に支払ってくれれば良いと言う医者の会話は多分よくある光景なのだろう。医者もどちらが病人かと問いたくなるような不健康そうな身体によれよれの服を着ていた。当初、ジョージに出された入院食も貧相すぎて涙が出そうなものだった。

最初の探索で結構な大金を得たヒジリとしては、速攻でジョージの待遇を改善すべく行動に移した。医者としての腕は評判が良かったので、施療院を移ることはしなかった。とりあえず、落ち着いて養生できる環境にすべく、個室に移動し、寝具などを購入し持参した。食べ物もジョージの好物が分からなかったので、とりあえず朝は市場で果実や野菜を、夕方はパン屋でパンなどを大人買いし、余ったものは施療院側で処理してもらった。それで捨てられようが食べられようがヒジリの知ったことではなかった。

「すいませーん、ヒジリですけど」

忙しそうな看護婦に声を掛ける。悪いとは思いつつ、一応挨拶しないとこの手土産を処理できないのだから仕方ないと開き直る。

こちらを振り向く一瞬で、疲れた顔を笑みに変えた彼女は、ヒジリに向かっていつもの挨拶を返す。

それにヒジリも答え、後はジョージの今日の様子を聞くのと手土産の譲渡を行うのが常だった。それで面会できそうなら説明に赴き、無理なら素直に帰宅だ。ジョージの他にも入院している患者はいるのだし、手間を取らせるべきではなかった。

結局、この日もジョージへの説明は上手くいかず、帰りに公衆浴場で長居するヒジリの姿があった。

ぐだぐだな説明

二人が異世界転移してから三ヶ月が経とうとした頃、ようやくジョージがヒジリの話にきちんと向き合うようになった。

とは言え、今までのヒジリの話をちゃんと覚えていたわけではなく、体調の回復に伴い説明を受け入れるだけの精神状態になったというだけの話だ。

「さて、これで次の段階に説明が移るわけですが、ヒジリちゃんとしては苦労が実って嬉しい限りです。どんな質問にも張り切って答えちゃいますよ。さあ、何が聞きたい？」

にっこりと笑うヒジリに少々ジョージは面食らいながらも、考えをまとめようとした。

ジョージには、目の前の存在が、自己申告したような存在だとは正直信じられないが、窓から見える景色が自分の常識ではありえないものである以上受け止めるしかなかった。逃げていられないと感じた。

「ここが異世界だとして……」

それでも認めたくない心情が、ジョージの口を重くする。

「異世界だとして？」

一方、ヒジリは笑みを崩さなかった。

今日はまだ日も高く、面会可能時間は十分残されており、焦る必要がないと思ったからだ。

「俺が元の世界に戻ることは可能なのか？」

長い寝たきり生活で伸びた髪が、ジョージの動きに合わせて揺れる。それは彼の内心を表すかのようで痛ましく映った。

だから、からかうこともせず、ヒジリは背筋を伸ばし、真面目に答えることにした。

「条件付で可能。その条件も時間は少々かかるけど、そう難しいことじゃないよ」

「条件？それって、何？」

不安なのだろう。ジョージの視線は右へ左へと揺れて落ち着かない。

それでも口からこぼれる言葉は明瞭で、聞き取りやすかった。

「一つ目は、帰還者である君が転移前までか、それ以上に健康であること。これは送還にかかる負荷に耐えるために最低限必要なの。死体が辿り着いてもしかたないでしょ」

世界を超えるのは容易ではない。もちろんただの人が超えようとなればその身にかかる負荷も相当のものになる。死んでいないのが奇跡なのだ。

ヒジリにとっては耐えられようと、ジョージが耐えられないようでは意味が無かった。

故に、ヒジリは二つ目の条件を口にする。

「二つ目は世界の境界が薄い場所に行くこと。これは回廊内、それも深部ほど条件に当て嵌まる、と思う。まるでそれが目的のような

場所だったし。だけど、あいにく魔物がいるので、君には最低限回廊について学んで欲しい。戦えと言う訳じゃなくて、君自身の自衛の為。無知のまま足をひっぱって欲しくないの。何も知らないで行くには、君には危険な場所だから」

「他には？」

真剣な表情だ。話を聞きながら、自分で出来ることを必死に考えているのだろう。

「以上、二点よ。私が知る送還の方法で君に関係あることは、だけど。私より有能な人ならもっと簡単に君を返すこともできるんだろうけどね。私では君に負担が掛かる方法しか思いつけないよ。ごめんね、頼りなくて」

わざとおどけて情けない顔をして見せれば、首を振られる。

ジョージにしてみれば、帰れるなら方法はそれほど気にはしないから構わないということなのか。それとも、情けない顔のヒジリの頼りない発言への慰めか。

ヒジリにはよく分からなかった。わざわざ思考を読む必要も感じなかった。

「さて、次の質問は何かな？」

足を組みなおし、真剣な表情のジョージに軽く笑って見せる。

しばしの間。

一息吐いた後、ジョージは再び口を開く。

「さっき、回廊って言っていたけど、何ですか、それ？」

「それはまた難しい質問だね。……君はゲームってよくやる？」

いい答えが見つからず、ガシガシと頭を掻きながら尋ねてみれば、ジョージは軽くうなづいて見せた。

「まあ、簡単に言うとすると、ＲＰＧなんかでよく出てくるダンジョンのようなもので、この世界での一般的な呼称かな？」

そこで一度切り、こめかみ付近を数度掻いた後、言葉を続ける。

「この世界の人にとっては神話に登場するような、遥かなる過去の遺物であり、数多の魔物の巣窟で、人々の生活の基盤となる様々な物資の採取場所でもある。建てられた目的も内部の構造も未だ不明確で不確実。戦後、国という枠組みを超えて、この内部に挑む人々を探索者と呼び、支援する探索者ギルドという広規模な組織も設立されている。この街は、そんな回廊を中心として発展してきている」

懐からギルド証を取り出し、手渡して見せる。

「それが探索者ギルドの発行している証明書。これがないと回廊と都市の境界にある門を通れないことになっている。君が帰還する上で獲得しなければいけないものだ。まあ、取得するだけなら、お金の問題だから今すぐでも大丈夫だけど」

「自動車免許証みたいですね、これ」

手渡されたヒジリのギルド証を見つめながら、そこに書かれた文字が見知らぬものであることにジョージは少し悲しくなった。

「ああ、確かに似てるかも。こちらでも身分証明書として使える位

は認知度が高いから、結構便利だよ」

返されたギルド証をヒジリも見つめ、気づかれないように苦笑した。

あちらほどの精密さはないが個人を識別できるほどの顔写真が表側の右半分に載っている。似ているというジョージの意見には素直にうなずける。だが、帰還するという強い目的意識は大歓迎だが、今ホームシックになられても困る。

話題を変えようと考えるが、特に浮かぶものもないので、そのまま説明を続けることにした。

「ちなみに、それはランクがカッパーの探索者に発行されるやつ。縁取りが銅でしょう。ギルドに入会した時点ではランクはビギナーで縁取りが黒いの。ギルドを介した依頼を一定数こなせば、すぐにカッパーに昇格できる。まあ、その後は指定依頼をこなしていかないと無理だけど、シルバー、ゴールド、アダマンっていうのがあるの。アダマンとかは後世に伝説が残るレベルって話だから、実際に見たわけじゃないけど」

話しながら、別の話のネタはないかとバッグに手を突っ込む。一番上に入れていた皮袋をとりあえず取り出すことにした。

今日の報酬が入った皮袋だった。

ちょうどいいので、それを説明することにした。

「そして、これがこの国の通貨。単位はレリン。金貨、銀貨、銅貨の三種類にそれぞれ角貨、円貨の二種類がある。退院したらいくらか渡すから、実際に使って覚えたらいいよ」

「え、そんな。お金なんて」

困ったように遠慮するジョージに笑いたくなった。
面倒を見るといっているのだから素直に甘えれば良いのに、と思うのだ。

「いいや、遠慮しないで良いよ。最初の自己紹介で述べたように、君の保護は私の仕事の範疇になるんだ。だけど、もし借りを作りたくないというなら、私と契約を結んでくれないか？」

正直、あんなに長々と話された自己紹介をきちんと覚えてはいられないと思うのだが、はっきりと言い切られるとそういうものかと判断してしまう。まだ、ジョージの熱が下がっていないのも思考力を鈍らせている要因だろう。
返事はあっさりとしたものだった。

「いいですよ」

「おや、あっさりと了承するね。内容とか聞かないでいいの？後で、辞めますって言っても駄目なんだけど」

ヒジリがからかうように言えば、困ったような顔をする。あまり深く考えていなかったのだろう。
そこに付け込んでも良かったのだが、ヒジリとしても後で揉めるのも面倒くさいので説明することにした。

「私がしたい契約って言うのは、まあそんな大層なものじゃないんだ。私の当面の目的としての庇護対象になって欲しいんだ。私の名前を呼んで。私に守られて。私が力を振るう理由の一端になって欲しいの」

漠然として意味がよく分からないと、ジョージは首を傾げる。

ヒジリも、自分の説明がまずいことを自覚しているので笑ってごまかす。

「あー、分かりにくいか。私ってね、庇護対象がいないと力が安定しないみたいなんだよね。この世界で生活していく上では、力は安定して発揮できた方が楽できるでしょ。だから、元の世界に戻るまでいいから、安定剤代わりになってほしいんだ」

「それで、具体的に俺は何をすればいい？俺はただの高校生だ。あんたみたいに特殊な力なんて無い。無いんだよ」

熱が上がってきたのだろう。目に涙が溜まっている。

ヒジリの視線を避けるかのようにジョージが顔を伏せれば、不安に揺れる気持ちを表すかのように下に零れ落ちる。

「具体的、具体的に、ね。とりあえず、君にしてもらいたいのは、帰りたいって気持ちを忘れないでいて帰還に向けて頑張ってほしいのと、私の名前を覚えて欲しいかな。あ、私の方法に文句があるなら、我慢しないでちゃんと言って欲しい。当面、一緒に暮らすことになるだろうから、できれば仲良くはなりたいかな。後で私たちが知人で終わるか、友人になれるかは契約とは別問題だけど、ね」

できるだけ軽い調子を崩さず、ヒジリは言葉をつむいだ。

目の前の少年から、肯定の言葉を引き出すにはどうすれば言いかと、あまり出来の良くない頭で考えながら。

そして、一方的にヒジリが喋るのを遮るように、ジョージは口を開く。

「そんなのでいいのか？」

「そう。大層なものじゃないだろう？」

それはどうだろうか？

引っかかるものを感じながらも、熱で回らない頭でジョージは受け入れることを決めた。

帰還の方法を知る人物が目の前にしかいない以上、それしか選択肢がなかったとも言えた。

現実を受け入れたからか、覚悟を決めたからなのか。

この日より、ジョージの体調は今までが信じられないくらいの勢いで快方に向かっていった。

ぐだぐだと回廊探索

いつものように宿の主人の娘、アリアに見送られ宿を出る。
同宿の探索者が斡旋所に向かうのから逸れて、ヒジリは施療院による。
施療院にて昨日と変わらぬ会話をした後、依頼を受けに斡旋所に向かう。
背中のバッグには特製弁当と飲料水のボトル、探索必需品及び買い取り品収納用の皮袋が数枚収められていた。個人的には探索必需品の数々は不要だったが、回廊内で他の探索者と合流することもあるため一応持参している。

斡旋所では受付前の掲示板に張り出されたランク別の新規依頼の数々を人の隙間からざっと眺めて、都合がいいものを探す。
所々依頼書の並びに空白が出来ているのは、朝早く先行した探索者にすでに受領されているからか。手間が掛かるものや相場に比べて報酬が少ないものは人気がないのだろう。

今日はどうしようかと、考えながら目の前の依頼書を見比べていく。
庭園内に咲く青椿のつぼみの採取、は花に詳しくない上に指定量が多いので却下。
魔物のネズマタの牙と尻尾の収集、は倒すのは簡単だし報酬は収集量次第で一見おいしいが、体液の匂いがきつく回収作業が地味にきついので保留。
庭園の道路補修工事者の護衛、は一日の報酬はいいが、作業終了日まで拘束される上、魔物討伐による収集の見込みが限りなく低い。駆け出しの探索者にはいいだろうが、正直ヒジリには物足りなさ過

ぎる。
魔道具オートマップの試作品の運用実験協力、は報酬が少ない上に数日掛かるものだが、報酬不足分は遭遇する魔物からの収集で十分補うことができる。それにギルド昇段指定任務でもあった。

「魔道具、ね。どんなかな」

ヒジリはこれを受けることに決めると、掲示板から依頼書の控えを取り受付に向かう。

日も既に昇りきったこの時間は、朝のピークも過ぎ、人の波も途切れがちになる。
今日は運よく順番待ちの番号札を渡されることもなく、ヒジリはすぐに開いている窓口へと誘導された。

「おはようございます。依頼書の控えとギルド証を見せていただけますか？」

朝の挨拶と共に出された受け皿に、言われたとおりに二枚を載せる。受け取ったギルド員は、それを手に一端奥に下がると、何かを手に戻ってきた。

「お待たせいたしました。では、こちらの書類にサインを」

こまごまと注意事項などが書かれた規約同意書が、カウンターの上に差し出される。
探索者ギルド加入にあたって説明された様々な規約が書面になったそれは、依頼を受けるに当たって常にサインが求められる。
依頼によっては、追記事項が加筆されていることがあるので、一応ざっと目を通した後、書きなれない文字で自分の名を記入する。

そして、ギルド員は同意書と入れ替わりに、少々大きめな箱を置いた。
中には、魔水晶がいくつかはめ込まれた手の平大の円盤とそれを固定する為のチェーンストラップ、それと魔力貯蓄板が一枚入っていた。

「では、依頼の説明をさせていただきます。今回、こちらの魔道具の運用実験となります。実際にこちらを装着していただいて、回廊内を探索していただくとことになります」

そういって、箱の中から魔道具と説明書を取り出し、使い方を丁寧に説明していく。
腰に装着するタイプで、はめ込まれた魔水晶が、常時周囲の地形を観測し自動に地図を作成していく仕組みらしい。
大体魔力貯蓄板一枚で一日使用できる計算らしいが、予備として一枚付属して持っていくことになっている。
一応一日ごとにデータを回収する為に、毎日の帰還を求められているが、これは不測の事態も考慮してのことだろう。

「一応こちらのカバーを開いてここを押していただければ、実際に作成された地図を見ることも出来ますが、お勧めしません」

実際に操作をしながら見せてもらう地図は、現在地と思われる地点に光点がでた。だが、それ以外には何も記されてはいない。

「まだ、試作の段階ですから、地図の精度などを保障できませんから」

にっこりと笑われて、ヒジリもそれなら仕方ないかと頷いておいた。

ギルド発行の地図を所持している以上、わざわざ保障のないものを頼りにすることもない。
そして、他にも細々した注意事項を聞いた後、ヒジリは窓口を後にした。

「では、お気をつけていってらっしゃいませ」

野太い声で見送られながら。

朝の受付時間が終わり、窓口にいた男は書類を仕舞う為、奥の事務所に向かう。
扉をくぐって直ぐに、同僚の男に捕まった。大きく無骨なその手にがっしりと肩を掴まれ、どうやら逃げることは無理と悟る。
顔を見れば、多分仕事の話ではく何か愚痴りたいだけなのだろう。
いい歳をした男が、口を尖らせても不気味なだけだ。

「おい、さっきのあの人、今日も依頼受けたのか？」

同僚の問いかけに、男は手の中の書類に目をやる。
その中に、同僚の言うあの人、ヒジリのサインが記入された依頼同意書もあった。

「ああ、受けたな」

返事をすれば、同僚は呆れた表情をしてみせた。そして、右手で顔を覆ってみせる。

「おいおい、勘弁してくれよ。また、仕事増えるじゃねえか」

「たかが一探索者にそこまで言うか？」

最近よく見かけるが、たかがカッパーランクの探索者だ。しかも2ヶ月前まで、ビギナーだった新人の何が問題だというのだろう。

不思議に思って男が問いかければ、大げさな身振りでうなだれている同僚は、再び呆れた表情になった。

「お前、知らないのか？あの人だぜ、ほぼ毎日、結構な額の核水晶を売りに来るの。おかげで俺のところは、支払い用の現金集めに大忙しってわけだ。銅貨とかは大丈夫だが、金貨とかがな、危ない」

「そんなにか？」

「そんなにだよ。一回ごとの買取は、シルバーとかなら結構普通な金額だから問題ないんだけど、毎日となると別だ。普通は探索ごとに休暇を挟むだろう。特に高額な支払いなんて、同じ奴に月に数回すれば多い方なのに。あの人のおかげで、ここの所、金庫の中身は出入りが激しくってさ。出納帳とか書く、こっちの身にもなってくれよ」

「別に彼は悪くないだろう。規定に抵触するわけでもないみたいだし」

「まあ、規定には触れていないな。だけどな、持ち込み品もちょっと扱いに困るものも混ざってたりして、本部とかの申請が面倒くさいんだよ。あの人の持ち込み品、鑑定士たちの実力試しになってんだぜ」

ぼやく同僚は一通り男に話すと満足したのか、手の中の書類を受け取って自分の席に戻っていった。

「要注意、とかに指定されるのかね。あの人」

先ほど窓口で向き合ったヒジリの印象は、男にとってそれほど印象的ではなく、せいぜいが左前方部の黒髪の一房が白かったことと背が高そうだったことくらいだ。東のリグオウカならよくいそうな顔立ちだった。

ヒジリ自身には落ち度はない。毎日依頼を受けて探索してはいけないという決まりなどはないし、持ち込む品もランクより上の実力があることを示しているだけだ。

ただチームではなく、フリーの一個人が、ここまでギルドの内部で噂になるということが、男に懸念をもたせる。

上位の探索者が少ないのは、何も実力ある者が少ないからというだけでなく、実力ある者を国や貴族が雇用したがるからだ。しかも、有名轟く者や二つ名を持つ者は高待遇で勧誘されがちだ。

同僚の口ぶりでは、ヒジリの名前が彼の部署で上らない日はないようだ。そう遠くない未来に、二つ名を持ち、貴族などからの勧誘合戦がはじまるだろう。

どこぞの貴族とかと、問題だけは起こしてほしくはないが。

男は数年前にあった騒ぎを思い出し、ため息をついた。

斡旋所を出て、左手前方にすぐ。

大きな跳ね橋があり、その向こう岸に重厚な壁と門の扉が見える。

あの壁が、回廊に巣くう魔物から都市を守る最後の防壁となっている。さらに、有事の際は跳ね橋も上げられ、回廊と都市はほぼ完

全に隔てられる。
こちら側の跳ね橋の両脇には、回廊を行き来する人々をチェックする兵士の為の詰め所がある。右側の赤い屋根が入場者の受付所を兼ねており、反対側の青い屋根が退場者の受付所を兼ねている。
そこを抜ければ、回廊と呼ばれる建物を囲む庭園に出る。
庭園には季節や風土を無視した植物が様々に生い茂る。回廊から門までは一応石を引きつめた舗装された道がある。が、それも定期的に補修をしないとあっという間に緑に埋め尽くされる。
今日も何人かの作業員が探索者に護衛されながら、道を遮るような草木を伐採したりしている。
道なりに歩いていけば、陽光を受けて不思議な光沢を見せる建物にたどり着く。
継ぎ目の見えない不思議な素材で出来た建物は、ヒジリにはどこぞのビルのように見えた。
建物の入り口近くには、都市にあるのと同じ外観の建物があり、警備の兵士や探索者の休憩所兼避難所となっている。
中に入れば、巨大な七色に光が点る円柱と、それを中心に四方に均等に配置された魔水晶をあしらったアーチがあった。周囲の壁や床は、円柱の光源の明滅に合わせて、同色の光が下から上へと線状に走っていく。
外から陽光が入ってくるのは、入り口だけで、内部を照らすのはその七色の光だけだった。

ヒジリも最初にここを訪れたときは、その不思議な光景に目を奪われた。だが、既に三ヶ月も毎日通っていればそういった感動も感じなくなる。

「今日はどれにしようかな？」

一人呟き、腰に佩いた刀とは別に持参したグレートソードを床に

垂直に立てると、そっと手を離した。
支えを失った大剣は、ゆっくりと傾き、酷く耳障りな思い金属音を響かせ倒れた。倒れた柄がさす方を見れば青い魔水晶のアーチがある。

「白蛇宮か。あれ、使ってみるかな」

倒れた大剣を拾い、ヒジリはアーチを潜り抜ける。
微妙に浮遊感を感じた後、視界に広がる光景が変わった。

通路はどこから光源が来るのか明るく、水色のドットを描くように光る石が白い壁に嵌め込まれている。
先ほどの場所にあったアーチと同様のものを背に歩き出せば、しばらくは一本道で迷うこともない。横幅は１０メートル、天井までは、ざっと見てこちらも１０メートルはありそうだった。
やや湿った床にはいくつか新しい足跡が残っており、誰かがこの先にいることを教える。
白蛇宮と呼称されるこの場所は、あまり道に分岐がないのが特徴だ。この道の先には、吹き抜けが見えないほど上まで続く広間と、そこに至る吹き抜けの外縁を沿って降りる長い階段がある。

通路の隅でふるふるとうごめくスライム上の魔物プディを一体、手にした大剣で掬い上げる。そのまま、ぽんぽんと羽根突きしながら、ヒジリは先へと進んだ。

「よーん、ごー、ろーく」

数えながら進むうち、前方から風が流れてくる。
わずかな血臭。
ヒジリは口の端をゆがめる。

「これは、誰かフラグを立てたなぁ」

大剣を一振り。プディが壁へぶつかり割れる。

中から小さな核水晶が出てくるが、拾うことはせず先を急いだ。

悪意と遭遇

回廊内には魔物が巣くう。
地上付近や庭園内に出没するのは、大概が小物で訓練所を出ていればそれほど危険性のない魔物ばかりだ。
逆に地上から遠ざかれば、魔物の危険性も急激に上昇する。
普通、日帰りできる範囲に命の危険を感じるほどの魔物は出没しない。それは半ば常識といえた。

だが、例外も存在する。

デモビア。
それは正確には、魔物ではないのかもしれない。
人型をしたそれは、体表面のいたるところが結晶化しており、高い魔力をもつ。
下位のものでもシルバーランクで構成されたパーティー以上の戦力が必要といわれる。記録に残る中では、２００年以上前に帝国の回廊都市に防壁を破って出現した一個体が、多くのゴールド・シルバーランクの探索者や騎士を屠り、後に英雄で名を残した人物までをも重症にまで追い詰めている。
それは回廊の深度を問わず、唐突に出現し、遭遇した者を襲った。
最悪の敵。
多くの探索者にとって、それと遭遇することは死を意味していた。

そして、ヴィルの視界には忌々しいそれが、ゆっくりとこちらへと近づいてくる姿があった。

あいつらは、無事逃げ切れただろうか？

じりじりと、いたぶるかのように距離をつめてくる。一歩下がれば同じように一歩。
自分たちが盾になって、逃がした新入りたちの姿はもう視界内にはない。
最初に遭遇した場所よりもかなり上の階まで、段を昇っている。時折氷の矢を飛ばしてくるが、単純な軌道のそれを防ぐのは容易く、深い傷を負うほどではなかった。近くにいる仲間たちもまだ動けないほどの傷を負っている者はいない。
が、氷の魔法で急激に下がる気温と強いられる緊張に、体力はどんどんと削られている。限界は近かった。

遊んでいやがる。

にやにやとした笑みを貼り付けた顔が忌々しい。
だが、ヴィルにはそれを止めさせる方法がなかった。
愛用の斧は、刃を強い力で引きちぎられ歪み、威力を期待できない。

「チィッ」

デモビアの何気ない右手の一振りが、鋭い氷の矢を作り出す。矢は集中を欠いたヴィルを襲う。
咄嗟に斧を盾に、矢の直撃を防ぐ。
無理やりな力技と、矢の衝撃に右腕に痛みが走る。矢を受けた斧の表面が凍りだす。

もう、使えねえか。

氷結部位が広がっていくのを見、ヴィルはデモビアに向けて投擲

した。
攻撃にもなっていないそれは、先ほどの一瞬で詰められていた間を再び空ける為のわずかな時間稼ぎであった。
後方の仲間のところまで下がる。
ヴィルの脇を抜け、仲間の魔法による炎の矢が飛んでいく。
効果は薄いが、足止めにはなった。

「どうする？」

魔法を放ったのとは別の仲間が声を掛けてくる。トレードマークの帽子も脱げ、金の髪が赤く染まっていた。

「ヨーン。あいつらは？」

「運が良ければ、今頃アーチ位には辿り着いてんじゃね？」

問いに答えながら、ヨーンは手にした魔道具をデモビアに向けて放る。
ヴィルたちと奴との間に氷の壁が一瞬にして生じる。
と、同時にヴィルたちは上へと駆け上がる。
壁はすぐに破られることだろう。だが、そのわずかな時間に距離を開ける。
その繰り返しで、ヴィルたちはここまで昇ってきた。
アーチを抜けることが出来れば、援軍も期待できる。
武器を壊され、ろくな攻撃手段が残されておらず防戦一方。
逃げに徹するしか、もう彼らに生きる可能性はなかった。

「後いくつだ？」

「3つ。ったく、大赤字だぜ」

駆け上がりながら、ヴィルが尋ねれば、ヨーンは嘆くように答える。
余裕を装うが、すでにヨーンの愛用の槍もガラクタと化し、無手となっていた。
万が一と持ってきていた使い捨ての魔道具だけが、今の彼の武器だった。

「きついな」

まだ先が長い階段に、弱音が漏れる。
しかし、諦めるわけにもいかなかった。懸かっているのは命なのだ。

下方で硬いものが割れる音が響く。
氷の壁が砕かれたのだろう。
予備の短剣を抜き、ヴィルは皆の殿につく。

「走れ！」

飛んでくる氷の矢を打ち払う。

「エメリ！」

打ちもらした矢が、脇を抜けていく

「《炎の矢》！」

犬耳のビスターが握る杖から炎が飛ぶ。矢は相殺され、靄が生じる。

視界が悪くなる。
が、それを気にしていられるほどの余裕は、ヴィルにも仲間たちにもない。
少しでも距離を。
だが、そんな彼らの努力をあざ笑うかのように影が、靄の向こうから飛び出してくる。
「くそっ」
近距離からの数多の氷の矢が、ヴィルに迫る。
さすがに防ぎきれず、四肢に突き刺さる。
動きが止まる。
追い討ちをかける様に、蹴りをくらい、壁へとぶつかる。
痛みに、たまらず声を上げる。
「ヴィル！」
ヨーンの声に、デモビアはヴィルから意識をそちらにうつす。
右手に凍気が集う。
まずい！
立ち上がろうにも、刺さったところから徐々に凍りだした四肢がヴィルの動きを封じる。
ヨーンが手の魔道具を投げようとする。
それよりも早く。一瞬にして、開いていた距離を詰めるとデモビアは、氷の刃を突き立てんとした。

「ヨーン！」

ヴィルの視界に、最悪の未来が映る。

ヨーンとデモビアの間に、詠唱を破棄したエメリが身体を滑り込ませた。

デモビアの動きは止まらず、鋭い切っ先がエメリの腹へと向かう。

デモビアの笑みが、一層いやらしく歪んだ。

ぐだぐだな戦闘

走る。

ヒジリは走る。

前方から傷だらけの一団から、殿としてヴィルたちが戦っていることを聞いた瞬間、制止の声を無視して走り出した。

ヒジリが感じたフラグの匂いは、死に関するものだった。

ならば、この先にいるというヴィルたちは死ぬだろう。そのままならば。

だから急いだ。

胸に埋め込まれた石の力を解放し、身体を強化。

一本道を抜け、上から落ちる水柱を中心とした螺旋階段を駆け下る。

急ぐ気持ちが身体を前のめりにし、勢いづいた。

「あばばばばっ」

足が止まらなくなった。

右足が地面に付いたと思ったら、勝手に左足が前にでる。螺旋階段自体は緩やかなカーブなので、今のところ壁や手すりにぶつかることはなかった。

しかし、止まろうにも濡れた床が足のすべりを良くし、一層勢いをつけることとなった。手にした大剣を床に突き刺せば、どうにかなるかも知れないが、今一気が進まなかった。

結果。

「うひゃひゃひゃぁ」

上下に揺れ、珍妙な悲鳴を上げながら駆け下りていった。

冷たい風が、下方から吹く。

血の匂いが混じったそれに、視線を下へと転じる。

そこには氷の矢に四肢を貫かれたヴィルが。

身体をくの字に曲げる勢いで蹴りを叩き込む何かの姿があった。

あれだ。あれが敵だ。

ヒジリの瞳が赤く染まる。

先ほどまで悲鳴を上げ、だらしなく開いていた口を閉じ、にたりと笑った。

視界に予知のノイズが走る。

見えた光景に、床を踏み抜く勢いで足を下ろし踏み切る。そして、勢いそのままに、斜め下の敵に向かって跳んだ。

「強襲直下爆撃！」

ヒジリの掛け声に、デモビアは刹那動きを止め視線を向ける。

大剣の切っ先は、ヒジリの狙いよりやや上方の喉に突き当たる。

食い込んだ衝撃のまま、後方へと倒れこんだデモビアは赤で満ちた目を大きく開いた。信じられないとでも言いたげな表情だ。

そして、大剣から手を離していないヒジリはそのままデモビアの上に膝をつく形になった。

ここで終わっていたら、それなりに格好良かったのだが。

残念なことに、ヒジリの勢いは消えておらず。また、デモビアの

体表が結晶に覆われていたことや床が濡れていたこと、場所が階段であったことなどが災いした。
デモビアを下敷きにヒジリはそのまま下方へと滑り落ちていく。

「ひゃあああぁぁぁ……」

悲鳴が木霊する。
最悪の状況から一転。
事態の変化に呆然としていたヴィルたちは、その声で我に返った。

「ヒ、ヒジリ！？」

ヴィルが慌てて顔を向けたが、もうヒジリの姿は見えなかった。
後を追うにしても、満身創痍な彼らがするにはまだ幾ばくかの時間が必要であった。

すごい勢いで、デモビアに乗って階段を滑り落ちる。
何も知らない者が見たら、目を疑う光景であろう。

「ていっ」

未だ生きているデモビアを殴りつけながら、滑っていく軌道を修正する。
首に突き刺さっていた大剣は、最初の抵抗で折られて使えない。
だが、力を解放したヒジリの拳は、鎧代わりの体表の結晶をたやすく砕き、痛手を負わせていた。
勢いづいた今、もう壁にぶち当たるか一番下の広場まで辿り着くしか止まれない。デモビアから落ちて階段オチネタをするつもりはなかった。
しかし、悪あがきをするしぶとい敵が、ヒジリの思惑を汲むなど

というサービスを持ち合わせているわけがない。
結局、曲がりきれずに手すりを越えて飛ぶことになった。

ヒジリに助けられた形になったヴィルたち。新入りが数人の兵士と見慣れぬ探索者数人を援軍として連れてくるまで、その場を移動できずにいた。
応急処置を施し終えた途端、緊張が切れたヴィルたちはその場に座り込んで動けなくなっていた。疲労が急激に襲ってきたのだ。特に、魔法を連発していたエメリは、気絶していてもおかしくないくらいだった。
せめて凍気だけでも何とかしようと、ヨーンが残った魔道具で火柱を生み出していなかったら、援軍が間に合うまで持たなかったかもしれない。
三人の顔色は酷く悪かった。

黒髪の小柄な女性が、そんな彼らの様子を見てすぐさま神聖魔法を掛ける。
優れた癒し手なのだろう。失った血までは戻りはしないが、三人の傷はきれいに塞がった。

「デモビアはどうした？」

女性の連れなのだろう長身の男が、一番元気そうなヨーンに尋ねる。
援軍としてきたのに肝心の相手がいないのでは気になるのも仕方ない。が、尋ねられた方としても、先ほどの光景が今一理解しがたかったので、ただ消えていった方向を指差した。

「追い返したのか？」

「いや、探索者が一人、奴にぶつかって、そのまま下に滑り落ちていった。大分経つと思うが、どちらも姿を現していない」

倒したのか。殺されたか。

ここからでは何も分からなかった。声も中心を流れる水にかき消されるのか、聞こえてこない。

そのままここにいても仕方がないので、援軍として来た者たちと同行を願い出たヴィルの代りにヨーンが下へと向かう。

怪我が治ったところで血を失いすぎたヴィルや精神疲労が酷いエメリは、新入りと共に回廊外へと帰された。

警戒しながら進めば、途中デモビアのものと思われる黒い血と砕けた結晶が点々とあった。

一番下の広場まであと半分となったころ、その痕跡は手すりへと向かい途切れた。

ここから落ちたのか。下を覗き込むが靄が掛かって今一状況が分からなかった。

ただ、戦っているにしては水音や自分たちが出す音以外聞こえてこないのは、そろそろ不自然であった。

懸念から、一行の歩みが遅くなる。

慎重に進み、もう少しで広場というところで人影が見えた。広場の中心で上がる水しぶきによる靄のせいで、姿が良く見えない。

緊張が走る。

「おーい、攻撃しないでー」

場にそぐわない間の抜けた声が響く。女性にしては低めのそれに

長身の男が一行の先頭に立つ。
声の主がデモビアであった場合、それはかなり危険な上位種である証明だからだ。
もっとも、そんな男の心配はすぐに打ち消された。

「ひーくしゅ」

人影は身体を大げさなまでに揺らして、くしゃみをした。
その隙に間を詰めれば、全身ずぶぬれの軽装の探索者の姿が男の目に映る。
その姿に、間抜けなさはあれど、デモビアを象徴するものはなかった。

「お前がヒジリか？デモビアはどうした？」

男の問いかけに、鼻をすすっていたヒジリは首を傾げる。

「デモビア？あれかな？何かババーンとぶつかったから、よく確認してなかったけど」

指差す先には、広間に横たわる何かがプディに群がられていた。
食われているのだろう。プディの色が濃く変わっている。
兵士の何人かが確認に向かう。

「お怪我はありませんか？」

摩擦で破れたのだろうズボンの膝を見ながら、小柄な女性が声を掛けてくる。
一瞬ヒジリは女性の胸を凝視した後、首を横に振って答える。そして訝しげな視線から逃れるように、ヨーンに近寄り、懐から大き

めな核水晶を3つ取り出した。

「なあ、あんた、ヴィルのとこの人でしょ？取りあえず奴から取ったんだけど、分け方どうする？あと、これも何か宝石っぽいけど売れそう？買取パンフに載ってないんだけど」

別に小声ではなかったそれは、周囲の人間の視線を集めた。

デモビアは恐ろしさ以外でも有名だ。

何せ彼らは、ある者たちにとって宝の塊と言えるのだから。

体表面の結晶は、一般的な魔物の核水晶と同質である。また、体内の核は基本買取価格が二桁違う。滅多に市場に出回ることはないが。

そして、真紅の眼球は魔道具の素材としても、宝石としても高値で取引される代物で、貴重な品である。物によるが一年は遊んで暮らせるだけの額が付くものもある。

他にも高額でやり取りされる部位があるが、それは専門知識であり、あまり知られていないし、大体が倒すのが難しい相手なので覚えている者も少ない。

「売れないなら、まあ綺麗だし、土産にするかなぁ」

「いや、売れるから。結構な高値で」

呆れた声で返す。

結果的に、自分たちをあれほど追い詰めた相手を倒したヒジリは、どうやらデモビアのことを詳しく知らなかったようだ。

そうだろうな。出なければあんな無謀な特攻はしないだろう。

ヨーンは納得しておく。

確認作業を続ける兵士を残し、疲れた顔をしたヨーンをつれて帰ろうとするヒジリに長身の男が声を掛ける。

「いいのか？まだ、結晶が大分残っているみたいだが」

指差す先には、兵士によって剥がされていく結晶があった。

だが、その作業は地味に大変そうであった。水溜りの中、にじり寄るプディの相手をしながらの作業は今のヒジリにはあまりしたくないものだった。それに一番高値が付くものはすでに採取済みなのだ。金に困っているわけでもないのに面倒くさく感じた。

欲しい人が持っていけば良いんじゃないか？

それを素直に言えば、男は今まで能面のように無感情だった顔に笑みを浮かべた。

「変な奴だな。お前は」

「そりゃどうも。まあ、ここまで来た手間賃でいいんじゃない？」

あまり嬉しくない評価に、ヒジリはあいまいな笑みで答えるしかなかった。

フラグの匂いを感じたのだ。

嫌な予感がした。こういうのは、外れないから嫌だった。

無事に帰還後、斡旋所にてあるギルド員と鑑定士の意味不明な叫びが上がった。

結局、物が物だけに鑑定だけされて買取を拒否された。

換金後、ヴィルたちと山分けにしようと思っていただけに、ヒジ

リとしては困った。確かに鑑定でつけられた金額は、今までの報酬額と桁が違っていたので、しょうがないのかなとも思うのだが。

ヴィルに言えば、助けられたのだからいらないと断られそうになったので、とりあえずデモビアの核を一つ押し付けた。眼球を渡さなかったのは、一揃いの方が、値が高く売れると言われたからだった。

この一件で、ヒジリの名は一気に広まってしまった。

それは『ガンビ』一都市に収まるものではなく、王都にまで届く勢いであった。

ぐだぐだな見舞い

「家を買った」

「え、なにそれ、こわい」

見舞いに行って、病人を怖がらせてれば意味が無い。

ヒジリが家を買おうと思ったのは、差し迫った理由などない完全なる思い付きだった。

折れた大剣の代わりを探しにうろついていた時に見た、売り物件の広告がきっかけだった。

何気なく目を通したそれに記載されていた値段。それを見て、ふと自分の所持金を省みて思った。

もしかして、余裕で買えないか？

実際に、宿の自室に戻って確認してみる。

今まで無造作に影へと仕舞っていた貨幣は、取り出してみればベッドの上に山のような形で大量に積まれた。

他にも換金していない核水晶があるので、不足があっても十分補うことが出来ると思った。

ここ数日、斡旋所に行くと一定額以上の買取を断られる。なので、核水晶はたまる一方だ。

まあ、ここにはゲームも漫画もアニメもグッズもトークライブも

イベントも薄い本もなく、そんなに金を使わないので特に問題はなかったのだ。
とにかく貨幣の量が多かったので、宿のアイドルであるアリアに数えるのを手伝ってもらう。
まだ１００まで上手く数えられないので、１０ごとに同じ貨幣を纏めてもらった。舌足らずの間延びした声で数を数えられると、単純作業にも耐えられた。
おなかが減ったので、途中で数えるのを止めたが。
それでも約１００万近くあった。かなりの大金のはずである。
宿の主人に相談したら、斡旋所に行けと言われる。翌日素直に向かったら、受付でおびえた顔をされた。

「で、それを俺に言ってどうするんだ？」

ジョージが不貞寝したので、ヒジリは同じ施療院に入院中のヴィルの元に愚痴りに来たのだった。
ヴィルは他の二人よりも、デモビアとの戦いで負った傷が思いのほか深く、また凍傷気味でもあった為大事をとって入院している。巻かれた包帯は痛々しいが、本人は元気で暇を持て余していた。
昨日までは仲間などで病室が賑わっていたのだが、チーム指名の依頼が入って皆出払ってしまった。　その為、朝から暇だった彼はヒジリの来訪を最初は快く出迎えた訳だったが。

「いや、家はいいのが買えたと思うんだけど。斡旋所の人たちの視線がさ、ちょっと変な感じで。先輩なヴィルさんなら何か知っているかなって思って。最近、あまり買い取ってくれないし」

困っちゃうよねー。
なんて、ヒジリが笑って言えば、ヴィルは苦い顔をした。
愚痴など聞かなければ良かったと思ったのだ。だが、聞いてしま

えば、何がしか忠告したくなる。
ヴィルは自分の性分にため息をついた。
「あいつらからして見れば、お前は要注意人物なんだろうよ」
「なんでさ。規約、破った覚えないよ」
心底不思議そうに顔を傾げれば、ヴィルの眉間の皺が深くなった。
「まだあれから１０日も経ってないから、動きがないだけで、デモビアの一件が王都に届いたら一騒動起きるだろうよ。数年前にも似たことがあって、あいつらはそれを懸念しているのさ。お前も覚悟しておいたほうがいい」
土産の果物をかじりながら、言葉を続ける。
旬のリンの実は、しゃりしゃりと音を立ててヴィルの口の中に消えていく。
甘い香りが部屋に満ちた。
「覚悟って何を？別に魔物を倒しただけで、そんな変なことしてないじゃないか」
「馬鹿かお前。高い買取金がつく核の持ち主は危険度も高いんだよ。そんな奴をまぐれとはいえ、フリーの探索者が一人で倒したんだ。噂になるだろうし、貴族連中が欲しがるに決まってるだろうが。黒髪に一応乙女だからな、お前」
「一応って、おい。なんか関係あるの？髪も別に東方では珍しくないでしょう？」

ヒジリが自分の髪を一房掴んで見せる。
特にこれといった特徴があるわけじゃない。上げるとするなら、まっすぐで癖がなく少々量が多い位か。
デモビアの時に会った女性は、思わず触りたくなるような見事な黒髪だったことを思い出す。
自分も結構気を使っているんだけどな。ヒジリは内心嘆いた。
二人ともあの後、そのまま会わず仕舞だったが、噂では神聖魔法の使い手で剣の腕も立つということだった。

「この国には黒髪の乙女の伝説があるから、そういう話が大好きな貴族連中にとっては美人じゃなくても、お前の外見は付加価値が付く。獲得にも熱が入るだろうさ。だから、チームに入っておけって忠告しといたのに」

ため息一つ。
ヴィルはやや大降りに、食べ終えた芯をくず籠へと放る。

「何気に失礼なこといってないか」

「おまけに異世界の人間っていう稀人だったら、帝国あたりからも勧誘がきたかもな。国に繁栄をもたらすって言う話だし。まあ、その点だけは良かったな」

ぽん、と大きな手で肩を叩く。
それはあまり慰めになっていなかったが、ヒジリは正直に言うのは止めた。
言ってしまえば、自分とジョージがその稀人であることを明かすことになるからだった。

「家を買ったっていうが、どこだ?退院したらチームの連中連れて

遊びに行ってやるよ。皆、あの時の礼をしたいって言ってるしさ」
場所を説明すれば、訝しげな顔をされる。
少々今の宿よりは不便な位置だが、そう悪くはない場所だったのだが。
不思議に思い、ヒジリが尋ねれば。
「確かそこらへんは宿が立ち並ぶ通りで、普通の家はなかったような気がするんだが」
「うん。元宿屋」
「何、考えてんだ？住むのは、お前と坊主の二人だろうに。広すぎだろう」
「あ、子供も買ったから大丈夫」
「はぁ！？」
正気を疑う発言に、ヴィルは思わず肩に置いた手に力を入れる。
鋭い爪が飛び出し肌に食い込む痛みに、ヒジリはとっさに振り払おうとする。
が、反対側の肩に背後から別の手が乗せられ、動きを止める。
正面のヴィルの顔が引きつるのを見て、ヒジリは己が背後の存在が怖くて見れない。
だが、そんなヒジリの感情を無視して、背後から冷めた声が降ってくる。
「ヒジリさん」

ここ数ヶ月。毎日のように会話した声は、いつもの癒しにも感じる暖かさなど一欠けらもない。

「その件、詳しく話していただけないかしら」

無理やり振り向かされれば、施療院兼孤児院の院長たる老婦人がそこに立っていた。

笑顔。

絶対に逃しはしないという意思が現れた笑顔が、そこにはあった。

何かを告げようにも、口は開くだけで言葉が出てくることもなく。

ヒジリは大人しく連行されるより他なかった。

ジョージは、もう正直言ってヒジリが理解できなかった。いや、はじめから理解していないが。

寝たきりだった弊害で、体力と筋力が落ちた身体では突っ込みもままならなかったから、せめてもの意思表示で不貞寝した。

唯でさえ、分からない事だらけなのに、同郷だという彼女の発言はジョージの精神を不安定にする。

ヒジリはジョージにこの世界のことを説明する割には、自分自身もそれを理解していないのだろう。いつかの会話で目立ちたくないと言っていたのに、彼女の噂は病室にこもりきりのジョージの元にまで届いてくる。

その全てが、ある人物をジョージに思い出させ、会話を続ける気力を奪う。似ているところなど無い筈なのに。

客観的に見て、厄介者でしかない自分をここまで親身に世話をしてくれる相手にこの態度はないと、ジョージ自身も理解していた。感情は別だが。

日がな一日、ベッドの上で過ごす日々は、嫌な記憶を呼び起こす。前向きに行こうという気持ちがくじけそうだった。
夕食を持ってきたアルトに、思わず愚痴ってしまうのも仕方ない。

「確かにちょっと変わった人だよね」

記憶喪失ということになっているジョージの世話を焼くアルトは、彼の愚痴を聞いてヒジリをそう称した。
ジョージの奇行は、記憶がないゆえと皆は受け流すが、ヒジリの奇行は少々目立った。特に金遣いの荒さは、清貧を旨とするここの人にはやけに目に付く行為だった。

「さっきも、先生に叱られてたよ。言い方が悪いって」

笑いながら言うアルトは、先ほど自分が見た光景を話す。
長身なヒジリが自分より頭一つ以上小さな老婦人に叱られている様は、確かに笑いを誘うものだろう。
思い描いて、ジョージも笑う。

ああ、やはり彼女はあの子とは違う。あの子は決して叱られることがないのだから。
そして、あの子はここにいない。なら、自分は。

アルトの笑顔に、ジョージはふと思った。

甘えてもいいのだと。

利用するもされるも

大通りで、一番大きな宿の一室。
最も日当たりのいい部屋の窓際で、男は見事な細工を施された煙管を手に外を眺めていた。
男の連れは今頃進言どおりに、回廊を探索していることだろう。
経験はなかろうが、彼女の才は誰もが認めるものだ。護衛も付いていることだし、身の危険はないだろう。
ただ男は、自分が彼女の身を案じる権利がないことを知っていた。
哀れな老人たちの手駒である彼女を哀れと思う。が、自分もそんな彼女を利用しようとしている身だ。
彼女のことが嫌いな訳ではないが、それよりも大事な存在がある。その為に彼女を犠牲にしようとするのだから、男は努めて彼女のことを事務的に扱う。
この国ではあまり見かけない衣服に身を包んだ男は、感情を表に出すことなく情報がもたらされるのを待った。

男が待つ情報とは、先日回廊内で出会った一人の探索者のことだった。
喜劇のような成り行きでデモビアを倒して見せたその人物とは、わずかに一言交わしただけの関係。興味はあったが、他国でのこと。その場限りのものになるはずだった。
あれから数日。広まる噂に男は、その人物に改めて興味と利用価値を見た。
デモビアを倒したものは多かれ少なかれ噂になる。多くの財を手に入れるからだ。
まして、この国で黒髪の女性が武勇を示せば、それは伝説に結び付けられやすくなる。

神話を別としても過去に二度、神への祈りから黒髪の乙女が神子として、この地に遣わされ、滅亡の危機にあった国を救っている。幼少から聞かされ続ける英雄譚に、この国の人々は染まっている。

ヒジリという探索者が、もし男の連れのような外観だったら、今ある噂はもっと大きなものになっていただろう。生憎というか、彼女の外観は装備のせいもあるが、男と思われやすい。彼女を直接知らぬ者は、伝説を彼女と結びつけることはない。男とて、この街で雇った者が言うまでは自身の勘違いに気づかなかった。

彼女を女性と知るギルドの方は数年前のような騒ぎを恐れてか、噂を煽る様な者はいなかった。

今のままなら、ヒジリという探索者が有名になる。中には仕官を持ちかける者もいるかも知れないが、それだけで終わる話だ。

もっとも、男にはそれで終わらせるつもりはなかった。

男の連れの少女、シュヨンに剣聖を継がせる。

その目的の為にも、この噂を利用するつもりだった。

噂が広まり、シュヨンを支持するものが増えれば、剣聖の座は彼女のものとなる。そして、老人たちの思惑はつぶれる。

継ぐのに足りないのは、実績だけなのだ。それさえ補えれば、シュヨンが老人たちに駒とされる事もない。男への干渉も減ることだろう。

黒髪の探索者が、『金虎』を追い詰めたデモビアを一人で討ち取った。

噂は概ねそう流れている。中にはヒジリの名前が出ているものはあるが、たいした問題ではない。

あの日、回廊に男とシュヨンがいたことは探索者の多くが目撃している。この国では珍しいオウカ風の装備を身に包んだ二人組みだ。

遠くからでも目立つことだろう。
だから、後はヒジリという探索者よりもシュヨンを印象づける。
噂の当事者を摩り替え、生み出すのだ。
黒髪で、探索者の、乙女を。
英雄を。

その為にも、男は待つ。
ヒジリの情報を。

男は口の端を上げ、嗤った。

「探索に行っておいで。良い訓練になろう」

兄と慕うアンジエンに言われて、シュヨンは今日も回廊に向かう。
大叔父様たちに言われて旅に同行したのは良いが、道中はつつがなく進み。アンジエンの身の回りには多くの世話役がおり、何の役にも立てていないと思っていた少女にとって良い気分転換になっていた。
最初の日、初めてだからと一緒に回廊まで付いてきてくれたのは良かった。が、結局デモビアの一件でその日は終わってしまった。珍しく二人きりだったというのに、殺伐としたやり取りだけの会話しかなかった。しかも、一人で倒したという探索者に笑いかけたアンジエンに、ひどく不満を感じた。
シュヨンはアンジエンが感情を表すのをほとんど見たことがない。
祖父に稽古をつけてもらっていた時も男はその表情を崩すことは少なかった。ましてや笑みなど見せはしなかった。
さすがに家族には表情を崩すことはあるのだろうが、少女は見た

ことはなかった。
なのに、あの人はあの短い間にアンジエンの笑みを引き出した。
何故？何故、私には笑いかけてくれないのだろう。
悩むシュヨンは先のアンジエンの言葉に、答えを得た。
強くないからだ。
あの人は最悪の敵と称されるデモビアを倒した。
強い。
そうアンジエンが認めたから、彼は笑いかけたのだ。
そう考えれば、彼が近くに置く人々も強いといわれる人が多いことにシュヨンは気づいた。
アンジエン様は強い人が好き。
短い時間でそう決め付けたシュヨンは、彼の進めどおり一介の探索者として回廊を進む。
剣聖と呼ばれる祖父の血か。シュヨンの剣の腕は、年齢に見合わぬものだった。
間合いに入ったものは、たった一振りで死ぬ。
カッパーへと昇格した途端、依頼も受けずもぐり続ける。実践を積むごとに、少女は強くなった。
でも、まだだ、とシュヨンは考える。この程度ではアンジエンに認められるわけがないと。
認めてもらおうと勝負を挑んでも、自分はアンジエンに負ける。
生まれが違えば、剣聖を名乗るのにもっともふさわしい人なのだ。
きっとアンジエンに勝てるのは、当代剣聖である祖父か。

その域にはまだ遠い。いや、辿り着くのは無理だろう。
ならばどうすべきか。
あの人のようにデモビアを倒して示せばいい。そうすれば、アンジエンの周りの人々と同程度には見てもらえるのでは。
そう考え、今日もシュヨンは回廊を進む。
その考えを否定するものはいなかった。

リカルダはうなだれる。
正直、この依頼は断るべきだったと。

街に帰ってきてすぐに、ヴィルを始めとしたチームメンバーがデモビアに襲われたことを知った。
留守を任せていた副リーダーのヴィルが一番の重症だったが、命に別状がなかったことに安堵した。
彼には安静を命じ、他の仲間と共に仕事をさがしていた時にチーム名指定で依頼が舞い込んできたのだった。
内容は簡単で、探索者になったばかりの少女を一人護衛することだった。
たった一人にチーム一つ指定するとは、大げさだと思いはしたが、報酬の良さに受けることにした。
ヴィルだったら何がしかの裏を疑うところだが、ギルドの上層部から懇願に近い形で依頼されたら断るわけにはいかなかった。
どんなに名を売ったところで、一介のチームがギルドに喧嘩を売れるわけがない。
それで受けた依頼だったが、正直後悔している。

シュヨンという少女は、オウカ風の装備に身を包み、腰に大層な

刀を差して待ち合わせ場所に立っていた。
桜色の頬に大きな黒目。美少女といって過言ではない容姿に小柄ながら女性的な身体。
チームの男性陣は、そわそわとしだし、女性陣に容赦ない突っ込みを入れられている。護衛対象の前ですることではないと、戒める立場だったが、リカルダは尻尾が総毛立つのを隠すのに必死だった。
目が怖かった。
まだ、血を浴びたこともないだろうに、その目は既に血を知っていた。
そう感じた。理屈ではなかった。
そして、その感は嬉しくないことに外れず、回廊内での魔物との遭遇で発露した。
躊躇のない一撃。
抜かれた刀は瞬く間に、目の前の魔物の命の源を絶つ。
その場にいたチームの誰も気づきはしなかった。が、リカルダは気づいた。
魔物が最後の息を吐いた瞬間。
少女が目を細め、嗤った。
それは、すぐに消え、少女を褒めるチームメンバーの言葉に照れた表情になった。

自分だけが少女に恐怖を感じた。
だが、目さえ直視しなければ、それは耐えられるものだった。チームの誰も少女のそれに気づかず、幼いながらの凄腕を褒めていた。
確かに凄い。少女の年齢を考えれば、ここまでの実力は普通身に付かない。
回を重ねるごとに目に見えて上達する腕前に、正直護衛など必要ないんじゃないかと思うくらいだ。
そう思うのはリカルダだけではなく、チームの仲間も酒場などで他の探索者相手に話しては同意を求めている。剣を振るう者として

何か思うところがあるのだろう。守秘義務に関しては受領の際記されていなかったので、問題はない。
それになんせ黒髪の美少女だ。この国出身の探索者にとって、興味が沸くのだろう。話題を振られることも多かった。
だがら、滅多にない入院で退屈しているであろうヴィルの下に、リカルダが見舞いに行ったときも自然少女の話題になった。
リカルダが頼りにしている男は、野生的な外見に反して心配性なところがある。そしてその心配は大体が現実となった。
そんな男が話を聞くと、渋面を作って言った。

「やっかいなことに巻き込まれた、と思う」

はっきりしない物言いに、リカルダは不安になった。
ひげを震わせ、尻尾を揺らす。

「いや、別にリーダーが悪いわけじゃない。ただ、噂がな」

『金虎』を助けてもらったお礼に、『白の猛虎』が黒髪の乙女の護衛をしている。
そんな噂が施療院にまで届いたという。会う人間が限られているヴィルにまで届くくらいだ。かなり広範囲に広まっているだろう。
事実は違う。
ヴィルを助けたのはヒジリという探索者だ。その彼女は最近、私事に忙しく回廊に向かうことが減ったという。
だからだろうか。
今まで毎日のように通っていたヒジリが通わず、別の黒髪の女性シュヨンが回廊に日参している。
顔を知らない他の探索者が勘違いした。それが噂を生み出したのだろう。

「なんでそんな噂が。こっちは依頼で……」

推測はできるが、リカルダには何の救いにもならない。
最初からこの依頼が普通ではないことに気づいてはいたのだ。

「さあな。ただ、噂が広まるのが早い気はするな」

ギルドの上層部からの指名。それも懇願という形で。
それにどういう意図が込められていたのか。
それはリカルダには分からない。
だが、言えることは一つ。
この依頼は受けるべきではなかった。

両手に幼児

院長の説教から開放され、施療院からでたヒジリは大きく伸びをした。

太陽は真上から大分下ったが、まだ空は青い。

来た時は、まだ太陽は昇りきっていなかったので、結構な長居をしたようだ。

急患が入ったので、とりあえず説教の続きは明日ということになった。ので、正直気が重い。ヒジリ自身も自分の物言いが悪かったことは自覚している。その点については仕方ないと諦めるしかない。

しかし今、それとは別の問題でヒジリは少々イラついていた。

最近、自分を観察する視線を一日中感じるのだ。

デモビアの件から、ギルド周辺での視線は嫌な感情のものが多く混じるようになっている。それだけならまだいい。手を出してくるような馬鹿相手なら相応の態度で挑むだけだ。

だが、その中に一定の距離を保ちながら、視線を向けてくるのがいた。意図の分からない事務的なそれに、どう対処してよいかそういった方面は場当たりなヒジリには検討もつかなかった。

予知を試みても知らない女が見えたり化け物だったり、複数のヴィジョンが浮かび定まりはしなかった。何がどうつながるのかも分からず、考えるのが面倒になる。

ヴィルが言うとおりの勧誘とかなら、その内向こうから反応があるだろう。

そう思い、ヒジリは今も感じる観察する視線を無視することにした。

深呼吸一つ。

気分を入れ替え、足を屋台が立ち並ぶ通りに向ける。

宿に待つ子供たちの土産を買おうと思ったのだ。

石畳が茜色に染まる。
ヒジリが見慣れた宿の扉をくぐれば、食堂で遊ぶ子供たちを夜の仕込みをしながら見守る主人の姿が見えた。

「ただいまぁ、と」

「おかえり。今日は早いな」

声を掛ければ、主人は笑ってヒジリの差し出す土産を受け取る。
土産は芋と豆の二種類の蒸しパンで、まだ温かさが残る。素朴な甘みと手ごろな値段で、定番の子供のおやつだ。

「まあ、偶には探索に行かない日もあるわな。おーい、お前ら、ヒジリちゃんのお帰りだぞぉ」

視線の先には、主人の娘のアリアと説教の原因となったフレートとハンナの兄妹が遊んでいた。
何が楽しいのか三人でモップを取り合いながらぐるぐるとしていたので、ヒジリはひょいと一番幼いハンナを持ち上げてみた。

「きゃあぁ」

急に高くなった視界に、ハンナは声をあげ、その後きゃらきゃらと楽しげに笑う。
喜ばれてしまったので、ヒジリはハンナのお腹に顔を埋め、ぶうぅっと音が出るように勢いよく息を吹きつける。
音か、息か、どちらが面白いのかハンナの笑いは止まらない。

容赦なく小さな手でヒジリの頭を叩く。痛くはないが、叩かれる度に髪はぼさぼさのぐちゃぐちゃになっていく。

「ハンナをはなせぇ」

ハンナの笑い声にフレートは引っ張り合っていたモップを放り出し、ヒジリの腹を目掛けて殴りかかってくる。当たっても大して痛くないそれをくるりと回って避けた。

ヒジリの腕の中のハンナは、変わる視界が楽しいのか笑い続けている。

「わたしも抱っこ。抱っこぉ」

宿のアイドル、アリアも先ほどまで夢中だったモップを放り、ヒジリに向かって両手を広げてねだる。

あっという間に、ヒジリを中心に三者三様にはしゃぎだし、客のいない食堂はにぎやかになった。

フレートとハンナの幼い兄妹は、ヒジリが買った家の前の持ち主の遺児だ。

どういった経緯があったのかは知らないが、スラムで暮らしていたフレートたちは、家が他人の手に渡ることが理解できなかったのだろう。家の前で騒いでいたところをリフォーム作業の様子を見に来たヒジリに捕獲された。

宿に連れ帰り、暴れるのを無理やり押さえつけて世話を焼いた。身寄りがないのを知って、ちょっとした交渉をヒジリは思いつき実行した。

5年。

フレートがそれだけの期間、ヒジリの命令に従えば家を譲ると。

まだ五歳でしかないフレートはまんまとヒジリの口車に乗って、

ヒジリが速攻で用意したいい加減な契約書に署名した。
ヒジリは二人部屋に移り、今日は宿の主人に二人を預かっていてもらった。また、家の前で騒がれても困るので。

思いつきの成り行きから一緒に暮らすことになったが、敵対心を顕わにしてからかわれるフレートに対し、ハンナの方はヒジリに懐いていた。
夕食を食べるヒジリの膝の上で、食べ物を口に運んでもらったり、自分が掴んだものをヒジリの口に押し付けたりもする。
フレートも、食事は大人しく食べている。ただ、まだ上手く食べられなくて口の周りを汚しては、ヒジリにぐいぐいと手荒に拭かれていた。その度に、顔を真っ赤にして喚くが。
アリアもその輪に加わり、食堂の一角で時間を掛けて食べていれば、後から来た他の宿泊客たちにからかわれた。

夕食後、子供たちを寝かしつけたヒジリは改めて食堂で一杯やっていた。
食堂に残っている者もヒジリと同様に酒で満ちた杯を傾けており、各自思い思いにくつろいでいた。
探索者向けの宿だけあって、他の客もそれなりに体格の良いものばかり。今日の反省や明日の予定など話していた。

「珍しいな、お前が酒を飲むのは」

ちびちびと甘い果実酒を飲むヒジリの席に、主人がつまみを載せた皿を持ってきた。
若い時に大怪我をしたとかで、不自由な右足をかばうように歩く。元探索者だという主人は、右頬に目立つ傷跡があり一見強面だが、笑った顔がアリアとよく似ている。外見は男性だが、アリアを生んだのは彼女である。

マジクリングというやつで、男性寄りに成長していたのに怪我のときに使った薬の影響で内部が一気に女性へと分化してしまったのだとか。普段は外見から男性として通しているという。
よろめいた時、支えた拍子に胸を揉んでなかったら、きっと気づかなかったとヒジリは思った。

「んんー、偶にはね」

主人は皿をテーブルの上に置いてそのまま去るかと思えば、開いた席に腰を下ろす。
自分の酒癖が良くないのを知っているヒジリだが、嫌な視線の件でちょっと飲みたくなったのだ。見られて嫌だからと暴力で解決するわけにもいかない。

「で、どうするつもりなんだい。あの子達」

「どうするも約束したからね。一緒に暮らすけど、それが？」

院長に散々説教された内容をぶり返され、ヒジリは口を尖らせる。
すねた表情に、主人は手を横に振って笑う。

「いや、悪いと言っているわけじゃないけど。子供だけ残して探索に行くのは無理だろう？」

確かにまだ幼い二人を残していくのは、何かあるかもしれない。ジョージが退院するとは言え、ジョージ自身もまだ子供で、病み上がりでもある。面倒を見切れないだろう。
さりとてヒジリにいい考えがある訳ではない。

「院長に、留守番できる人を紹介してもらったらどうだい？」

腕を組み悩むヒジリに、主人は助言する。
普通なら、人材募集とかは斡旋所が取り扱っているので、それなりの手数料を支払えば希望に沿う相手を紹介してもらえるだろう。
だが、ヒジリは最近の斡旋所の空気に愚痴をこぼしていたので、主人は顔が広く、彼女が知っている人物を挙げてみる。
説教された相手に頼むというのもなんだが、この辺りで院長は結構な顔役だ。説教をしたことからも考えて、きっとフレートたちのことを案じて、いい相手を紹介してくれるだろう。
それに最低でも孤児院から誰か雇うことが出来るだろう。そろそろ成人になる子もいるだろうから、幼ささえ目をつぶれば院長が育てた子供たちだから、心配はないだろう
そう思ってあげた名前に、ヒジリはつまみを食べながら考え込む。

「それって、住み込みとかでも大丈夫かなぁ？」

「実際に聞いてみないと分からないが、お前の方は家が広いから問題ないだろう。支払う報酬とか条件次第だと思うが？」

宿屋といっても建物の大きさは様々あるが、ヒジリが購入したのはこの宿と変わりない大きさだ。
部屋数だってそれなりにあるのだから、住み込みで数人雇用してもスペースの問題はないだろう。
給金だって、今までのように稼げるなら十分支払いは可能だ。

「まあ、詳しいことは院長と相談してみろ。あの人は怒ると怖いが、誰よりも頼りになるさ」

他の客に呼ばれた主人は、言うだけ言った後、席を立つ。
残されたヒジリは、残った酒を煽ると二階の自室へ戻った。

翌朝。
腹部に重みを感じて、目を開ければフレートが右側、ハンナが左側からヒジリに抱きつくように眠っていた。
二つあったベッドの内、昨日寝かしつけた方のベッドはぐちゃぐちゃになったシーツがこちらに繋がるように引っ張られていた。
いつの間に潜り込んでいたのだろう。
ヒジリは気づかなかった自分に苦笑した。とりあえず、酒のせいということにする。
幸せそうに寝ている二人を起こすのも可哀想だが、日が窓から差し込み既に朝だということを示している。
どうしたものか。
身じろぎできず、ヒジリは固まる。

ぐうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ。

方法を考えていれば、ヒジリの腹が自己主張をした。
振動と音に、頭をくっつけていた二人はびっくりしたように目を開ける。
何が起こったのかわからない、といった表情だ。
しばしの間。
二人の顔は見る間に歪み、ぐずりだす。

「え？え？え？」

慌てて上半身を起こしなだめるヒジリだが、気分よく寝ていたところを起こされた二人の機嫌は直らない。いや、どんどん機嫌は悪

くなっていく。

「ちょ、ちょっと勘弁してよー」

泣き言を言いながら、二人を抱えてヒジリは主人に助けを求めるべく一階に向かう。

どたどたと慌しい足音に廊下にいた他の客から注目されるが、かまってはいられない。

なんとも幸先の悪い朝であった。

二人の弟

西にロスロリアス。東にリグオウカ。
二つの大国に挟まれる形で存在する小国群の中で、もっとも古い歴史を持ち、多くの回廊都市を有するペルセディア。
この国には一つの伝説がある。
黒髪の乙女。
そう呼称される三女神が祈りに応え大地に遣わした神子は、黒い髪黒い瞳乳白色の肌で見慣れぬ服を身にまとう。神より授かりし奇跡の力で、苦難にあえぐ祈り子を救ったという。
乙女の祝福を受けし者は、栄光を手にしたとも言われる。歴史書にはペルセディア滅亡の危機に瀕した時、後世に英雄と語り継がれる者の元に現れ共に戦ったことなどが記されている。
もっとも、黒髪黒目など東方には多くおり、多種多様な者が集う回廊都市を中心にこの国でもその様な外見の女性は多い。英雄譚に憧れ、自ら髪を染めるものもいる。
だから、王都、それも城内にその様な容姿の女性が出入りしていても、何も問題はない。はずだった。

城内の一室。中庭の噴水が見下ろせる位置にあるその部屋は、王の第一子ジークリンデが執務に使用している。
多くの蔵書が整然と並ぶ本棚に囲まれた大きな執務机には、大量の書類が積まれている。豪奢な椅子に深く腰掛け、目頭を軽く抑えたジークは、深いため息を吐く。
カーテン越しに柔らかな日差しが入り込んで、室内は明るい。だが、それを浴びるジークの顔には疲労の影がこびりついていた。
怠惰な王は、今頃愛妾か宴席で仕事を忘れて楽しくやっているのだろう。本来、ジークの権限では処理が出来ない類の書類まで通常

業務のものに混じって、机に山を作っている。王からの委任状が裁可印と共に来ている以上、それもジークの仕事となっている。
昨年、寵愛されていた側妃がなくなってから、王の怠け癖は酷くなる一方だ。正妃が留守にすれば、もう誰も咎め様がなく、女か酒に耽る日々だ。
お陰で宰相や大臣でもなく、来年にはこの国を出て行くジークにまでこうして仕事が割り振られる。
それに加えて。

「姉上、ニコラウスです。入室してもよろしいですか？」

ぼんやりと思考の渦に飲まれていたジークに、扉の外から声が掛かる。
それに応えれば、華やかな金髪のまだ幼さが残る少年が部屋へと入ってきた。その後を女中がワゴンを持って付いて来る。ワゴンからは良い匂いが漂い、あっという間に室内を満たす。

「ニコラ、それは何かな？」

「忙しいといってすぐに食事を抜く姉上と、一緒に昼食をと思いまして」

満面の笑みでそう言い切られ、ジークは苦笑した。集中すると食欲が無くなってしまい、つい食事を抜いてしまっていたが、それが弟に気づかれているとは思わなかったのだ。

ニコラウスは王の第三子で、正妃を母に持つ。正妃譲りの明るい金の髪は、彼の容姿を一層華やかに魅せている。
彼が生まれたことにより、ジークは王子として生きる必要が無くなった。マジクリングの身はこういう時に便利で、男で定着してい

た身体を薬によって、継承権の優先順位が低くなる女性へと変質させた。そして、来年ニコラの成人の儀を終えた後、ジークは同盟継続の為、隣国の王家に嫁ぐこととなる。

「分かった。これを仕舞ったら、一緒に食べよう」

机の上に広がる史料を手にし、ジークが言えばニコラはそれを手伝った。

先ほどまで無かった食欲だが、一緒に食べる相手がいることで思っていたよりも食は進んだ。用意された料理はどれもジークの好物ばかりで、ニコラの歳に似合わぬ気遣いにジークは思わず笑みを浮かべた。

食後、引き出しに仕舞っていた薬を飲むのをニコラは顔を顰めて見ていた。

「どうした？ニコラ。そんな顔をして」

「いえ、姉上。何でもないです」

「そうか」

ジークはそれ以上問わなかった。

ジークが今の状況を是とするまでに時間が掛かったように、ニコラもまた内に抱えた問題を解決するのは時間が掛かることだろう。何を気にしているのかは凡そ知ってはいたが、彼が助けを求めない限り、それに触れる気はジークには無かった。

「それにしても、いつ来ても姉上の机の上は書類で埋もれていますね。僕も手伝えたら良かったのですが」

眉間の皺が失せ、いつもの表情に戻ったニコラは執務机の縁に手を置くと、ジークの方をみてすまなさそうに言った。
きらきらと、カーテンから漏れる日差しがニコラの髪を一層輝かせる。きらめく光の輪がまるで冠のようで、次期王たる彼を天が祝福しているようだとジークは目を細めた。
ニコラには自分には無い母や後ろ盾がある。彼を支える者は多く、自分がこの国からいなくなっても困ることは無いだろう。

「ニコラ、貴方が気にすることではない。成人の儀を終えれば嫌というほどこなさなければならないのだから、今は私や大臣たちに任せておきなさい」

だが、それでも弟を案じる気持ちがジークにニコラの頭を撫でさせた。

ニコラが退席し、執務室にはいつもの静けさが戻った。
ジークは再び執務に戻ると、そのまま集中し始め、気づけば差し込む日差しは陰り、室内は薄暗くなっていた。
また、やってしまったと内心苦笑しながら、ジークはペンを置き、明かりをつけようと席を立つ。
ノックの音。
一定のリズムを刻むそれは、特定の者だけが使う合図のようなもの。
名を問いただすことなく、ジークは入室の許可を出す。
音を立てぬように、ゆっくりと開かれた扉から入ってきたのは、濃紺の騎士服に身を包んだ青年だった。手にしていた厚い封書をジークへと渡す。

「ご苦労、ライムント。少しそこで待っていてくれ」

明かりをつけてソファを指し、ジークは己の席に戻った。ライムントは指されたソファに腰を掛けると、足を組み、再び声が掛かるのを待った。

渡された資料を読み進めれば、眉間に皺が出来、読み終わる頃には呆れたような表情に変わった。

「これは、これは……」

右手で顔を覆う。何と言っていいのか分からなくなった。ジークの予想を超えた馬鹿げた事実がその資料には記されていた。

そして、口を二三度開いて言葉を探したものの、机に肘を突いて組んだ両手で顔を隠し、うなだれた。

ジークがライムントに頼んでおいたのは、ごく私的な調査だった。ライムントは騎士だが、特異な仕官事情から、ジークの私兵とも言える立場だ。そんな彼の調書は簡潔にまとめられており、理解しやすいものだ。読み違えなど起こりえない。ゆえに、あまりの内容に絶句する。

母の喪に服していたはずの弟、クリストフが最近城へと連れてきた少女。この国の者とは違う顔立ちに奔放な振る舞い。おまけに黒髪黒目という目立つ特徴に、ジークは放っておく訳にもいかず、少女について調べてもらっていたのだが、それに単純には終わらない情報が付随してきた。そしてそれはジークの手に負えるようなものではなさそうだった。

事実、ライムント一人で調べたにしては、与えた期間に比べて内容が深い。途中から、あの宰相の手を借りたのだろう。

深いため息。

肺の中の空気を全て出し切るかのようなそれに、ライムントも気

の毒そうな視線を向ける。
資料を書いたのはライムントであり、それを読んだジークの心情は簡単に察せられた。

「……ライムント、宰相はこの件に何と？」

「はい、ジーク様に一任すると」

その言葉に、随分と自分を買ってくれているらしい宰相の嫌味な顔が、ジークの脳裏に浮かぶ。
あの宰相のことだから、きっとジークがどうしようと、最悪の事態だけは回避するよう手を打っていることだろう。そういう人だ。
ならば、ジークがすることは一つ。愚かな弟クリストフの不始末をニコラウスが負うことにならぬようにするだけだ。

「まずは儀式に使われ失われた龍珠の代わりを入手しないといけない。これがないと来年の式典が行えないからな。ライムント、大変だろうが頼む」

ドラゴンの核。龍珠。
最強の呼び名をもつ生物が持つそれは大規模な魔術儀式などに使用される。
クリストフはよりにもよって来年の式典に使用する為、『ウケイ』の神殿にて聖別し保管されていたものを持ち出し、使った。
使用したことも問題だが、行った儀式やそれによる結果なども国の災いの種となってしまった。
謝って済む問題ではないが、彼一人でここまで大それたことが出来るわけがない。背後には誰がしかの協力があったのだろう。それが、神殿関係者か帝国よりの貴族かまでは今のところ調べ切れてはいないようだったが。

失われたものの代わりを直ぐに手に入れないといけないが、ドラゴンの龍珠は滅多に市場に出回ることが無い。確実に手に入れるなら凄腕の探索者に依頼を出すことだが、依頼相場が最低１００万では悪目立ちすぎて要らぬ憶測を呼ぶ。

今でさえ名ばかりの王子であるクリストフはこの件が表ざたになれば、最悪死刑となりえる。

さすがにジークは兄弟として、そこまでの罰を与えたくは無かった。

だが、その為にライムントに死地に向かえという命令を出すのもまた気が引けた。例え彼がどんな凄腕でも安全を確証する者などドラゴン相手には無理なのだ。しかし、彼以上の適任者をジークは知らない。

「『ウケイ』は駄目、だろうな。きっとクリストフの協力者がいる。他の回廊都市に誰か伝手はあるか？」

顎に拳を当て考えるジークに、ライムントは口の端を上げ、答えた。

「今なら『ガンビ』にジエン様が滞在していらっしゃいます。かの人と昔の仲間の助力を得られれば、春までに間に合うかと」

「『ガンビ』に？本来ならもう少し北の都市にて年を越されるご予定だったのでは？」

手紙にて伝えられた話と滞在先が違い、ジークは首を傾げる。

「確かに予定ではそうでしたが、こちらでも星見の託宣からは外れない、と言われ、身分を偽り、探索者の真似事をなさっているとか。例の『黒月姫』は同行の者だそうで、オウカでも名家の娘だとかで、

腕についてはジエン様のお墨付きです」

『黒月姫』。

デモビアを討伐した探索者の噂が王都の貴人たちの下に届いた時、よく上げられた呼称である。ただでさえ目立つオウカの一団に属すなら、噂の広まりも早かっただろう。

こちらも黒髪黒目の少女で、貴人たちの噂話によく登場した。さすがに他国の名家の娘では、獲得に動く者も少ない。

もっとも、ジークはデモビアを倒した探索者が違う者だと知っている。

これまた黒髪黒目で、『白牙鬼』という呼称が定着しそうな人物らしい。鬼が含まれる呼称など、あまり褒められた人物ではないのかも知れない。まだ幼い子供を侍らして悦に入っているなどとも聞く。

すべては、執務の合間にライムントと交わした他愛も無い噂話による知識だ。しかし、ほぼ事実なのであろう。

目の前の男が、妻子のいる『ガンビ』で起きた出来事に詳しくないことなどありえないのだから。

「まあ、お前が文句を言わないなら、この件に関しては一任する。他の問題はこちらで何とかするから、専念しろ。必要なものは出来る限り用意する。報告は怠らないように」

言わなくても分かるだろうことまで口に出すのは、ジークに余裕が無いからか。

ライムントは短い了承の言葉を述べると、まだ仕事の残るジークの執務室から退室した。

「覚悟を、決めておかなければいけないな」

背もたれに寄りかかり上を向けば、天井の染みがジークの目に映る。

仕事をする気が湧かなかった。

男であることを否定され嫁に行く自分と、王になれないことを決定され飼い殺しにされる弟。

笑いあえていた過去がある分、これから自分が招き入れる未来に、ジークは暗い気持ちになった。

訓練所で訓練

宿の主人の言葉に従い、説教後の院長に尋ねてみたら、二人の少年を紹介された。

一人は、施療院の手伝いをしていて、よくジョージの話し相手になって見知っていたアルト。

もう一人は、ひょろりとした赤毛のハーフエルフで、アルトとは孤児院でずっと一緒だったというザヴィエ。

ジョージと同年齢の少年二人で、大丈夫かと首を傾げるヒジリに、院長は穏やかに太鼓判を押した。

住み込みで子供の面倒を見るのなら、もうすぐ成人する二人でも十分任せられると。ただ、二人とも未分化のマジクリングなのでその点だけは気を遣ってあげて、と親の顔で言われた。おっぱいが大きくなるんですね、と聞いたら、説教より早く教育的指導の拳が飛んできたが。

この世界の住民、しかもこの辺りの顔役といわれる人物がそういうなら、とヒジリは納得した。

実際、アルトとザヴィエの二人はフレートたちの面倒をよく見て、ヒジリが留守のときもしっかりと仕事をこなした。穏やかな笑みのアルトと無口なザヴィエ。この二人にフレートたちも懐き、特に問題も起きなかった。

ジョージが退院して、６人の共同生活が始まった。

ヒジリたちが異世界に来て、早４ヶ月。

カレンダーは１２月から１３月に変わろうとし、冬が本格的に訪れ始めていた。

ヴィルが指摘したような勧誘は、アリアの父親が一度、主から言付かった、といって、封蝋がされた手紙を持ってきたくらいだ。

内容は、雇用される気があるならこの手紙を持って屋敷まで来て欲しい、ということだった。もちろんヒジリは行かなかったが、映画の小道具みたいで、記念にと影へと仕舞った。
後は、どこから聞きつけたのかデモビアの眼が欲しい、とオウカの商人が直接買い付けに来て、ヒジリの懐が異様に暖かくなった。ちょっとの散財など問題にならない額だった。
そこで、ジョージの体調も言いようなので、ヒジリはしばらく探索を休んで、彼ら三人を訓練所に通わせることにした。

冷たい北風が吹く中、ジョージとアルトと、少し遅れてザヴィエの三人は、訓練所に向かっていた。

「ところで、訓練所って何？」

未だ異世界に慣れぬジョージは、記憶喪失ということになっているのを利用して、アルトに訓練所について聞く。
ザヴィエに聞いてもほとんど単語で返してくる為、こういう説明を必要とする時、ジョージはアルトを頼る。

「訓練所は、迷宮探索に役立つ様々なことを学べる施設で、年間利用料を支払えば誰でも利用できるよ。もっとも１３０００レリンを一括で払うなんて無理だから、大体の人は、月ごとに分割して支払ってるけどね。それを一度に三人分支払うなんて、ヒジリさんは相変わらずの金銭感覚だね」

アルトが苦笑しながら、説明する。
一緒に暮らすようになって、約一ヶ月。目の当たりにしたヒジリ

の散財振りには、ザヴィエ共々呆れたものだ。もっとも、それが自分たちへの支給品にまで及ぶと、少し頭を抱えた。今まで清貧な暮らしをしていた二人にとって、ちょっとしたカルチャーショックだったから。

まだ、直接硬貨で貰える給与は少ないが、二人の身の回りの品物は充実している。不自由がないので、貯金ができるのは二人にとって嬉しい誤算だった。その上、今度はジョージのついでとは言え、訓練所にまで通えることになった。

ヒジリの性格はちょっとあれだが、二人は感謝してはいた。

「詳しい説明は、向こうの人がしてくれると思う。本当に探索を家業とするなら訓練所の技術は必須だって、ヴィルさんたちも言っていたし。ザヴィエは、ちょうど良かったよね」

「ああ」

アルトが振り向いて同意を求めれば、ザヴィエは短い返事をし、頷く。

「え？ザヴィーは探索者になりたいのか？」

「ああ」

「へえ、じゃあアルトも？」

ジョージが隣を歩くアルトに問えば、首を横に振られる。

「ううん。僕は、先生みたいに医者になりたいんだ」

両手を胸の前で組み、そっと大事なものを抱え込むかのように言

われ、ジョージは一瞬言葉に詰まった。
伏せた眼差しの横顔に、どきりと心臓が音を立てた気がした。
思いつめているかのような、苦しくなる何かがあった。
「でも、その為にはお金がいるから。ザヴィエが目指すほど本格的なのじゃないけど、探索者として頑張るのもいいかも。薬なんかの原料になる素材って、ほとんどが回廊から採取されているから、勉強にもなるかもしれないなぁ」
「……そっか、アルトはしっかりしているんだな」
ジョージの方を向いたときには、もういつものアルトの穏やかな表情だった。
見間違いか。
そう判断し、ジョージは目に付く疑問をあれこれ聞きながら、前に向き直った。

街の中心部から離れた場所。
そこに、探索者訓練所があった。
入り口から正面直ぐ。アルトを先頭に受付へと向かう。
閑散とした窓口には銀髪のエルフが一人、眠そうに座っていた。
エルフの特色ともいえる整った顔立ちが、窓から差し込む陽光に照らし出される。近寄りがたさを感じる美しさは、少年の足を止める。
が、いつまでもその場に留まるわけにも行かず、三人は顔を見合わせると再び前へ進んだ。

「すみませーん」

アルトが声を掛ければ、伏せていた目を開き、ゆっくりとした動きでエルフは、少年たちの方を見た。

「なぁに？」

動きと同じゆっくりとした喋りで、アルト達の話を聞く。アルトが入会したいことを伝えれば、何枚かの書類を三人分出した。

「俺、読めない」

ジョージは、出された書面に首をひねる。最近はフレートやハンナと一緒に、絵本を眺めてはいるが、未だジョージは、自分の名前を書くのがやっとだった。

文字を読めない者は珍しくないのか、エルフはジョージの発言にもう一枚、別の書類を出してきた。

大き目の紙に書かれた、一ヶ月の予定表。

ジョージには読めないが、各升目に、文字と記号のようなものが書き込まれている。

「これ、講義表。さっきの書類は入会の同意書と、施設利用に際しての説明書。文字が読めないなら、最初はこのマークが付いた授業を受けるといい」

白魚のような指をつうっと滑らせ、講義表の青い記号の書かれた部分を指す。

「補助講座。一般的なことや、担当者によっては履修済みの講座も教えてくれる。文字も教えてくれるし、適正調査もしてくれる。こ

れは常任の教師だから、開講しないことは無い」

指が、青から緑へと移る。

「こっちは主に座学。専門的な知識を教えてくれる。もっとも、担当してくれる人物によって内容が違うから、必ずしも自分の習いたいものがあるとは限らない。探索者に依頼をかけて教師を募っているから、当たり外れはあるの。でも、適正で魔力があるなら、一度受けてみたら？」

そして、赤に。

「こっちは実技。こっちも教師は、大体依頼で探索者に来てもらっているの。戦闘だけでなく、迷宮内で役に立つものを教えてる。さらにもう一つ、このマークがあるのは、実際に迷宮に潜る可能性があるから、要ギルド証ね」

そういって、紙面に向けていた顔を上げ、微笑む。

「まあ、最初は適正調査をしてもらうことだね。今日の午後からでも受けられるよ」

エルフの動きに目を奪われていた三人は、その言葉に思わず頷いていた。

「どうした、どうした。小僧共。もうお仕舞いかぁ？」

稽古場で木刀を手に、仮面をつけた男があざ笑う。
体格は少年三人と大差が無いのに、三人を同時に相手にしても男の優位は、変わらなかった。
ジョージが、体力の無さで真っ先にダウンし、何とか避けていたアルトも一撃を腹に喰らい、倒れた。最後まで粘っていたザヴィエも、利き手に持ち替えた男によって、ついに倒れてしまった。
適正調査に来ただけのはずなのに、いつの間にか三人は、目の前の男によって床に伸びていた。

「デューク、やりすぎだ」

稽古場の端で、一部始終を見守っていた黒い鱗のドラゴノフが、高笑いを続ける男に、呆れたような声を掛けた。
その声に、デュークは笑うのをやめ、横たわる三人を見、罰の悪そうな顔をする。

「そう言うなら、ダーク、君が止めてくれ。何の為の二人制だ」

「俺が割って入ったら、余計調子に乗るだろうが」

ふん、と鼻で笑われ、デュークの唯一見える口が、への字に曲がる。
言い返すにも自覚があるので、視線を少年たちに戻す。
三人が三人とも、恨めしげな眼差しをデュークに向けている。
視線に負け、口を開く。
詠唱に、デュークの手へと魔力が集う。

「《小治癒》」

魔力光が、デュークの手の平から、三人の身へと降りかかる。

光が触れた部分から、徐々に痛みは和らぐ。完全に消えた頃、三人はようやく立ち上がることが出来た。
初めて見た魔法に、ジョージははしゃぎたかった。
が、口を尖らせダークを見ているデュークと、それを受けて見下しているダークの無言のやり取りが怖かったので、ジョージは大人しくしていた。
ジョージたちにとってみれば長い沈黙。実際にはほんの数秒の間のあと。
デュークは尖らせていた口を開いて、頭を下げた。

「悪かった。調子に乗りすぎた」

謝罪の言葉に、三人はあいまいに言葉を返す。
微妙な空気を払うかのように、ダークが大きな手を二、三度打ち鳴らし、注目を集める。

「さて、では適正調査の結果だが。一端、講義室に戻ろう」

その言葉に促され、全員が移動した。
それほど広くは無い部屋に五人が入り、席に着く。
黒板の前に立つダークが、三人の結果を書き出していく。

「まず、最初に検査した魔力保有の件からだが。ジョージ、アルト。二人は残念ながら平均値を下回った。魔法を修得するなら、それを念頭に入れて訓練してくれ。逆にザヴィエ。君は外見から人間の方が強く出ているかと思ったが、魔力に関してはエルフの平均を上回っている。どの系統を覚えるかにもよるが、探索には有利に働くだろう」

魔法を使えないわけではないだろうけど、難易度は高そうだ。

ちょっと憧れていた部分があっただけに、ジョージは少し残念な気持ちになった。
隣に座るアルトも少し気落ちした顔をしていた。
反対に、ザヴィエのほうは頬に朱が入り、浮かれているようだった。

「次に、デュークが暴走してしまった戦闘技術だが」

何かが折れる音がする。
ジョージがつい視線を向ければ、部屋の隅で何か紙に書いていたデュークが、仮面越しでも分かるほど恨めしげ雰囲気で、こちらを見ていた。
手には、二つに折れた筆が握られていた。
まずいものを見た気がして、ジョージはゆっくりと視線を黒板へと戻す。

「ジョージ。君は戦闘以前に、体力が無さ過ぎる。体力づくりを優先した方がいい。どのようなタイプの探索者も、体力が基本だからな」

そういって笑うダークの身体は、もともと種族的に大柄なドラゴノフということも相まって、ものすごく屈強で頑健そうだった。
顧問の山田なんか、完璧に負けてるし。
ジョージは、ふと身近だった人と比べた。ちょっと前までは思い出すと暗い気持ちになったが、今は何とか平気になった。

「アルト、ザヴィエ。君たちの体力や動きに、特に問題はない。相手の動きを見ようとしている点は、いいと思う。どの武器を得手にするかは自由だ。決まらないようなら、一通り講義を受けてみるといい」

黒板に、武器の種類が書き出されていく。
剣から始まり、１０種類ほどの武器の名が連なった。
「一応、訓練所で教えている武器だ。剣や斧は補助講座でも教えられるが、少々扱いが特殊な物は、講師の関係で講座が開かれるのは不定期だ。気をつけてくれ」
そう言って、後半に書いた名前の頭に、赤で丸を描いた。
鞭や多節棍など、ジョージはどう特殊なのか。実物を見たことが無いのでよく分からなかった。
「アルト、ザヴィエ。君たちはマジクリングだというが、未分化か？」
「はい。そうです」
「なら、そういう時期のマジクリングに、処方してはいけない薬品一覧をよく読んでおくように。ギルド販売の回復剤なども含まれているから、探索時に持参する際に気をつけなさい」
ダークは口を閉じると、デュークの席に向かい、その手元から用紙を持ち上げた。
「これは、各自の希望と適正から判断した講習アドバイスだ。参考にしてくれ」
三者三様の内容が書かれたそれは、綺麗な文字で書かれていた。
デュークが書いたものだろう。アルトの用紙の一部に、飛び散ったインクの跡があった。

訓練所を後にし、三人は帰路に着く。
日は傾き、空は茜色へと変わりかけている。

「明日から、訓練所通いかぁ」

ジョージは、ぽつりと呟いた。
学校に通っていた毎日を思い出す。
あの頃は、まさかこんなことになるなんて思ってもいなかったのだ。友人の一人が、何という題名だかは忘れたが、映画の影響でそういう話を振ってきても、直ぐに別の話題に変わってしまうくらい、興味のない絵空事だった。

「ジョージは、文字の勉強からだな」

ザヴィエが、珍しくからかう様に言う。
確かに文字が読めないことには、講義表や黒板の文字の意味が分からない。
ジョージは頷いた。

「勉強、か。あー、嫌だなぁ」

英語は苦手だったのに、こちらの文字は覚えられるんだろうか。
ジョージはうんざりしながら、二人の後ろを付いていった。

はいはい、ごちそうさま

１３月も半ば。
あと１０日で、回廊の閉鎖期間に入る。
光明神ジュネレオスの加護日で、新年を祝う日の前後５日。回廊都市では回廊に繋がる橋が上がり探索が禁止される。そして都市は、新年を迎える準備で賑やかになる。
回廊が閉鎖される前に採取を、という飛び込みの依頼が増えるのもこの時期だ。
その採取指定の多くは庭園にある薬草だったり、新年祭で使用する飾りの植物だったりと、低ランクでも容易に集められるものだ。閉鎖明けまで在庫を保持したい依頼者が多くの探索者を雇う為、この時期が一年でもっとも斡旋所が込む時期かもしれない。
探索者としても、新年をゆっくりと迎えるためにも必死だから、一層賑やかになる。
誰もが皆、どこか幸せな焦燥に駆られ、忙しなく動いていた。

そんな街の空気を避けるように、ヒジリはフレートたちと日がな一日戯れていた。
最近は以前よりも少なくなったとは言え、斡旋所で向けられる視線は今だに好ましいものではない。自然、視線を避けるように暖かな屋内に籠もりがちになる。
ジョージたち三人は何だかんだといいながらも、楽しそうに訓練所に通っている。
ヒジリが怠けていて、それを怒る人は誰もいなかった。
薪が要らないよう魔道処理された暖炉の前。お気に入りのふかふかとしたじゅうたんの上。ヒジリたち三人が横になって絵本を読んでいれば、玄関からチャイムの音がした。

「はい、はーい、ちょっとおまちー」

聞こえてはいないだろうが、そうぼやきながら暖かな部屋を出て、ヒジリが玄関を開ける。

そこには、ヴィルとヨーンが並んで立っていた。

「よお」

寒さで鼻の頭を赤くして、ヴィルは片手を上げる。珍しいことに二人は、もこもことした動きづらそうな普段着で立っていた。

家の中に上げると、二人は苦労してブーツを脱ぎ捨てながら、暖炉のある部屋へ向かう。

「相変わらず、お前さんのとこはいい家だよなぁ」

室内履きに履き替え、暖かな空気が漂う廊下にヴィルがぼやく。

「褒めたって、貸し部屋はしないよー」

「ああ？部屋なら、空いてんだろうが」

ぼさぼさの金髪が、首をひねる動きに合わせ揺れる。

「女連れ込まれたら、子供たちに悪影響でしょうが」

「おい、お前は俺をどういう目で見てんだ」

半眼でヒジリを睨むヴィルを、後方からヨーンがからかう。

ヴィルとは違い、短く整えられた金髪が帽子の下から現れる。

「あはは、ヒジリ。いくらヴィルでも子供がいる家には連れ込まないって」

「お前らなぁ」

ふざけながら、ドアを開ける。

子供たちは、突如現れた大男二人に騒ぎ始めた。フレートがヴィルに向かって突進し、その後をハンナが真似て、よたよたと駆けてくる。

足へとぶつかる子供たちを、ヴィルが手馴れた仕草であしらっている。ヨーンは笑いながら、手荷物をテーブルに降ろす。

ヒジリは、暖炉でじっくり暖めていたスープをカップによそい、二人に振舞う。それを見たフレートたちも欲しがって、結局皆でスープを飲むことになった。

くたくたになるまで煮込まれたスープは、野菜の甘みと鳥のうまみが程よく溶け出し、あっさりとして飲みやすい。冷えていたヴィルたちを中から暖めた。

「うめぇなぁ」

「ああ、あったまるなぁ」

思わず、といった感じに二人から言葉が漏れる。

毛色の違う二本の虎縞の尻尾が、左右に揺れる。

「で、ヴィルはともかく、ヨーンまで来るなんて珍しいね。何か用かい？」

ここに引っ越してから一月近く立つが、アリアたちやヴィル、ア

ルト達の孤児院仲間を除く訪問客は、滅多に来ない。ヴィルもここに来るときは大抵一人で、チームの仲間を連れてこなかった。
ヒジリは子供たちが火傷をしないよう、気をつけながらスープを飲ませると、ヴィルに話をふった。
身体が温まったヴィルは首を軽く回した後、横に座るヨーンを親指で指し示した。

「こいつが、個人的に欲しいものがちょっと訳有りでな。回廊に潜ろうにも、チームの連中は今忙しくって、力を借りられないんだよ」

「ははぁ。で、私に声を掛けに来たと。うんうん、私は構わないよお」

ヒジリがわざとらしく口の端を上げて、にやりとして見せる。

「まあ、そういうこった。ちょっと深いからな。俺たち二人だけだと不安が残る」

ヴィルもそれを受けて、にやりと笑う。
それを見て、ヨーンは苦笑した。

「どうしても、今年中に手に入れたかったんだけどよ。この間まで色々あって、チームの仕事、俺だけ抜けるわけに行かなくってなぁ」

腕を組み、しみじみと語る。
ついこの間、二人とも大怪我を負うということがあった。後遺症はなかったようだが、チームで行動している彼らだ。ヒジリには分からない苦労があったのだろう。

「それに、エメリにばれる訳にもいかなかったんだろうが。え、お

い」

からかうように、ヴィルがヨーンをひじでつつけば、照れたように笑う。

ヨーンがエメリにべた惚れなのは、傍で見ている者なら分かりやすいほど明らかだった。出会ってまだ日が浅いヒジリだって、彼の口からエメリへの惚気を聞かされたことがある。

残念ながら、エメリの方はというと、あまり感情を表に出すタイプでもないので、ヨーンのことをどう思っているのかは今一分からない。不機嫌な時だけは、眉間の皺が凄いので分かりやすいのだが。

「じゃあ、とうとうするんだ。プロポーズ」

「ああ、うん。その、今度の新年祭に合わせて帰郷するから、その時、その、結婚を申し込もうかと」

照れたように頭をガシガシかきながら、徐々に小声になっていく。尻尾もぱたぱたと触れていて、内面を隠せていない。

スープを飲むのに飽きた子供二人の目が、らんらんとおもちゃを見つけたかのように、尻尾を目で追っている。

「で、スノータイガーの牙をその時、渡したいんだと」

聞けば、ヴィルたちの村の風習で、結婚の申し込みに、男は自分の獣相にちなんだ素材を一緒に贈り、成立した場合は、その素材を使用した装飾品を造って、結婚の証とするという。

ヴィルもヨーンも虎の獣相を持っている。

そこで、白銀色の牙を持つスノータイガーに狙いをつけたのだ。

「でも、あれって、眷属引き連れているって話でしょ。面倒くさそ

うなんだけど。フォレストタイガーじゃ駄目なの？」

ヒジリが回廊内の魔物に関して、図鑑を思い返して言う。

虎系の魔物で、よく名前が挙がる別の種類を言ってみれば、ヨーンが呆れたように言う。

「あれでいいと思ってるなら、もっと早い時期に狩りに行っていたよ。冬まで待っていたら、予想外の仕事で時間が無くなって、焦ってるんじゃないか」

「ああ。あー？」

一端納得しかけたヒジリだが、意味が分からず、語尾が上がる。

それが面白かったのか、ハンナも真似して、あーあー言い出す。

騒ぎ出したハンナの口を、フレートが押さえて静かにさせようとする。が、その手を逆に、ガジガジされてしまう。

「季節感がねぇって言われる回廊内だが、一応あそこも季節ってもんに影響受けてる部分があんだよ」

分かりませんと、今にも言い出すヒジリにヴィルが説明を加える。

「特定の季節にしか、出現しない魔物や植物とかがあってな。スノータイガーやその眷属なんかは、冬に現れんだよ」

そこまで言えば、さすがにヒジリも分かる。

ヴィルの後を継ぐようにヨーンが口を開き、荷物から地図の束を取り出す。

「で、だ。今の所、目撃例がある宮で、一番近くても、アーチを三

回はくぐる必要がある。到底、日帰りは無理。ちょっと事前に、打ち合わせって奴をしようじゃないか」

空になったカップを下げた後、ヒジリたちは打ち合わせを始めた。フレートたちは腹が膨れて眠くなったのか、大きな熊のぬいぐるみに寄りかかり、うとうとしている。

目的地は、一番近い宝樹宮にすることにした。それでも、片道三日は掛かる距離だ。

本当ならその先の氷原宮の方が、スノータイガーの目撃談が多いのだが、そちらにすると最低でも片道五日は掛かり、回廊が閉鎖され、期間が終わるまで中に取り残されてしまうことになる。それでは意味がない。

「行って帰ってくるだけで、六日掛かるでしょ。その日のうちにスノータイガーに出くわせばいいけど、そう上手くいくとは限らないよね」

「ああ、だから向こうで二日滞在するつもりで準備して欲しい」

「まあ、明日一日あれば、準備は十分出来るわな」

探索に八日。準備に一日。合計九日。

結構ぎりぎりではある。

が、獲物を変えない以上、妥当な日程と言えた。

「あ、一人連れて行っていい？」

地図を広げて、最短ルートを考えていた中、ヒジリは顔を上げる。

その声に、ヨーンは検討していたルートをなぞる指を止める。

「誰を？」

「ザヴィエ。今、ジョージ君と一緒に訓練所に通わせてる子。荷物もちとしてさ、連れて行きたいんだよね」

「まあ、構わないけど。今回はさすがに面倒見れないから、それでも連れていくなら、自分でその子の面倒見なよ」

深くは聞かず、一応釘を刺しながらヨーンは了承した。

軽い口調で持ち出した話だが、スノータイガーは結構厄介な獲物だ。

単体でも十分厄介ではあるが、シャドーファングと言う眷属を連れている。ヒジリはそれを面倒くさいと称したが、スノータイガーを中心に群れで襲い掛かってくる彼らは、やり難い相手でもある。

ヴィルもヨーンも伊達にシルバーランクになっていないから、もちろん対策は講じているし勝算もある。

ただ、そこに足手まといが居た場合、それを庇いながらでは目的を達成することは難しくなる。

万難を排すべきなら、ヨーンはヒジイの申し出を拒否するべきだった。

しかし、戦闘に加わらない荷物もちがいた方が、やりやすい面もある。それに、一応ヒジリは命の恩人でもあったから、反対する気にはなれなかった。

「まあ、その点はちゃんとするから。まーかせて！」

自信満々に言い切るヒジリに、ヴィルとヨーンは少々不安に思った。

翌日、ヒジリはザヴィエを連れて、買出しに向かっていた。

帰ってきた少年たちに、長期間探索に向かうことを告げた時、皆一様に驚いた後、仕方ないよねヒジリだし、と言った呆れた表情になった。ザヴィエを連れて行くといっても、言われた本人以外は先と同じ表情のままだった。

反対されたところで、すでにそれを前提にヒジリはヴィルたちと話を進めていたので、結果は同じだったのだが。

「取りあえず、どれから買おうかなぁ？服？武器？荷物？」

職人通りと呼称される大きな通りを人混みに紛れながら、二人は歩く。

実際に物を作る者は、通りから離れた建物に住んでいて、ここにある店の多くはそれらの代理販売をしているギルド傘下の店だ。気に入った製作者がいれば、紹介してもらえたりするから一見の客でもそれほど困ることはない。

「……服を」

「じゃあ、あそこの店に行くか。ほら、手」

ポツリと返すザヴィエの手を取り、ヒジリは人混みを掻き分け進む。まだふくふくと幼さが残る手にある、硬い肉刺の感触に少年の頑張りを感じる。

ヒジリが目指す店は、流れが逆の人混みの向こうの赤い屋根の建物だった。

営業中の立て札を確認し、扉を開ければ皮と布の独特の匂いがヒジリたちを迎える。

「いらっしゃいませ」

カウンターの向こうから、やや低い女性の声。顔だけ入り口に向けた恰幅の良い店主は、幾つかの布地を手にカウンター前の客の相手をしていた。
入り口からは後姿しか見えないが、犬耳の女性は熱心に店主が出してきた布地を見比べている。
明日には出かけるから、既製品にちょうどいいのがないか聞こう、とヒジリがカウンターに近づく。

「あ」

思わず、声がでる。
その声に、犬耳の女性もヒジリの方に顔を向けた。

「あら、ヒジリ。こんな時間に会うなんて珍しい」

「おはよう、エメリ。確かにいつもは仕事終わりとかだったしね」

簡単に挨拶をかわす。
店主に要望を伝えれば、幾つかあるというので出してもらうことにした。サイズをあわす為、ザヴィエが店主の後をついていく。
待つ間、ヒジリはデザインのカタログを見ようと思ったが、エメリが熱心にデザイン画と布地を見比べているので、ついからかいたくなった。

「それ、エメリが着るにしては、ちょっとごつくない？この袖の飾りとか、詠唱の邪魔になりそうだし」

どう見ても男物にしか見えない上着のデザイン画を指差す。急所などを庇うように金具がつけられる予定のそれは、防具としても有用そうだった。

途端、僅かだがエメリの頬に朱が差す。

「……ち、父に、帰郷の時の土産にしようと思って」

変な抑揚で応えるエメリに、ヒジリは内心おかしくてしょうがなかった。

エメリの父親がどんな人だか知らないが、さすがにこれをお土産にするのは変だろう。

二人の前に置かれている布地は、濃く落ち着いた色合いの丈夫な物ばかり。ヒジリがそれの一つを摘まんで、完成した服を想像する。明るい髪色の彼によく似合いそうだ。

黙ってしまったヒジリに、何を考えたのか、エメリは珍しく言葉を連ねる。そのどれもが、流暢に魔法を詠唱する彼女の口からつむがれたとは思えぬほど、たどたどしいものだった。

ぴるぴると、犬耳が感情を表し震えている。

「ヒジリさん、ちょっといいか」

店の奥からのザヴィエの呼びかけに、ヒジリはエメリの頭へと伸びていた手を止めた。

「考え事の邪魔してごめん。私は、そっちの臙脂色の方がいいと思うよ。って、余計なお世話か」

軽く手を振って、ヒジリは奥へと向かう。

エメリの顔はもう誰にでも分かるほど、赤く染まっていた。

準備は万端？

明日に備えて、装備一式を揃えたザヴィエを中心に、子供たちが盛り上がる部屋。
ばばんと、扉を勢いよく開けて、ヒジリが現れる。
上着の一番上までボタンを留め、顔の半分隠すゴーグルつけて、おまけにバンダナを巻いている。
そして、終いにフードまで被ってみせた。
口元以外が覆われ、容姿を隠してしまう。

「じゃーん。自分もおまけに装備一式新調しちゃいましたぁ」

ばばんと、ジョージたちの前でヒジリはポーズをつけた。
完璧に不審者です。
ハンナが泣いた。

身も引き締まる、澄んだ空気に満ちた朝。
斡旋所にて待ち合わせ、最終的な荷物確認を済ませた後。
ヨーンを先頭に、４人は人の流れに沿って、回廊へと向かう。

「お前は、また変な格好だが、思ったよりシンプルにまとめたな」

「ま、荷物は軽いほうがいいでしょうよ」

先を行くヨーンと並ぶザヴィエの背負う荷物を指し、話しかけて

きたヴィルにヒジリは口の端をあげて笑う。
ザヴィエもヒジリも背負っている荷物は、それほど大きくない。ヒジリが、日帰りで探索にでる時と一見した量は、ほぼ変わっていない。
ヒジリとザヴィエの二人が身に纏う装備は、知る者が見れば、丁寧な造りの上等な物で揃えられていることが分かる。
後ろ盾のないカッパークラスが持つようなものではないそれらに、悪目立ちをしている自覚があるのかと、ヴィルは問いたくなった。
「魔道具で揃えたな、お前。ちょっとは貯金しとけよ、子持ちだろうが」
つい、説教じみた言い方になってしまうが、ヒジリはへらりと口元を歪め、手を横に振った。
「いいじゃない。別に無駄になるものじゃないし」
確かにヒジリの持っている魔道具のどれも、これから先も探索業を続けていくことを考えれば決して無駄にはならないものばかりだ。だが、一つ二つならともかく、一度にここまでの量を揃えるのは金遣いが荒いと言われてもしょうがない。
「そうだがな。今回の探索で儲け出るかも分からないのに、その調子じゃ駄目だろうが」
朝も早いのに、すでに庭園では作業に従事している者がいる。
ヒジリたちの声が大きいのか、わざわざ手を止め、こちらを見るものもいる。
顔見知りがいるのだろうか。ヴィルやヨーンは簡単な挨拶を交わしながら歩いていく。

「顔が広いねぇ」

「まあ、この街を拠点にして長いからな」

首の後ろに手を当て、遠い目をする。

昔のことでも何か思い出したのか。その眼差しは暗い。

「ああぁ？あそこにいるのって」

ヴィルが訝しげに声を上げる。

前を行く二人の足が止まり、ヴィルへと振り向く。

ヒジリが訝しげに先をみれば、二人の向こうに誰かがいた。

男女４人。こちらを向いて立っている。

しっかりと上まで着込まれた服装に、離れた場所からでは誰だかわかりにくい。

「おはよう、ヨーン。これから探索かい？」

猫の獣相がかなり濃いビスターの女性が、こちらに気づいて近寄ってくる。

胸当てに刻まれた虎の紋章は、ヴィルたちと同じチームであることを示していた。

「宝樹宮ですよ。リカルダはこれから？」

ヨーンが自分より頭一つ小さな彼女を見下ろしながら、照れるように言う。

「ああ、例の。私だけだが、今日も彼女の同行を依頼されてな」

弓なりに大きな瞳を細めて、リカルダはヨーンに背後の三人へと視線を向けさせる。
視線を受け、二人のやりとりを遮るように、三人の中でも特に目立つオウカ風の装いの男が近づき、口を開いてきた。
「おや、何とも奇遇。我々もそこに行こうと思っていたのだよ。どうだろう。同行させてもらえないだろうか」
あからさまな愛想笑いを浮かべた男は、ヒジリに一度視線を止めた後、隣に立つヴィルを誘う。
「リーダーはこっちのヨーンだ。彼に聞いてくれ」
「これは失礼した」
誰だと、見覚えがありそうで思い出せない顔に、ヒジリはヴィルの袖を引く。
「誰？」
小声で尋ねる。
ヴィルが知っているものとは限らないのだが、探索に関することでこの男の顔はかなり広いのだ。
ヒジリにとっては半ば癖になっている。
「ジエン。今現在、うちのチームのお得意さまだ。あっちのシュヨンってお嬢ちゃんの保護者らしい」
案の定知っていたヴィルの説明に、尋ねた身でありながら、ヒジ

リはふーんと軽く流す。
それよりもシュヨンという少女から、嫌な感じの視線を送られているようで、そちらに意識が向いてしまう。
その視線も、ヨーンとジエンの会話が終われば途絶えてしまう。
問いただすことが出来ず、ヒジリの胸にちょっとしたもやもやが残った。

開けた通路を3・3・2で並んで歩く。
真ん中の組になったザヴィエは、一緒になったシュヨンとヨーンから、ちょっとした魔法講義を受けて言葉少なに頷いている。
殿のヴィルとリカルダの二人は、同じチームということもあってか、他愛もない会話をしながらも周囲を警戒して進んでいる。
そして、先頭組になったヒジリは、自分よりも背の高い男性二人に挟まれる形で歩いている。
ジエンとライ。この辺りでは珍しいオウカ風の装備がジエンで、以前ヒジリ宅を訪れた騎士で、宿屋の主人の旦那がライ。
二人ともタイプは違えども容姿の整った美男ではあり、ヒジリでも普段なら少々浮かれるような状況なのだが、実際は違った。

「アリアがね、君の家にお泊りに行きたいっていうんだが」

「ああ、別にかまわないけど。うちの子たちも喜ぶだろうし」

ライへと話題を振れば、愛妻家で親馬鹿だったらしく、家族自慢と言うか惚気を聞かされる。
繰り出される形容詞の対象が、あの宿屋の主人だと言うことが、ちょっとヒジリには想像できなかった。お世辞にも可愛く可憐な人

ではない。どちらかと言えば無骨で硬派な人だ。
ジエンはといえば、一見他愛もない話題作りの為の質問が、まるで尋問なのではないかと疑いたくなるかのようにヒジリに向かって振ってくる。

「子供たちには何をあげるんだい？」

「何がです？」

「新年の祝いだが……行わないのかい？それとも知らなかったのか？」

信じてはもらえない身の上だけに、正直に言うわけにもいかない。
ヒジリは、適当に話をでっち上げてはみた。が、話の矛盾をにこにこと作り笑いを向けられながら突かれ続ける。
正直、どちらとの会話にも、ヒジリはうんざりし始めていた。

「……もちろん、やりますよ」

あはは、と乾いた笑いがでる。
あまりにも執拗なジエンに、いい男は声まで格好良いんだなぁ、と現実逃避したくなるような気分にもなる。
先を急ぐ身としては不謹慎ながら、魔物の出現を期待してしまっても仕方ないんじゃないかと考えたくもなる。
しかし、ヒジリがどんなに周囲の気配を探っても、珍しいことにそれらしき気配が一切感じられない。
ここまでの道でも、常よりも多い回数、何組かの探索者と行き会ったから、彼らによって退治された可能性もある。が、それにしても静かなものだった。
予定よりも早い進行速度に、どことなく座りの悪いものを感じな

がら、ヒジリは先頭を進む。
結局、異様なまでに魔物に出会わず、数度の休息を経て、一行は目的地たる宝樹宮へと辿り着いた。

「思ったよりも寒いな」

アーチを通り抜けた瞬間、冷えた空気が肌を刺す。
その刺激に、ビスターの三人の外に晒されていた尻尾が、ぼあっと膨らむ。

「ジエン様、こちらをお使いになってください」

「ああ、すまんな」

オウカ風の独特の開いた襟の合わせ目を、寒そうに寄せるジエンの仕草を見て、シュヨンが自分の荷からマントを取り出す。
各々が予想していたよりも冷たい空気に、防寒を新たにする中、ヒジリとザヴィエの二人は周囲を見回していた。

「寒いのに密林とは、いやはや」

青々とした緑に覆われる景色の中、辛うじて舗装された道が見える。
冷たい空気には会わない、ヒジリの感覚で言えば熱帯に生息していそうな植物が繁殖している。

「……魔道具って、やっぱりすごいな」

吐く息がわずかに白くなる。
それでも、他の皆のように寒さを感じることはない。ザヴィエは

改めて、身に着けている魔道具の有効性にため息をつく。
ヒジリが購入の際に支払った貨幣の山に、何故そこまで高いのかと思いもした。が、実際その力の一端を認識しては、やはりそれだけの価値を持つものだと思い知らされた。

「……よし！じゃあ、俺たちは目撃例が多かった場所に向かうつもりだけど、あんたたちはどうする？」

準備を終えた一同に、ヨーンが声を掛ける。

「どうするとは？」

「いや、だって目的地は同じだったから、ここまで同行してきたわけだけど。今まで聞いてなかったが、あんたたちだってここに何か目的があってきたわけだろう。だったら、ここで分かれた方がいいかと思ったんだが」

ヨーンの言葉に、ジエンが、ふむと手を顎に当てる。

「差し支えなければ、このまま同行したいと、私は思うんだが」

「何故？」

ヒジリが口を挟む。
初日から、ずっとうんざりする会話を続けていた身としては、ここで分かれたい気持ちが大きかった。

「おや、嫌われてしまったかな」

見下すようなジエンに、ヒジリは目を眇める。

「そう警戒しないでくれ、他意はない。と言っても、君は納得はしてくれないみたいだな」

「当たり前」

執拗な質問責め。それを他意がなかったなんて、信じられるわけがない。

「はっきり言うな、君は。まあ、いい。隠すようなことでもない」

口の端を曲げ、一歩ヒジリへと近づく。

手を伸ばせば触れる距離。

「理由は簡単だ。元々は、ある大物を狩る前の練習と彼女の修行を兼ねて、少々深く探索する予定だった。そこに都合よく君たちが現れた。もしかしたら、手伝いを依頼できる相手かも知れなかったからね。実力を見たかった」

「実力は見れたかい？」

「いや、運がいいことにと言うべきか？ここまで戦わずに済んでいたからね。だけど、君たちの目的だと、戦わずに帰るなど、出来はしないだろう」

ジエンの視線が、つかの間ヨーンへと逸れる。

「だから、同行を続けると」

「そういうことだ」

ジエンの連れの三人が、彼の意見に口を挟むことはなかった。
彼らの中での決定権は、この男にあるということか。

「ヒジリ、お前は嫌なのか？」

ヨーンに肩を叩かれる。
それに横に首を振って応える。

「いいや、一緒に行くのが嫌なわけじゃないんだ。ヨーンに従うさ」

ジエンは嘘を言ってはいない。だが、全部を話したわけでもないだろう。
そして、今や隠す気のない自分を値踏みする目。
ヒジリはその点が気に食わなかった。
だが、自分とて秘密のある身だ。ヒジリは、ため息ひとつで気持ちを切り替えた。
彼らの決定権が、目の前の男にあるのなら、ヒジリたちの決定権はヨーンが持っているのだから。

結果は散々？

出没するという噂の場所を中心に捜索を開始して早々、スノータイガーの一群を発見した。

こんなにも早く遭遇するとは。

まだ、向こうに気づかれていない程、距離が開いている。順調すぎるこれまでに、皆が多かれ少なかれ驚いていた。

特に長期戦を覚悟していたヨーンとヴィルは、運が良すぎることに座りの悪いものを感じた。

だが、遭遇してしまっている今、そんな内心など関係ない。獲物は狩るだけだ。そのためにここまで来ているのだから。

ここに来るまでの道程でおおよそ考えた作戦を決行するべく、ヨーンはザヴィエにサインを送る。

「《開封》」

ぽつりと、手元のカードの束に囁く。

すると、ザヴィエの魔力を取り込みカードの束が淡く光を纏い始める。使い捨ての魔道具で、使用者の魔力を使用するが、書かれている文字さえ読めれば発動が可能であり、戦闘を期待されていない今のザヴィエにはちょうど良い道具である。というより、ザヴィエがこの魔道具を使用するための魔力電池代わりである。

「《不可視の鎖》」

鎖の絵が描かれていたカードを五枚、束から抜き出すと一群へと向けて放る。カードは端から淡い光と化し、一群を包み込むかのように連なっていく。そこから先は肉眼ではうまく見えないが、魔力

で生み出された鎖の網が、周囲を檻のように包んでいることだろう。

「よし」

ヨーンが軽くザヴィエの頭を叩いて、ねぎらう。

魔法の完成に、不穏なものを感じたのか、スノータイガーたちの様子が変わる。

落ち着かないのか、鼻先で周囲に探っていたかと思えば、ぐるると低くうなり始めた。

先手必勝。

リカルダが放つ魔法の火球が、スノータイガーたちの不意を撃つ。

弱点とも言える火に浮き足立った隙を逃さず、ヒジリたちは一気に距離を縮める。

ヴィルの力強い一振り。

ジエンたちの素早い一撃。

ヒジリの力任せの拳。

それぞれがその強さを見せ付けながら、スノータイガーを囲んでいたシャドーファングの命を狩っていく。

「おや、その腰のものは飾りかい？」

腰に佩いた刀を抜かず、その拳でシャドーファングを相手取るヒジリにジエンが声を掛ける。

「うるさいな」

その問いに答える義理はないとばかりに、自分へ飛び掛ってきたシャドーファングをジエンへと殴り飛ばす。

「は！素手で十分ということか」

飛んできたものを難なく切り落として、ジエンは笑う。
それに眉を顰めてみせながら、ヒジリは自分を襲う新たな獲物へと拳を握りなおした。
ヒジリが腰の刀を抜かないのは、そんな大層な理由ではない。
力の加減が出来ない。それだけだ。
ヒジリとてすぐに風呂に入れない状況下で、こんな格闘などしたくはない。が、仲間を巻き込めない以上は仕方のないことだ。それを目の前の男に伝える気持ちは欠片もなかったが。

「《炎の加護布》」

「《火属付与》。二人とも、おしゃべりは後！後にして！」

手元の魔道具を読み上げるザヴィエと、銀の短剣を持つリカルダから補助の呪文が放たれる。
少々生真面目な気質なリカルダは、ふざけているようにも取れるジエンとヒジリのやり取りを叱咤する。
叱咤された二人とも、別段動きが止まっているわけではないのだが。確かに自分たちよりも数で勝る集団を相手に軽口を叩く余裕など、一歩間違えば致命的な隙でしかない。
素直に口をつぐんだ二人は、輪の中心、スノータイガーへと仕掛けるヴィルとシュヨンへと近寄っていった。
ヨーンはそのやりとりに肩を竦めると、リカルダたちの前に出た。

「ザヴィエ。もう一度包囲網を強化したら、手持ちを半分、回復系に切り替えておけ」

「はい」

ヨーンは自身に火属性の補助が掛かっているのを確認すると、ザヴィエに指示をだす。
指示通り、ザヴィエが手元のカードの束から鎖のイラストのカードを抜くと、腰のホルダーから新たな束と交換する。
ヨーンはそれを横目に、今日の為にと用意した術の媒介を懐にしまうと、武器に手を掛ける。

「リーダー。今日は俺が仕切りだが、訳有りだ。前に出るから、後の補助よろしく」

「分かってる。頑張って」

ひげを揺らし、リカルダは請け負う。

「《不可視の鎖》」

魔力を手元のカードに込め、放つザヴィエの声を背に、ヨーンは群れを狩る仲間に加わる。
一人、戦闘に加わったことで群れを駆る勢いは早まり、周囲には血臭が漂う。
だが、一流と名の知れているヴィルを初めとした彼らとて、多勢を相手に無傷とはいかない。この幾割りかには彼らのものも混ざっていよう。
だが、この匂いに釣られ他の魔物が表れることは、最初に敷いた魔法の檻が崩れぬ限りないだろう。その点は安心してヴィルたちも目の前の敵に専念することが出来ていた。

「ザヴィエ、最初のやつの効果がそろそろ切れるわ。……シュヨン、ヴィルの順で」

「加護ですか？付与ですか？」

「加護よ」

初めてとも言える実戦の空気に、慣れぬザヴィエの表情は優れない。

だが、探索者を夢見るものとして、目を背けることなく、割り振られた己の役割を必死にこなそうとしていた。

火の精霊を召還したリカルダと共に、ザヴィエは戦いの中心から離れたところでサポートに専念している。

だが、専念しすぎた。

意識が前方に集中して、周囲への警戒が疎かになっていた。

不意に血臭に混じる嫌な気配に、リカルダの毛が逆立つ。

「！！逃げて、ザヴィエ！」

リカルダが振り向き、叫ぶ声に、ザヴィエが視線を横に向ける。

黒い影。

死んでいたと思っていたシャドーファングが一体、血を流しながら飛び掛る。

「っ！！」

声にならない叫び。

訓練を受けたはずなのに、自分へと向かう殺気にザヴィエの体は強張り、動くことが出来なかった。

「バカ！」

長いようで短い瞬間。

痛いほどの力で肩を掴まれ、その勢いのまま後ろへと引っ張られる。突然のことに、ザヴィエはバランスを崩し、尻餅をついた。
一体、どのようにして駆けつけられたのか。肩を掴んだのはヒジリであった。
ザヴィエとシャドーファングの間に、無理やりヒジリが立ちはだかる。
ザヴィエを背に庇うヒジリは、襲い掛かるシャドーファングの前足を避けようにも、不自然な体勢から体を後方へ逸らすことしか出来なかった。
避けきれず掠った爪が、ヒジリの頭部を覆う装備を剥ぐ。
露になった顔に、朱線が斜めに走る。

「ヒジリ！」

血に濡れた爪が、再びヒジリへと襲う。
だが、それは掴まれ、動きを止められる。
不自然な姿勢で止められたシャドーファングが、咆哮する。が、次の瞬間、それは哀れな悲鳴へと変わった。
前足がつかんだ手の中でひしゃげ、折られていた。

「あ、あぁ」

ヒジリの背に庇われたザヴィエは、それをこの場にいる誰よりも間近で見ることになった。
襲われ、間近に感じた死の恐怖は今、違う感情に染め替えられていた。
周囲も皆、異様な様子に動きを止め、伺うように息を潜める。

「……しくったなぁ、ほんと」

シャドーファングを制止させる手とは逆の手で、血濡れた己が顔を撫でるヒジリ。その口元は自嘲なのか、弓なりに歪んでいた。
ザヴィエは視界に映るヒジリから、目が逸らせなかった。
なんて酷い笑みだろう。
白牙鬼。
彼女につけられた二つ名が、今の姿には良く似合っていた。
黒から白へと転じた髪。
血の色に染まる瞳。
確かに走った顔の朱線は、今や乱雑に拭われた血潮だけが名残をとどめている。
なんとも普段の彼女とはあまりにも違う、荒んだ空気を醸し出す。

「頑張って、自制してたっていうのにさぁ」

けたけたと、笑い出すヒジリ。その手は、相変わらずシャドーファングを掴み、哀れな悲鳴を上げさせている。

「うるさいよ。うちの子に手ぇ出すからいけないんだ」

手を離す。
地へと崩れ落ちるかと思われたシャドーファングは、次の瞬間、地より生えた黒い何かに刺された。
断末魔の叫びが、皆の背に得も知れぬ寒気を走らせる。
そこには、敵も味方もなかった。
ただ、そこにいる息あるものは、ヒジリへと意識を向けざるをえなかった。
シャドーファングを貫いた何かは、蠢き、ヒジリの足元の影へと同化する。
宮の中。常に一定の方向から照らされる光源が生み出す影が、なぜかそこだけ不安定に揺らぎ蠢いていた。

「ジエン」

笑うのを止めたヒジリは、冷めた目で男へと呼びかける。

「見たかったものはこれだったんだろう、あんた。満足したかい？」

「君は……」

今まで味わったことのない感覚に、詰まる喉を掌で宥める様に押さえる。だが、なんと言えばいいのだろうか。

ジエンは、なぜこの女を利用できると考えていたのか、過去の自分を罵りたくなった。

あれはデモビアよりも性質が悪い。

「あー、なんて言ったけ？ああ、そうそう、稀人ってやつさ。ま、あんたが敵じゃないなら、言い分くらいは聞いてやるよ。だからさ」

赤々とした瞳が、目蓋に閉ざされる。

「邪魔、しないでよ。手加減できないからさ」

再び目蓋が開かれたとき、そこにあったのは何色か。

誰一人、獣一匹動けずに、ヒジリの足元から闇が広がる。

一瞬の間。

絶望の咆哮が耳朶を打つ。

地面より生えた切っ先が、スノータイガーの群れを一匹残らず串刺しにしていた。

命の赤が、伝い、地面を染めていく。

空気が、地面が、視界が赤く染め上げられていく中、ジエンを始

めとした一行の顔は言い知れぬ感情に蒼白へと変わっていた。そして、ヒジリの凶行が終わる時まで、彼らはその場を動くことも出来ず、立ちすくむことしか出来なかった。

目当ての物を手に入れた一行は、それ以上の探索を行わず帰還した。

行きとは違い、何度か魔物に襲われたが、そのどれもが彼らの歩みを遮るほどの力を持っていなかった。

行きと違うのは、もう一つあった。

誰も無駄口を叩こうとしないのだ。

その上、視線は時折何か聞きたげにヒジリへと向かう。それも気づいたヒジリが振り返れば、すぐに逸らされてしまうのだが。

ヒジリ自身、彼らが何を問いたいかなんて、分かりきっていた。スノータイガーたちとの一戦だろう。少々やりすぎた自覚だってある。だが、出来ればこのままうやむやにしてしまいたかった。

そんなヒジリの内心は知らないだろうが、ザヴィエとシュヨンを除く一行は皆多少の差はあれ、彼女のことを内に秘めることにした。

黒髪の女。

稀人。

凶悪なまでの力。

ヒジリの持つ要素に、あの赤い光景がどうしても重なる。

黙秘することが、少しでもこの嫌な予感が先伸ばされると信じて、決めた。

不意に浮かんだ赤い想像をこの地にもたらす様なことなど、誰一人できはしなかった。

好奇心猫を殺すといった様子の彼らと、暴れてどこかすっきりとした様子のヒジリ。

大きな齟齬をそのままに、一行は回廊を出た。

新年会しましょ

一ヶ月は３０日。一年は１３ヶ月で４０３日。
計算を間違えているわけではない。
ここでは、月と月の間に加護日と呼ばれる日が１３日あり、月に含まれない。
加護日は、光の１３神を一柱ごと奉じ、またその日に生まれた子供は、その神の加護を強く受けているとされる。
そして、１３月と１月の間の加護日は、光明神ジュネレオスの日であり、新年祭の日でもあった。
他の加護日も様々な催し物が神殿を中心に行われるが、新年を祝う為のこの日は、一年で一番大規模で賑やかな日になる。
この時期は、規模の差はあれ、どこの町も新年の祝いに賑やかであった。これから次の加護日までの一ヶ月は、神殿を中心に様々な祭事が行われ、賑わいは続く。
回廊都市『ガンビ』でも、それは同じで、町中が祝いの空気に満ちていた。
多くの者はこの節目に、新たな目標を掲げていることだろう。
だが、残念なことに問題を抱えたまま、新たな年を迎えた者もいる。

宿の一室。
旅先ではあるが、新年の祝いが届けられた部屋は甘い香りで満ちている。
「これで、お方様よりお預かりしたものは以上です」

壮年の男が、自分より年若の男たちによって部屋に届けられた荷を整える。それが終えたのを確認すると、部下を下がらせ、自身の主に向かい直り、次の指示を待った。
部屋には主のジエンと壮年の男が二人。長椅子にしどけなく座していたジエンは、従僕たる男の言葉に腰を上げる。

「そうか。前の手紙で今年は良いと、書き添えておいたのだがな」

口元を笑みの形にしながら、荷に軽く触れる。
木箱に簡素な包装だが、蓋には送り主の紋が焼き印されており、この部屋に運ばれてきた品の中で、最も丁寧に扱われていた。

「礼状は後で用意しよう。それと、適当で良いから、酒を用意しておけ」

「は。ですが、かの者の件、よろしいのですか？」

「ああ。シンモンからの返事がくるまでは、な」

従僕に退去を命じて、部屋に一人となる。
窓の外の賑々しさとは対象に、それを見るジエンの表情は暗い。
昨年の終わりに行った探索は、厄介な事実をジエンの前にさらけ出した。
稀人。
可能性の一つとして考えてはいたが、それは正直当たって欲しくはないものだった。今まで集めた情報はそれを否定する材料どころか、肯定するばかりでヒジリ自身が言ったとおり事実なのだろう。
それに、ジエンとしては相手の反応も予想外であった。
こちらが黙する内は、うやむやにしてしまうだろうと踏んでいた

のだったが。

「あの女、何を考えている」

卓の上にある手紙。新年の祝い菓子と共に、ヒジリから寄越されたものだ。

拙い字で、短く誘いの言葉が書かれていた。

“新年会、やる。酒、もってこい”

文章ともいえないそれと、地図。その二枚以外には何も入っていない封筒は、軽いのに酷く重く感じた。

ジエンとは違い、気楽な者もいた。

昔語りに聞いて、幼心に憧れを抱いていた黒髪の乙女の幻想に罅が入りはした。が、ヒジリが悪いわけでもないと思い直したヴィルだ。

酒の瓶を手に、大通りを歩く。

同じチームの面々は、依頼で商隊と共に外に出ていたり、帰郷していたりして、つるむ相手も特におらずヴィルは暇であった。

自分と同じように都市に残っているリカルダは、依頼者のシュヨンと共に、門開きから連日回廊通いをしている。

通りに面した店先には新年を祝う飾りが付けられ、華やかで賑やかしい。

足早に行き交う人は、寒さに体を縮めながらも新年の賑わいに顔を緩ませている。

若い夫婦が子供を抱きあやしながら、ヴィルの横を通り過ぎる。

幼子の手には黄色く塗られた木の神剣守りが握られている。神殿にでも御参りに行った帰りなのだろう。
なんとも幸せそうで、独り身には少々羨ましい光景だった。

「今頃、あいつは上手くやってんのかねぇ」

彼女と共に帰郷した従弟を思い出す。
色々とあったが、かなり立派な牙を手に入れたのだ。あれならエメリのうるさい父親だって文句一つ言えないだろう。
ヴィルはここ数年会っていない故郷の人々の顔を思い浮かべる。凶王病が流行った年以降だから、四年近くも帰っていない。チームの面子もリーダーを筆頭に、だいぶ入れ替わっている。
故郷に帰った彼らは、元気でやっているのだろうか。

「あぁ、昔が懐かしいなんて。俺も年取っちまったなぁ」

溜息を吐く。
白く変わる息の向こう。そこに肉屋を見つけ、ヴィルは寄る事にした。
せっかくの宴会だ。つまみは大いに越したことはないだろう。

ばれてしまったものは、しょうがない。
そんなことより宴会しようぜ。
ヒジリが考えた末に出した結論は、そんな投げやりなものだった。考えるのに飽きたとも言える。
何も知らぬ子供たちが新年の賑わいに騒ぐのに、釣られているうちにどうでも良くなったのだ。

彼女を良く知る同僚なら、いつものことと言いながら、物理的に痛い突っ込みを食らわせていただろう。
もちろん、異世界たるここに同僚が居る訳もなく、ヒジリの暴走は止まらない。
いきなりサニオスを使った祝い菓子を大量生産したり、宴会をしたりと、ヒジリに振り回されてはいたが、家の者は皆楽しげに日々を過ごしている。
今日も宴会をするというヒジリに買出しを頼まれて、ジョージ達は寒い中を出かける。
ガラゴロと、大通りをジョージ達少年三人組が、荷車を並んで引き歩く。
その荷台には、フレートとハンナが買い物リストと、見た目は可愛らしい猫のぬいぐるみだが中身は貨幣がみっしり入っている結構重いバッグを落ちないように押さえ、大人しく座っている。

「今日は一体、誰が来るんだろうか」

「この間は、院の皆が来てくれたから、さすがに今日は違うだろうしね」

真ん中でぼやくジョージに、右側のアルトが相槌をうつ。

「ヒジリさん。最近は故郷の料理を再現するって、張り切っているよねぇ。でも、少しは量を考えて作ってほしいよ。今日だって、リスト全部買ったら、院でも一ヶ月は優に賄えそうなんだけど」

「あー、確かに。この間作っていた菓子だって、かなり配ったのに残ってるし」

家に残る菓子の山を思い出し、ジョージはうんざりする。

甘いものは嫌いではないし、ヒジリが作るものは美味しいものが多い。
だが、今回は中に入っているサニオスが、正直苦手だった。アルトやザヴィエに言っても分かってはもらえなかったが、僅かながら舌に指すような刺激を感じるのだ。

「まあ、誰が来るのかは知らないけど、あまり夜まで騒がないでほしいなぁ」

「ヒジリさん、酒癖悪いしな」

一度散々絡まれて、いやな目に会ったことを思い出し、三人は遠い目になった。

「アリア、くる、いってた！」

「たー！」

ぼやくジョージたちに、荷台からフレートが口を挟む。
よく遊びにくる少女の名前がでてきて、びっくりするジョージ達は、なぜフレートがそれを知っているのかを疑問に思った。

「ヒジリ、いったよ。アリアのパパ、きょう、いっしょにたべるって」

「いっしょ！」

きゃいきゃいと騒ぎ出すフレートたち。
アリアが来たら何して遊ぶか、相談しているつもりの噛み合わない会話が聞こえてくる。

「そうか」

自分たちには言わないのに、フレートたちには話すヒジリにジョージ達は何だか疲れた。絶対に自分たちの反応を楽しんでいるのだろう。

がくりと大げさに俯いてみせるジョージに、アルトは苦笑した。

「あ」

それまで聞き手に回っていたザヴィエが、声を漏らす。

「どうした？」

俯いていた顔を上げ、ジョージが横を見ると、ザヴィエがどこか困ったような顔をしていた。

「なぁ、肉屋、後回しにしないか」

「なんで今更？後に回したら、無駄に往復するじゃないか」

リストを見て、三人で考えた買い物コース。一番移動が短くて済む筈のそれは、ザヴィエ主導で決めたはずだ。

なのに、もうすぐそこといった場所で何を言い出すのか。

ジョージは首をかしげる。

「……僕も出来たら、後回しにしたいな」

アルトまで賛同するとは。

一体この道先に何を見たというのだろう。

ジョージが顔を前に向けると、二人の意見に納得できる光景がそこにはあった。
肉屋の店先で言い争う金髪のビスターと、仮面の男。
二人とも知り合いであり、特に避けるような相手ではない。ないのだが、正直今すぐ見なかったことにして立ち去りたいと三人は思った。

「だから、金なら後で倍にして払うと、言ってるだろうが！とっとと、それ渡せ！」

「嫌だと言ってるだろうが！酒屋行けよ！」

普段、自分たちをメタメタに伸している教官のデュークが、ヴィルに何やら要求しているようだ。
遠めで良く分からないが、どうやらヴィルの手にある酒瓶を引っ張り合っているようだった。

「ああ、もう。そこのお前！こいつの連れだろうが！止めろよ！」

「あはははは。いや、無理」

肉屋の主人と並んで立つドラゴノフは、ジョージ達のもう一人の教官たるダークだった。
我関せずといった感じで、肉屋の店主から肉の塊を購入している。
堪りかねたヴィルが、現状を打開しようと声を掛けるがあっさりと笑って返される。
さわさわと、ヴィルの髪が怒りで逆立ち始める。
騒ぎに、周囲の人の足も留まりはじめる。
気づかれぬうちに逃げたい。
ジョージたちはそう考えたが、荷車がある為、様子を伺っている

人が邪魔だった。下手に動けば、それこそ気づかれてしまう。
どうするべきか。
三人、顔を寄せ合う。
しかし、そんな彼らの思考を幼い声が遮る。

「おにく、いっぱいかうぞぉ」

「あ、ハンナもいく」

いつの間にやら荷台からにじり降りたフレートと、兄の後を追いかけるハンナ。
幼子二人によって地面に引きずられる猫のぬいぐるみ。金貨の重みで、布地がよれて酷い有様になっている。

「あ、ちょっと！」

ジョージが声をあげるも制止にはならず、二人は一直線に駆けていく。
店先の駄目な大人二人は、突然自分たちの間を通り抜けようとする幼子に驚き、諍いが止まる。
フレートたちは、二人を避けようとは思いつかなかったらしく、顔見知りのヴィルの足を叩いて退かそうとする。

「じゃま！」

愛らしい幼女に見上げられ、きつく駄目だしをされる。

「お、何だ？ちみっこ、お前らだけか？親はいないのか？」

デュークが、幼子に叩かれ困惑するヴィルから一歩下がり、視線

を周囲に向ける。

「お？」

デュークの視線が、ジョージたちを捕らえる。

仮面で隠されているはずなのに、短いが濃い付き合いからかジョージ達にははっきりと分かった。

面白いものを見つけた。そう言っているかのような視線だった。

「なんだ、小僧共じゃないか。お前らの連れか？」

ひょいとハンナを掬い上げる。

急に目線の高さが変わったハンナは、甲高い声を上げて手足をばたつかせるもデュークはそのまま抱きしめた。

「荷車なんか引いて、なんかあんのか？」

どうする？

ジョージたち三人は、思わず顔を見合わせる。

訓練所でのデュークの食べ物に対する執着を思い出し、正直にはあまり言いたくなかった。

宴会するなんて口に出そうものなら、強引についてきそうだ。いや、絶対に来る。

なんと言うべきか。

悩む少年たちを他所に駄目な大人たちは、今度は幼児二人を焦点に騒ぎ始めていた。

「おい、嫌がってるじゃないか。降ろしてやれ」

両手でデュークの体を押しているハンナ。その様子を見かねてヴ

ィルが声を掛ける。

「そうだ」

傍観を決め込んでいたダークも口を挟む。

「デューク、次は俺に抱っこさせてくれ」

「あんたも何言ってんだ！」

尻尾の毛が膨らむほどの怒気をみせる。

ヒジリを筆頭に変人に慣れているヴィルとはいえ、さすがに、我慢の限界らしい。

「アルト！ハンナがわるいやつにつかまったぁ」

べそをかき、ぬいぐるみを引き摺りながら、引き返してきたフレートがアルトの足にしがみつく。

フレートの言う悪い奴とは、間違いなくデュークのことだろう。

涙目で訴えるフレートに、何とかしてやりたいが少年の誰もがあの場に介入したくはなかった。

「やー！」

仮面が怖いのか、ハンナは暴れ続ける。

周囲は、何事かと野次馬が増えていく。

冷たい視線と、ざわめき。巻き込まれただけなのに、心が痛い。

もうジョージたちにはどうしたら良いのか分からない。と、いうかハンナが捕まっていなければ、速攻で逃げていた。

「あんたたち、商売の邪魔だからやめてくんないかね」

肉屋の店主のもっともな一言は、もうしばらく聞き届けられそうもなかった。

ぐだぐだと暴露

赤い、赤い夢を見る。
ゆらりと揺れる水面のような視界は、赤に染まる。
具体的な中身などない抽象的な夢は、いつか見た過去か。それとも、未来か。
時折、思い出したかのように見る夢は、酷くヒジリを傷つける。
ぱかりと、勢いよく開いた瞼。同時に意識も覚醒する。
詰めていた息をゆっくりと吐き出す。そして、己が手を眼前に持ち上げ、確かめるように見つめる。
その手は一瞬だけ、血に塗れて見えた。

「おい、大丈夫か」

ヒジリがぼんやりとした頭で、声のする方に向き直る。
やや眉間に皺をよせたヴィルが、ヒジリの様子を心配げに見ていた。

「水、飲みますか？」

ヴィルの後ろから顔を覗かせるライが、手のグラスを揺らしながら聞く。

「んー、いや、いらない」

なぜ、彼がここに居るのだろうか。
一瞬疑問に思うも、居間の現状が視界に入れば、直ぐに理由に思い至った。

今日、新年会と称して開いた宴会に、ヒジリ自身が招待していたのだった。
酔いでぼんやりする頭を振って、ヒジリは周囲を改めて見る。
居間には二人以外には、ジエンしかいない。
空になった皿はテーブルの上で積み重なり、それらを食べていた筈の子供たちの姿が無い。

「あー、他の皆は？」

不自然な体勢で寝ていた為、こった首を凝りほぐしながらヒジリは尋ねる。

「二階に寝かせてきた。アリアも一緒に寝るってぐずったから、すまないけどベッドを借りたよ」

ライが笑いながら、テーブルにグラスを戻す。

「ジョージたちは、あの先生たちに余興として散々遊ばれたからな。隙見て、部屋に逃げたぞ」

呆けていた顔をしていたのだろう。
ライの言葉に付け足しながら、ヴィルがヒジリの頭を叩く。

「へー」

「で、その先生たちも明日仕事だから、と帰っていったんだが。どうする、お開きにするか？」

酔いつぶれて寝ていたことで、気を使ったのだろう。
ヴィルがヒジリの頭の手をそのままに、提案する。

その手を振り落とすかのように、勢いよく頭を左右に振る。
今日の宴会には、一つの目的があった。
「言いたいことがある。多分、そこのあんたが一番聞きたいことだと思う」
少しだけ。ほんの少しだけ、自分のことを話す。
もう既に一端はばれてしまっているのだから、もう少しだけばらしても問題ない。
やりたくないが、いざとなれば全力を出せばいい。
最後の戸惑いを振り切る為に、ヒジリは軽く目を閉じた。そして、ゆっくりと瞼を押し上げた後、杯を傾けるジエンを指差し、口を開いた。
その言葉に、ヴィルは肩を竦め、ヒジリの隣に腰を下ろした。
「ほう。なら、教えてもらおうか。……稀人だというのは、真実に相違ないか」
酒を飲んだというのに、少しも乱れたところの無い男が、杯からヒジリへと視線を移す。
「ああ。異世界から来た」
異世界。
どんな世界だと、問うことはしなかった。
ジエンとライにとって、今聞きたいのは別のことだった。
「誰に召喚された？」
ジエンの視線が、鋭くヒジリに刺さる。

答え次第では、それは直ぐにでも殺気へと転じるだろう。

「誰にも。こちらに来たのは、あくまで事故だから。時が来れば帰る。だから、出来れば、その時まで放っておいてほしいのが本音」

視線を遮るように、軽く手を横に振りながら、笑ってみせる。事故なのだ。

あの時、世界に歪みが生まれた理由が、誰かのせいであったとしても、呼ばれたのは自分たちではない。

そう、ヒジリは過去の経験から確信していた。

「そうか。確かに秘する方が望ましいな」

呟き、ジエンは軽く目を伏せる。

何を考えているのだろうか。ヒジリには読み取れない。読み取らない。

「それにしても、お前が稀人って、何か残念な気がするな」

深刻な彼らを茶化すように、ヴィルがヒジリを小突く。

「残念ですみませんね」

口を尖らせて、膨れてみせる。

「まあ、これは興味本位なんだけど。稀人ってさ、実際、どう影響あるのさ」

「そうだな。色々とあるが、お前に直接関係することだけを言う。お前が何者で、どのような力を持つかはこの際関係ない。この国の

権力者だけでなく、帝国も稀人というだけで、お前を得ようと画策するだろう。それはきっと周囲を巻き込む」

周囲。

それは、確実に、今部屋で安らかに眠る子供たちを指す。

それ以外で、ヒジリの周囲といえば今この場にいる者と探索者の知人、それと孤児院の人々だ。

圧倒的に子供など、社会的弱者ばかりだ。

権力者の手に掛かれば、容易く、その運命は悪いものへと変えられてしまうだろう。

「手段は選ばないって奴？……胸糞悪い」

口をへの字にまげて、不快感を露わにする。

もちろん、ヒジリだけでなく、男たちも、その表情は苦いものがあった。

「オウカの人間が言うことではない。が、今、この国は厄介な事態を抱えている」

そう前置いて、ジエンは口を開く。

「今は小康状態だが、この大陸は帝国とオウカの二つの勢力に分かれて争っていた。数年前に帝国の凶王が倒れるまで、頻繁に戦闘が行われていた」

一度、杯で口を湿らす。

説明は続いた。

ペルセディアは位置的な問題も有ってか、先々代からオウカに友好的な政策を取っていた。幾度の戦争もオウカ側に組していた。

だが、それを由と思わぬ者もいた。
原人信仰者とも言われる差別主義者たちだ。彼らは自分たちが亜人とみなすビスターやエルフなどを嫌悪し、彼らが多く住むオウカを嫌悪している。帝国はそんな原人信仰者が王たる国だ。
神たる原初の人を生み出すために、非道な研究を行っていた時代もある。マジクリングは、その研究の被験者の子孫とも言われている。事実、マジクリングの出生率は、帝国側のほうが多い。
そんな彼らが、稀人を必要とするのは、その力ももちろんだが、神への信仰ゆえであった。
経典によるが、稀人が住む世界を神々が住む天上と位置づけることが多い。
故に、稀人は神と同等の存在であるという考えが彼らにはある。
彼らほどではないが、大陸に住む多くの者は、稀人を特別視していた。各地に残る伝説が、その思いを失わせはしなかった。

「あー、俺は、帝国じゃ繁栄をもたらす存在だって言われていた、と聞いたが？」

ジエンの説明に、ヴィルが口を挟む。

「ああ、確かにその理由の方が有名だろう。神と同等の存在が、帝国を加護するのだから間違いでもない。帝国の原人信仰者は多いが、かの国は幾度の戦争で、周辺諸国を吸収しているからな。国民と言っても、文化は様々だ。表立っては、その主義をだすことは少ない」

「そんなもんか」

がしがしと、頭を掻くヴィル。
ヒジリには、どこに頷ける要素があったのかさっぱり分からない。

「で、帝国が稀人大好きって事はわかったけど、それが、どうこの国につながるのさ」

皿に残る饅頭に手を伸ばしながら、尋ねる。

なぜそこまで他国のことに詳しいのか訝しげに思いながら。

「この国において、その主義者の代表的な存在が、王の第二子クリストフの母方の伯父で、後見人でもあったゲラルトだった。彼はクリストフ誕生後、自分に同調するものを集めた。オウカ寄りの勢力を後見にもつ正妃が、子を成す前に事を起こそうとしたのだ。その後、表向きは病の為、実際は国家転覆を図った罪で領地の『ウケイ』にて幽閉。数年前、遠縁の養子に家督を譲らされた後、憤死している」

必死に理解しようとするヒジリ。

ヴィルも内心まずいことに首を突っ込んでいることを自覚し、今更ながら自身の運の無さを悔やんだ。だが、知らないままという選択はできなかった。

一介の探索者では到底知りえない事実は、これより先もヒジリと友である以上必要な知識だった。何も知らないまま喪失と無力に嘆かぬためにも。

そんな二人の様子を見、ジエンは再び口を開く。

「ゲラルトが幽閉された後、クリストフは継承権を格下げされた。彼自身は、ゲラルトに旗印にされただけだ。まだ何も分からぬ幼子だったが、先天的な病が見つかった事で表向きの理由も整っていた。しばらくして正妃が身ごもり、正式に継承権は剥奪された」

クリストフ本人には、到底納得の出来ぬ決定だったのだろう。

一時的に預けられた神殿にて、いくつかの騒ぎを起こしている。

最終的に預けられた『ガンビ』にて、騒ぎを起こした時は、ライ自身がその騒ぎを解決する羽目にもなった。
ライにとっては、忌々しいながらも人生の転機となった事件だ。
顔を伏せ、誰にも見せぬよう複雑な思いを浮かべた。

「俗世と切り離し、神官にする話も出たのだが、王の寵愛厚い側妃の嘆願もあり『ウケイ』の屋敷にて監視つきで暮らすことになっていた。ゲラルト派の残党への配慮だったのかも知れん」

逆に言えば、配慮が必要なほどゲラルトの考えに同調する者が多かったのだろう。
言葉を切り、空になった杯に酒を注ぐ。
途切れたジエンの言葉を継ぐように、今度はライが口を開く・

「今、王都には、異世界から来たという黒髪の少女が居る。もし、少女が君のような力を持っているなら最悪、国は二つに割れる」

「どうしてさ?」

異世界から来た少女。
もしかしたら同郷かもしれない。
もしそうなら、一度彼女に会わなくてはいけない。
そう思いながら、ヒジリはそのことには触れず、話の続きを促した。

「彼女を召喚したのが、クリストフ王子その人だから」

王の血を引く権利を奪われた者。それがどうして、信仰を集めるものを身元に呼び寄せたのか。
本意は分からない。

が、それは嫌な憶測を呼ぶのに十分。ゲラルト派の残党の動きを促すことは、簡単に予測しえた。
一気に、杯を干したジエンが口を開く。
「もう一度言う。お前が稀人であると知れたら、彼らはお前を取り込もうとする。いや、帝国も動くだろう。お前は、確実に特異なる力を持っているのだから」
回廊で見た光景。
一瞬にして、数多の敵を殺す姿。
どのような術を用いても、容易くあの光景を再現することは出来まい。
だが、目の前のヒジリはそれを容易くやり遂げた。
そして、ジエンの目には、それ以上の余力を隠しているように見えた。
恐ろしいことに、多分、それは事実だろう。
もし帝国が彼女を手に入れれば、崇拝する対象の持つ力に酔い、再び大陸を二つに分かつ戦端は開かれる。その時、オウカは勝てるのか。
たった一人に、適わない。そんな物語のような光景が、簡単に想像できてしまう。
酒に酔い、抜けた顔を晒している男のような女。
伝説の神聖さのかけらも無い。
こんなどこにでもいるような容姿の者に、畏怖を覚えるなど、自分が惨めに思える。
ヒジリが知れば、むくれそうなことを考えながらも、ジエンは言葉を続ける。
「お前は、同量の金より価値有る存在だ」

「あんたは、いらないの？」
どこか突き放したように語るジエンに、からかうように尋ねた。
それに応えるように、ジエンは口の端だけを歪め笑う。
「欲しいと言えば、従うか」
「お断りします」
即答。
もっとも、ジエンとて、答えが端から分かっていて聞いたのだ。
口元の笑みが、一層はっきりしたものになる。
だが、次の瞬間。
重い話を緩めたやり取りは、ライが口を開いたことで無駄となる。
「……一度で良い」
ゆっくりと紡がれる言葉。
しばし伏せていた顔を上げ、ライはヒジリへと近づく。
「一度で良いから、出来れば、どうか我が主に力を貸してくれないか？」
「あんたの主って」
そう言えばこの人、どこぞに使えている騎士だった。
受け取った手紙を思い出し、名前が出てこず首をひねる。
そんなヒジリの様子に、ライも言葉が足りなかったことに気づいた。

「主の名は、ジークリンデ。クリストフ王子の姉に当たる方だ。今年、オウカとの同盟強化の為、王家に嫁ぐことになっている」

同盟の為。政略結婚なのだろう。

自由恋愛が当たり前な世界から来たヒジリには、古臭く同情してしまいそうな単語だ。

だが、それを口にするライはどこか喜ばしいものを告げるようだったので、本人にとってそれほど悪いものでもないのだろう。

真剣に考えたくなくて、つい、ヒジリの思考は逸れる。

「後ろ盾も無く、外に嫁ぐ方だ。何かをなさろうにも頼れるものが少ない。だから」

「それって、私が力貸したらさ、下手すると国を二つに分けるんじゃない？」

王の子供が二人、互いに稀人の加護を得ていると思われたら。

下手な考えを胸に抱く輩がでてもおかしくは無い。

そう、この国の過去の伝説が、その考えを可能なものとして芽吹かせるだろう。

幾らヒジリがこの国に疎くても、物語には良くあるお家騒動物のお約束だ。容易に想像は付く。

「そうかも知れない」

肯定されて、溜息がでる。

だが、真剣なライの表情に、ヒジリは思考する。

顔も知らない相手だ。何の義理も無い。

それに、彼は何に力を貸せと、具体的に言わない。彼の言い分が真実か、確かめられない。

だが、聞いたらもう引き返せない気もする。
まあ、全てを正直に明かしていないのはヒジリも同じなので、人のことは言えないのだが。

「あー、うまく言えないんだけど。私、一応、元の世界に使える主っていうの？そういう人いるんだよね」

ライは、悩むヒジリから視線を逸らさず、ただ答えを待っていた。
真摯な瞳。
そんな眼差しに、流されてしまいそうになる。
何だかんだ考えたところで、短い付き合いだが、ヒジリは自分の周囲の人々を気に入っていた。
嫌われたくは無かった。
ライに何かあったら、きっと宿の主人とアリアは悲しむだろう。
そんな顔を見る未来は、嫌だった。

「……だから、稀人じゃない唯の一探索者としてなら、報酬次第で助力するよ」

根負けしたように、両手を挙げ、それだけを口にする。
相手が美形なのが悪い。
内心、上司に言い訳しながら。

「……今はその言葉だけで十分、か」

溜息混じりに吐き出された言葉。
それは、この会話を切り上げる言葉になった。
ただ後は、静かに残る酒を飲み続ける。
苦い思いが残る、宴の幕引きだった。

迷子のハンナ

「わんわん！わんわん！」

左右に振られる尻尾を追いかけ、ハンナは走る。

今日はヒジリ製作のうさぎぬいぐるみのリュックを背負って、ハンナは兄と一緒に、夕飯の買い物に付いてきていた。

ぬいぐるみと同じ耳付きフードの茶色いコートは、寒さからハンナを守っている。

もこもことした塊が、転がるように犬を追いかける。

犬は少々迷惑そうに時折振り返りつつも、とつとつ、とリズムよく歩いていた。長く薄褐色の毛は泥に汚れ、やせているのに、腹だけが膨らんでいる。

そんな野良犬のどこが御気に召したのか。ハンナは手を伸ばし、追いかけるのを止めない。

人混みを掻い潜りながら、一人と一匹はどんどん街の端へと向かっていく。

ジョージは焦っていた。

買い物の途中、はぐれたハンナを探しに、アルトたちと三手に別れた。

もしかしたらと、路地裏に入ったのがまずかったのだろう。

気が付いた時には、既に遅く。

明らかに、柄の悪い男たちに絡まれてしまった。

「お前、あの白牙鬼のとこのガキだろう。あ？いい服着てんじゃねぇかよ」

一番年嵩の男が、ジョージの前に立つ。

左右を剣を腰に差した男たちに挟まれ、逃げ道を失う。

思わず後ずさるが、背を壁にぶつけ、これ以上下がることも出来なかった。

「な、何を」

怖い。

恐怖で、上手くしゃべれない。

だが、それでも。

伏せそうになる顔を上げ、視線だけは逸らさず。

ジョージは、今にも震えだしそうな自分の足を叱咤した。

「あいつ、だいぶ景気いいみたいじゃねえか。だからよ、俺たちにもちょっと位、分けてもらいてえなぁと思うんだが」

にやにやと、だらしない口元。

何て典型的な恐喝。

叫んで助けを呼べば。路地裏といっても、ほんの少し先は大通りで、人通りも多い。

きっと、誰かが助けてくれるはず。そうじゃなくても、アルトたちが気づいてくれれば。

そう思うが、実際自分よりも体格のいい男たちに囲まれると、心は恐怖でいっぱいだった。

ぐるぐると、空回りする思考。

かちゃりと、男たちの腰から聞こえる金属音に、背筋が震える。

母さん！

いるはずも無い、母に思わず助けを請う。

「何、ちょっと腰のもんをこっちにくれりゃいいんだ」

「なあ、お前、あいつの情人なんだろう？腰振って、おねだりしてんのかぁ？いいよなぁ、それで、贅沢できるんだからよぉ」

「平凡な顔だが、この黒い髪がいいのかねぇ。それとも下の具合がよっぽどいいのかぁ？」

下卑た笑い。

さげずみ、いたぶる言葉がジョージへと降り注ぐ。

言い返したい。

言いがかりだ、と。

勝手な想像はやめてくれ、と。

でも、ジョージの舌は恐怖で縮こまり、口は言葉を吐き出さない。

「ほら、どうなんだよ。ああ？」

青ざめた顔で、今にも震えだしそうなのに。

それでも視線だけは逸らさないジョージに、正面にいた男は苛立つ。

黒ずみ荒れた大きな手で、軽く小突き始める。

それでも、ジョージは喉の奥で呻くばかりで、まともな言葉を吐けずにいた。

からかうような軽い衝撃は、徐々に暴力じみたものへと変わる。

痛みに、恐怖が増していく。

怖い。

痛い。

怖い。

ぐちゃぐちゃとしたもので、体中が満ちていく。
そして、それは頭を叩かれたことでこぼれだす。

「……いぁだ」

「ああ？」

「い、やだ。嫌だぁ！！」

口を付いて出た言葉は、男たちへの拒絶だった。

「！？てめぇ」

男が、胸倉を掴む。
ぐぅっと、ジョージの喉がしまる。
苦しい。
一気に距離が狭まり、男の顔で視界がふさがれる。
怒りの眼差しに、恐怖を通り越して諦めが胸に満ちる。

「ふざけんじゃ、ぐが！？」

何かが飛んできて、胸倉を掴んでいた男の手が外れる。
閉められていた喉に、一気に空気が流れ込みジョージは咳き込む。

「な、何だ？」

何かが当たった頭をさすりながら、男は物が飛んできた方を向く。
他の男も何事かと顔を向ける。
人影。
誰も制止する間もなく、それは動いた。

「がぁっ！？」

一番通りに近い男が、衝撃に悲鳴を上げる。
手本のような踵落しが、男をひれ伏せさせた。

「よお、小僧」

振り下ろした足をそのままに、デュークが笑う。
顔を半分仮面で隠しているにも係わらず、誰がみてもはっきりと分かるほど口を歪め、男たちを嘲笑していた。

「な、なにしやがぁぅ！！

足蹴にされた男がもがくが、ぐりぐりとそのまま地面へと強制的に仲良くさせられる。

「これ以上の助けが欲しくば、菓子を寄越せ」

「持ってません！」

「よし、夕飯をご馳走してくれるのでかまわない」

何がよしなのか分からない。
だが、ここで反論して立ち去られても困る。
ジョージは、結局恐喝されるのかと内心思いながら、デュークの言い分を飲む。
頷いて見せれば、デュークは満足げに鼻を鳴らした。

「てめぇ、ふざけやがって！」

無視された形の男たちは、顔を怒りに真っ赤にして、デュークへと剣を抜いた。
対するデュークは、丸腰だ。
服も寒さから厚着ではあるが、防御力など大して期待できはしない。
だが、デュークは笑みを崩さず、挑発するかのように、顔の横で両手を振った。
それは、この場でジョージにだけ分かるハンドサイン。
下がれ。
訓練所で、何度も見たそれ。
声が届きにくい遠方からでも、分かるように使われるそれ。
男たちは、気づかない。
れろれろと、舌までだしてからかうデュークの手の意味を。
男たちの視線がデュークへと注がれ、取り囲むように動く隙に、路地の奥へとゆっくりと静かに下がる。
振り下ろされる剣を交わすデュークは、歌いだす。
それを挑発と受け取った男たちは、罵声を上げながら襲い掛かっていく。

「！！おい、てめぇ！」

男の一人が、ジョージの動きに気づく。
が、伸ばされた腕がジョージを捕らえるより先に、不可視の壁がジョージを守るように立ちふさがった。

「な！？」

見えない何かにはじかれた男が、驚きに振り向けば、不思議な色をした水の鎖が視界に広がる。

その向こうに、歌うのを止めたデュークの姿が見えた。
仲間の男は、一人、また一人と、鎖に打たれ、地面へと崩れ落ちていく。

「魔法使い、だと！？」

自分以外、仲間が地に倒れ付す様に、男は顔が引きつるのを止められない。

「いいや、違うね」

驚愕する男を否定する。

「どこにでもいる平凡な教師さ」

笑いながら言うデュークに、男は剣を持つ手に力がこもる。

「そうかい。だが、いい気になるなよ。魔法使えんのは、てめぇだけじゃねえ」

男の笑みに、デュークの口元から笑みが消える。

「≪解呪≫！」

男の魔力が込められた声に、デュークの周囲の水の鎖が支えを失い、地面へと落ちる。
パシャリ、と、音を立て、足元に水溜りが生まれる。
それを合図に、男が間合いを詰め、切りかかってくる。
だが、デュークとて伊達に教官をやっているわけではない。
男の剣を軽々と往なすと、更に間合いを詰めて拳を当てていく。

男は、殴られた腹を片手で押さえると、壁際へとよろめく。
止めとばかりに、足を振り上げる。
が、何かに足首を掴まれ、デュークは動きを止める。
打ち倒されていた男の一人が、往生際悪く手を伸ばしていた。
足は目標を変え、振り下ろされる。
だが、それは大きな隙を生む。

「うおぉぉぉっ！」

壁にもたれていた男が、声を張り上げる。
足首は、弱弱しい力ではあったが、未だ掴まれていた。

「！！」

最後の悪あがきか。
男が振るった剣が、デュークの仮面を掠り、下へずらす。

「チッ」

体勢を崩しながら、デュークがパチンと指を鳴らす。
魔力の塊が放たれ、男の鳩尾にあたり、後方に叩き倒す。
壁へと、男の体が勢いよく打ち付けられる。
水気を含む嫌な呻きを吐くと、男はそのまま地面へと崩れ落ちた。

「つ、強い……あ、大丈夫ですか、デュークさ、ん！？

ジョージは目を疑った。
デュークの輪郭がゆらゆらと、ぶれて見えた。
男に叩かれた影響なのか？
慌てて目をこするも、ジョージの視界に映る光景は変わらない。

ただ、デュークだけが幾重にもぶれて見える。
それも、徐々に酷く、別人が数人重なって見え始める。
「おい、目がどうかしたのか？」
理解できない光景に目を覆い蹲ってしまったジョージに、デュークは驚き、声を掛けた。
顔を覗こうと腕を伸ばし、自身の腕がぶれて見えることに気づく。
「チッ！壊れたか」
仮面を外す。
すると、輪郭のぶれが無くなり、そこには美しい女性の姿があった。
服も髪も先ほどのデュークと同じものでありながら、まったくの別人がそこには居た。いや、仮面に込められていた力が、先ほど前でのデュークの姿を周囲に映し出していた。
重ね着の服の上からでも、分かる凹凸の有る女性らしい肢体。思わず見とれるほど整った容姿。長い睫に縁取られた瞳は、不思議な色を宿す。
「あー、またダークの奴に何か言われるじゃねぇか」
なのに、口から吐かれる言葉は、外見を裏切るいつものデュークであった。
「ったく。やっすいもんじゃねぇのに」
仮面を眺め眇めつ、悪態をつく。
足は、地面の小石を蹴り、倒れた男たちにぶつけている。

仮面に走る傷は、施された刻印を欠けさせていた。
「しかたねぇなぁ」
仮面を懐に仕舞うと、フードを深く被り、呪文を唱える。
「≪幻影姿≫」
魔力光がデュークの体を包み、消える。
後に残ったのは、いつもの仮面をつけたデュークの姿だった。
「で、お前は、いつまでそうしてんだ？」
目を覆ったまま、ぶるぶると小動物のように震えているジョージをつま先でつつく。
「ちょ、いた。いたい。え、あれ？ぶれてない！？」
ぱちぱちと、まばたきしながら慌てるジョージに、デュークは更につついて、立つことを促す。
「ほら、とっとと立って、他の奴と合流するぞ」
「え？」
「ちみっこ、探してんだろ？お前まで迷子になってんじゃねえかって、アルトが言うからな。あっちは、あいつらに任せて、俺がわざわざ迎えに来てやったんだよ。ま、迎えに来て正解って奴だな」
伸びている男たちを親指で指し示し、笑う姿にジョージも釣られ

る。

「そ、そうだったんですか。あ、ありがとうございます。……もしかして、アルトたちにも食事たかってません？」

にやりと、笑ったままデュークは答えない。

多分、たかっているな。

ジョージは助けてもらった手前、こらえはしたが、溜息をつきたかった。

「じゃあ、こいつらは俺が何とかしておくから、お前はとっとと、アルトのとこに行きな。いつもの菓子屋前だそうだ」

「あ、はい」

立ち上がり、泥の付いた足でつつかれ、汚れた尻を叩く。

先ほどまで怖い思いをした路地裏から通りに出て、待ち合わせ場所に向かう。

甘い香りが漂う店の前には、アルトたちが立っていた。遠くからでもはっきりと分かった。ただでさえ、大きなダークがフレートを肩車していたのだから。

ほっと安堵しながら、ジョージはアルトたちに合流した。

汚れていたからだろう。心配と労いの声を掛けられる。

そんなジョージたちのやり取りを遮るように、ダークが声を掛ける。

「最後にはぐれたのは、ここでいいのか？」

「あ、はい。そうです。ここでお菓子を選んでいる、と思っていたんですが」

アルトが肯定する。
肩車されているフレートも、こくこくと頷いている。
「媒体は何を？」
ザヴィエが尋ねる。
ジョージには分からないが、ダークが何をしようとしているのか察しているのだろう。
「血縁者がいるからな。まったく知らない相手でもないし、今回は、別に必要ないな」
「そうですか」
「では、ザヴィエたちは少し離れていてくれ。≪痕跡感知≫」
ダークが魔法を唱える。と、同時にダークの目元が淡く光る。
ぐるりと周囲を見回した後、ハンナの痕跡を見つけたのか、ゆっくりとダークが歩き出す。肩車はしたままだ。
ジョージ達ははらはらしながら、その後を追いかけた。
「……居た」
空が茜色に染まった頃。
街外れの空き地で、ハンナは見つかった。
ぬいぐるみを枕に、くうくうと木の根元で丸くなって寝ていた。
ぬいぐるみの背のファスナーからは、おやつにと持たせていた菓子がこぼれ、それをやせた犬が口にしていた。
ハンナを起こさぬように、ゆっくりと様子を伺いながら。

「ハンナ、よかった」

犬を刺激しないよう、ゆっくりと近づけば、犬はそっとハンナから離れた。

「ハンナ。起きて、ハンナ」

目覚めた後、ハンナは暴れた。

抱き上げて、連れ帰ろうとする皆の手を掻い潜り、大人しくしていた犬にしがみつく。

「きゃん！」

甲高い鳴き声があがる。

「わんわん。わんわんも！」

犬の尾を掴んで離さない。

「放しなさい！こら」

「やー！」

駄々をこね始めるハンナ。

抱き上げて、手を放すように言うアルト。

きゃんきゃんと、哀れな犬。

ジョージたちは、手が出せず、わたわたとしていた。

誰も帰ってこないので、不安になったヒジリが迎えにくるまで、そのぐだぐだとした三すくみは続いた。

結局、犬もヒジリたちもハンナに根負けする形で、連れて帰ることにした。

犬はオハナと名づけられ、薪置き場横の空き木箱が寝床となった。

オハナが身重だと気づくのは、もう少し後のことだった。

ある日の惨事

その日、街はちょっとした騒ぎになった。

居住区の一角。探索者たちの為の貸家が並ぶ場所で、一つの事件が起きた。

切欠は、探索者同士の些細ないさかいだった。ただ、その探索者たちがそれなりの実力を伴うマジックユーザーだったのが、事件を大きくした。

両者が狭い路地で、行った魔法を交えた喧嘩は、一軒の古びた貸家に飛び火し、火事になった。

幸い、近くに居た者の手によって消火及び救助活動が行われ、火災の規模の割りに被害が少なくすんだと、当初は思われていた。

だが、鎮火間近に貸家から飛び出てきた存在たちが、更に事を大事にさせた。

華炎蝶。

回廊内に巣食う魔物の一種で、火属性の魔法生命体である。休眠状態はルビーに良く似た玉石で、一定以上の魔素や火を吸収すると活動を再開する。

青から赤へと揺らめく炎の羽を持つ大変美しい蝶の姿だが、一個体が子供と同じ位の大きさがあり、周囲に毒のガスを撒き散らす厄介な存在だ。また、水属性を除く攻撃が聞きにくいのも厄介さを増す要因である。

本来は、回廊外への持ち出し禁止品の一つなのだが、貸家の住人は宝石とでも間違えていたのか。

ひらひらと、周囲を飛び回る華炎蝶の炎の燐粉が、周囲の家々に飛び散り、火種となる。

このままでは、この辺り一体が火の海になるのは確実といえた。
些細なことから始まった騒ぎは、拡大していくばかり。
そして、そんな騒ぎの真っ只中。
運が悪いことに、ヴィルとサヴィエが、慌てふためき右往左往する人々の中に居た。
先日の宴会で落とし忘れていったものを届けられて、礼代わりの昼食に出向いた。その道すがら、人が多い場所に出た所で、騒ぎに遭遇してしまった。
最初に魔物に気づいた誰かの悲鳴が、通りに響いてからわずかの間に、周囲はあっという間に混乱していた。
無理もない。
住民に探索者が多い一角といっても、全体から見れば、そうでない人間のほうが多いのだ。
甲高い悲鳴に、怒鳴り声。
周囲の喧騒の中、少しでも開けた場所へと移動しようと、二人は流れに逆らわず、動いた。
それでも、混乱の中、流れに逆らうものも多い。
ヴィルよりも大きな体躯の男が、獲物を手に騒動の中心へと向かおうと、通りを掻き分けていた。
無理やりなそれに、押された人の波が二人の下にも来る。

「っ、大丈夫か？」

押され、転びそうになるザヴィエをヴィルが胸で受け止める。
まだ幼さが残る体は、勢いがあってもそれほどの衝撃はもたらさなかった。

「は、はい」

縋り、体勢を立て直しながら、応える。

その間も何度か押され、ぶつかられる。

「っう！」

足首に痛みが走る。

ザヴィエが思わず眉間に皺を寄せると、それに気づいたヴィルは片手で体を支えた。

「しかたねぇ。ちょっと、これ持ってろ」

ヴィルから鞄を押し付けられ、思わず受け取る。

いきなりのことに、首をかしげるザヴィエだったが、ヴィルの次の行動に小さな悲鳴を上げた。

「大人しくしてろよ」

「え？うぁ」

一声断りを入れると、ヴィルはザヴィエの体を抱え上げる。

俗に言うお姫様抱っこという形だ。

本当は背負うことが出来たらよかったのだろうが、人が密集していて、体を入れ替えるような余裕がなかった。

「しっかり、掴まっていろよ」

「え？あ、うわ！？」

揺れる体に、ザヴィエは思わずヴィルの服を掴む。

大きな音が、騒ぎの中心から響いてくる。

肩越しに見えるのは、空を舞う魔物とそれを打ち落とそうと飛ば

される魔法の矢弾だった。
黒い煙がもうもうと、空を覆わんばかりに広がっている。
赤と黒と焦げた匂いの恐怖が、そこにあった。

「ヴィルさん、あれ！」

魔物が一体、魔法の衝撃で、二人のいる方へと吹き飛ばされてくる。
周囲の悲鳴が、大きくなる。
ぐいっと、ザヴィエに回された腕の力が強くなる。
その強さに、ザヴィエは思わず目を閉じる。

「くそ！」

炎の羽が人々の頭上を掠めていく。
庇うように抱えられたザヴィエは、熱風をかすかに感じた。
閉じた瞼を開けば、ヴィルの髪がこげているのが見えた。
うっすらと、煙が出ている。もしかしたら燃えているのかもしれない。
慌てて、ザヴィエが片手で焦げた部分を払うように叩く。

「わりぃな」

ザヴィエを抱えなおしたヴィルが、周囲を見回す。
近くを舞う魔物に人々は慌てふためき、周囲を塞がれ、行くも退くもできなかった。
どうしようもない。
ただ、訪れる転機を待つしかなかった。
そして、その機会は思ったよりも早くこの場に訪れた。
舞う火の粉が人々に降り注ぐのを防ぐように、薄い水の幕が大通

りから広がる。

「“落ち着け”。“道を空けよ”」

ヴィルたちの前方から静かな声が、喧騒の中響く。

その声が聞こえると同時に、心が穏やかになる。

「……これは」

先ほどまで必死の形相だった人々が、落ち着いた表情で左右に身を寄せ、空間を開ける。

その先に、杖を持った老人を先頭に、武装した集団が立っていた。

白い金属鎧を着た男が、前に出て声を上げる。

ヴィルのところまで、声は明瞭に届きはしなかったが、どうやら避難指示をしているようで、大通りに近い人から整然と動き出している。

上空を飛んでいた魔物は、いつの間にか空中の水の檻に閉じ込められている。

「騎士団の連中か。珍しく迅速なことだ」

ヴィルたちの近くにいた年老いた男が、忌々しげに呟く。

集団の数人が着る白い鎧。

その胸には、確かに王国騎士の証たる紋章が刻まれていた。

騎士を先頭にし、武装した集団が騒ぎの中心へと歩いていく。

急ぎたいであろうが、この混雑だ。落ち着いているとはいえ、また何かあればパニックになりかねない。

刺激せぬよう移動する一団が、横を通り過ぎるのをヴィルは大人しく待った。

「……あ」

腕の中のザヴィエが、声を漏らす。

「どうした？」

「ライさんが、居たような」

ザヴィエの視線の先を追う。
確かにそこには、ライに似た騎士の男がいた。
それも他の騎士とは違う、濃紺の鎧を身に纏っている。

「蒼雷……いや、まさかな」

数年前の騒ぎの中心人物となった男が、後姿に重なる。
神殿を血で染めた男。
到底、騎士にはなれぬ所業をおこなった男と重ねては、あの騎士に悪いだろう。
軽く頭を振って、自身の考えを追い出す。

「ヴ、ヴィルさん！？」

振られた頭の動きにそって、揺れる髪がザヴィエの頬を叩く。
ちくちくとした、些細な痛みにザヴィエが困惑の声を上げる。

「いや、すまん。なんでもねぇ」

遠くの誘導の声に従い、ヴィルはザヴィエを抱えなおし、歩き出した。

「災難だったな」

「まったくだ」

結局、騒ぎは騎士団と協力者の力で、人死にを出さずに終わった。
怪我人はさすがに出たものの、神殿から癒し手が寄越されたこともあって、さほど大事にはならなかったようだった。
それでも、巻き込まれたものにとっては、堪ったものではない。
ヨーンとて、故郷から戻って早々。ヴィルを訪ねてみれば、半壊した建物に驚いた。

「まさか魔物じゃなくて、ネーヤに家壊されるなんて思ってもみなかった」

「力みすぎるなって、あれほど注意してたんだけどねぇ」

がしがしと、頭を掻くヴィルに、ヨーンも苦笑する。
年若い仲間に指導していたのは自分たちなので、成長の無さが残念さを増している。

「荷物なんてほとんどないが。だがなぁ、それなりに愛着はあったからなぁ」

騒ぎで最初、魔物を相手にしていた中にチームメンバーが居たのを、ヴィルは後で知った。
誘導された避難先でザヴィエと二人、近くの屋台で買った串焼きを食べていたら、泣きながら見知った顔がこちらに向かってきた。

チームメンバーのネーヤだった。
地面に額を同化させる勢いで、謝るネーヤに話を聞けば、ヴィルは思わずこめかみを押さえる内容だった。
ネーヤは、迫る魔物に軽いパニックに陥ったらしく、加減なしの魔法をぶっ放した。見当違いの方向に。
そして、運悪く着弾したそこは、ヴィルが部屋を借りている家だった。

「でも、まあ、ヒジリに部屋貸してもらえて、良かったじゃないか。これからの時期は、宿屋も満室ばかりだし」

一緒にネーヤの謝罪を聞いていたザヴィエの口利きで、ヒジリの家に居候することになった。
もちろん、次の貸家が見つかるまでの期限付きだが。

「ああ、確かに来月か。今年はどうすんのかね、うちのチームは」

「出来ればやりたくないけどなぁ。かといって、物入りなのに贅沢も言ってられないし」

去年引き受けた護衛任務の散々さを思い出し、二人はげんなりとする。
プライドと家柄だけは高い子供のわがままを、聞き続けなければいけない仕事など、出来ればやりたくないのが本音だ。

「リーダーもさすがに去年で懲りただろう。それに、あのオウカの旦那のご指名が続いているから、大丈夫じゃねぇか？」

「そっちもなぁ」

何だかどんどんと、厄介なことに足を踏み入れている気がする。
そうは思うが、ヨーンに愚痴ることでもない。
ヴィルは、グラスの中身と共に、言葉を飲み込んだ。
ヒジリは命の恩人だが、もしかしたら疫病神なのかもしれないな。

探索の裏方

斡旋所の朝は早い。

受付業務といっても、一口では語れないほど様々な仕事がある。

もっとも主な仕事は、探索者相手の事務仕事なのだが。

それとて、依頼申請の受理に説明、場合によっては苦情処理だったある。毎日、膨大な書類を右から左に滞りなく処理しなければいけないし、探索者が犯罪を起こせば、政府の介入に対応しなければいけない。

探索者が持ち込む品々の管理や買取だって、忙しいし、危険だ。

数年前、当時の上層部が無能だったばかりに、持ち込み品に紛れた魔物が、異常繁殖し神殿を血で汚す事態になったこともある。そこまでではなくても、街に潜り込んだ魔物による騒ぎは数ヶ月に一度の割合で起きる。そのため、取り扱いに注意を払わなければいけない品物は少なくない。

また、探索者への依頼を仲介するのだって、結構大変な仕事だ。

庭掃除から魔物討伐まで、幅広い依頼が日夜斡旋所に舞い込んで来る。ランクを低くし、安く見積もろうとする依頼者から正確な情報を得ないといけない。それに、自信過剰な探索者にランク以上の依頼を受けさせないように、説得もしなければいけない。下手に断ると、暴れたりすることがあるので、精神的に疲れる仕事だ。

そんな様々で地味な作業をこなす斡旋所の面々。

探索者が一種の職業として成り立っているのは、彼らの働きがあってのことだろう。

今日も、夜勤と日勤が申し送りを終えたところで、夜間通用口は閉ざされ。正面口の看板がひっくり返される。

もうじき、三月。

年始年末とまではいかなくても忙しく、ある意味とても厄介な仕

事に追われる季節になる。
王立学院の生徒が、卒業前の箔付けに回廊探索を行おうと、各回廊都市を訪れるのだ。
騎士や魔導師としての訓練を受けた彼らの大半は、貴族である。
そして、彼らの大半は探索という職を、甘く見ている。
指導している側としては、この恒例行事で考えを改めさせようというのだろう。
が、それの受け皿となる斡旋所としては、勘弁して欲しい話である。

「はぁ、憂鬱だ」

紙の束を手に、男がぼやく。

「今年は、いくつか、重なってるんだって？一度に来られても、都合のいい依頼ばかり用意できねえのに」

都合のいい依頼。
この場合、貴族の子息のプライドを満足、または損なわないような話のネタになりそうな依頼で、なおかつ危険の少ない低ランク依頼である。魔物討伐や希少品の採取などが、該当するだろうか。内容が内容なので、報酬の面でも期待が出来たりする。
もっとも、そんな依頼が早々あるわけがない。有ったとしても、本業の探索者との争奪になりかねない。一応、ベテランならこの時期の斡旋所の事情も、ある程度は理解してくれているので、そうそうトラブルにはならないが。

「ウケイの方が、今年の神事に追われていて、全学院に断りいれたからな。距離的に、うちが一番割り当て多いだろうよ」

ぼやく男の手から束を受け取りながら、同僚が肩を竦めて見せる。
『ウケイ』と『ガンビ』は王都を中に挟んで、国の東西に位置している。国内に他にも回廊都市は存在するが、王都から近いのは両都市であり、そのうちの一方が駄目な以上、必然的に一番近い『ガンビ』に人は流れる。

「ああ、今年はニコラウス王子が成人なされるからか。あっちは、あっちで大変そうだな」

「確かに。神事が終わるまで、皺寄せがこっちに来そうだな」

溜息。
まだ見ぬ仕事の山に、どっと疲れを感じる。

「そういえば、売店の方は、売り上げ予想が立てにくいって、この間も話し合っていたが。はぁ、それにしても、結構な数のチームが移動申請出してきたな。まあ、古参はそのままだから、楽なもんだけど。ドラゴンの出る宮が浅いと分かると、やっぱり影響出るね」

通し番号を確認しながら、判を押す。その手は休めずに、男に同僚もぼやく。
今手にしているのは、この斡旋所に登録しているチーム名簿で、かなりの量があった。それでも、現在登録されているチームの三割ほどだ。
ドラゴンが浅い場所で出ることで、採取や護衛などに差支えがある探索者が別の都市へと移るのである。
逆に、ドラゴン狩りを主にしているチームなどは、これから本拠地をこちらに移そうとするだろう。
都市にいる探索者の平均ランクが上がるのは、自分たちの担当業務からしてみれば、男たちにとってはあまりありがたくなかった。

「あ。おい、これ一枚抜けてるぞ」

「あ、まじか。げ、実績の方かよ」

同僚の指摘に覗き込めば、確かに番号が一つ抜けている。

どこかに落としでもしたのか。男は慌てて、自分の席へと戻る。

その背を見送りながら、同僚は自分の判を待つ書類の山を攻略にかかった。

当分、彼らの仕事が減ることはないだろう。

一方、訓練所は、結構暇である。

同じ探索ギルドが運営する施設では有るが、やはり業務内容の違いが大きい。

人気のある講義が有る日と無い日では、数倍近く人の入りが違う。

そんな訓練所に毎日のように通うのは、商人の子息や職人見習いなどの若者か、隠居して暇を持て余している老人くらいである。

それも知識系の座学の講義ばかりが人気で、実技などははっきり言って閑古鳥である。

たまに冷やかしのようにくる現役探索者もいるが、訓練設備利用を除けば、暇なのが常態と化していた。

そんな訓練所だったが、最近毎日のように通う三人の少年がいた。

それも実技をメインに学びに来ている。

会費の件もあいまって、訓練所の面々にとって話の種となっていた。

デュークとダークの二人が担当となってしまった時は、直ぐに辞めてしまうのではないかと思われもした。的確で基礎を重点的に教

えるのはいいが、癖が強く、少々やりすぎる面があったからだ。
しかし、そんな懸念も杞憂だったのか、少年たちの訓練所通いは続いている。
慣れてきたのか、最近は三人別々に行動している。それぞれ興味ある分野を受講し、常駐している講師全員と顔見知りである。
ジョージという少年が、見ていて悲しくなるほど体力が無い点を除けば、少年たちは良い生徒であり、見込みある探索志望者だった。
今日も少年たちが、外の訓練場でしごかれているのを窓越しに見ながら、大人たちはのんびりと茶をすすっていたりする。

「三周に、一口」

「では、私は五周で」

白髪の老人二人が、互いの茶菓子を賭ける。
賭けの対象は、年若い同僚に頭を叩かれているジョージである。
文句でも言ったのであろう。しぶしぶといった感じで、背嚢を背負い、ゆっくりと駆け出す。いや、正確に言うのなら、荷の重さに耐え切れず、ふらふらと転ばぬように、何とか足を動かしている。
他の少年たちは、中央でドラゴノフ相手に二対一の模擬戦を行っており、軽くあしらわれていた。

「お二人とも。頑張っている子を何の対象にしているんですか」

読んでいた書類から顔を上げ、エルフが二人を窘める。
眉間に皺がよった顔も、また大層美しい。

「ちょっとした年寄りのお茶目じゃないか。そんな怒らんでくれたまえ」

髭のある方が、眉尻を下げて悲しげな視線をわざとらしく寄越してくる。

「そうそう。老い先短いんだから、少しくらい大目にみてくれ」

「何を言っているんです。お二人とも。私よりお若いじゃないですか」

「エルフの物差しで、はからんでくれ」

「だったら、正しい年寄りらしくしていてくださいよ」

「あら。正しい年寄りってどういうのです？」

自分のカップに、おかわりを注いで居たビスターの女性が口を挟む。

訓練所で一番人気の講義を受け持つ女性の参加に、老人二人の相好もくずれる。

側頭部に、焦げ茶色の角と耳が生えた女性は、黒い鼻の頭をひくひくさせ、エルフの返答を待つ。

勢いで口にした言葉に、エルフも自分で言ったことながら首をかしげる。

何だ？正しい年寄りって。

だが、いつも自分を困らせる二人に、ちょっとした嫌がらせをするにはいい機会だった。

娘どころか孫ほどに年の離れた彼女に、二人は弱いのだ。

「そうですね。まず、ザヴィエ君の講義内容に、さりげなく禁呪や禁書関係を混ぜたりはしないでしょうね」

髭の老人が、引きつった笑みを浮かべる。
しばらくぶりの高魔力持ちに出来心で行ったことを、指摘されては反論できない。
何せ禁呪や禁書の類は、それ自体が教授を制限されているのだから。また、いくら才能があろうとも、基礎も出来ていない初心者に教えるべき内容でもない。

「それに、ご自身の本業が滞っているからって、アルト君に実務授業といって手伝わせないでしょうし」

もう一人の老人も、顔が引きつる。
自身の本業が面倒だからと手伝わせてしまった。が、一介の平民、しかもまだ子供に手伝わせていいものではなかったのだから。

「それから、気に入った子を本業のほうに勧誘しないでしょう。一応、ここは探索者を養成する場所なんですから、それ位弁えているでしょう」

二人の脳裏に、今や本業でそれなりの地位にいる部下となった少年たちの顔が浮かぶ。ついでに、家業を継がせそこなって苦笑する彼らの親の顔も浮かぶ。

「わかった。もういい。勘弁してくれぇ」

普段のゆっくりした口調はどこへやら。
エルフの口からつらつら紡ぎだされる言葉に、老人二人は両手を上げて降参した。
聞きほれるような美声に、叱られるのは少々堪える物があった。
しかも、傍に微笑を浮かべながら聞いている女性の存在が、追い討ちをかける。

「ふふ、反省しているみたいですし。その辺で、勘弁してあげたらどうです？」

助けを求める視線を向けられて、女性はエルフのカップにおかわりの茶を注ぎ、笑いをこらえて口を挟む。

女性の言葉に、老人二人は頷いてみせる。

エルフは注がれた茶に視線を向けると、溜息をついて頭を軽く振った。

「とにかく先達として、後輩たる彼らに変な影響を与えないでくださいね」

最後に、一言釘を刺す。

それに、老人二人は口をへの字に曲げて、不服そうにする。

「何です？何か文句でも？」

「我らより、あの二人のほうが気をつけるべきだと思うがの」

「そうそう。ほれ、あれ」

そう言って、窓の向こうを指差す。

そこには、ジョージを魔法で浮かして笑う同僚の姿があった。

最近、職人通りでは新商品が良く並ぶ。

各代理販売の店舗では、通常の見本品や既製品が並ぶのとは別に、

何やら変わった品が置かれている一角がある。
特に、服飾を扱う店は、一角に置かれる品数が多かった。
切欠は、ヒジリが自身の愛用品の複製を頼みに来たことにある。
一風変わったそれらと多額の資金が、職人たちを発奮させ、試作という名の新商品開発を行わせた。結果として、パトロンという形になってしまったヒジリもそれを面白がり、更なる資金提供をしたため、勢いは止まることがなかった。
そんな新商品が出るやいなや、服飾店では、若い女性が手にとっては店員と試着室に向かって、きゃらきゃらと賑やかだ。
彼女たちのお目当ては、新商品の下着である。
従来の品よりも簡素で効果のある補正下着が、彼女たちの興味を惹いたのだ。特に専門的な探索を生業としている女性を中心に、注目の話題となっている。
そんな賑やかな人だかりに、及び腰なシュヨン。
いつも同行してくれるリカルダに言われて、服を新調しようとしたのはいいが、店内の雰囲気に入り口近くで立ち往生していた。
国ではいつも自宅に職人を呼んでいたため、こういう場に来た経験がない。
こんなことなら誰か同行を頼めばよかった。
内心、悔やんでも、子供ではないからと断った手前、隠れて付いてきているであろう護衛の者を呼び出す気分にもなれない。
店員に声を掛けようにも、新商品の説明を求める女性たちに捕まり、こちらへと来れそうも無い。
出直すか。
シュヨンの心中に、諦めが浮かんだ。
オウカにはないデザインの服の数々に、心惹かれはするが、時間が経つにつれ、場違いでいたたまれない気分が上回ってくる。小さかった諦めの気持ちも徐々に大きくなってくる。
視線を再び売り場に向ければ、買い物を終えた女性が出ようと、こちらに歩いてくる。

道を空けようと、一歩後ずさる。

「おっと」

背中に柔らかな衝撃。

頭上から聞こえる声に、視線を上げれば、一房だけ白い黒髪の知人の顔が目に映る。

シュヨンが慌てて向き直り、謝罪の言葉を述べれば、ヒジリは気にするなと肩を叩く。

「お嬢ちゃんはあれ、買いに来た口？」

笑って指差す先は、女性の群れ。

「て、あの様子じゃしばらく待つことになりそうだねぇ」

「いえ、私はもう帰りますから」

ジエンの関心をひく女性を前に、シュヨンはその場に留まる気持ちがすっかりと無くなっていた。

あの惨状を生み出したとは思えないほど、気の抜けた顔にわずかだが苛立ちさえ覚える。

「そう？じゃあ、気をつけて」

素気無くされたにも係わらず、へらりと笑いながら店の奥へとヒジリは向かう。

その背は無防備で、今この場に愛刀を佩いていれば、一撃で仕留められるだけの隙があった。

それでなく、袖に隠した短刀でも、容易く首を掻ききれるだろう

と、視線を動かす。
赤。
目が合った。
寒気が走り、手は思わず腰へと動いていた。
だが、そこに武器はなく、空を掴む。
ヒジリがシュヨンを再び見て、指で何かの軌跡を描いた。たったそれだけの動き。
それは、シュヨンが思わず夢想した、ヒジリへと振るう凶刃の軌跡だった。

「ん～、残念」

最後に、指で自身の首を横になぞると、楽しげに呟き、ヒジリはシュヨンから店の奥へと視線を戻した。
シュヨンは深く息を吐いた。
何故。
何が。
どうして。
ヒジリへ疑問ばかりが浮かぶ。
だが、先ほどの赤い目が、シュヨンの足を止める。
後を追うことは出来なかった。
怖かったのだ。
あの目に見られ、回廊でどんな魔物にあった時よりも死を身近に感じた。

「シュヨン様」

顔色悪く立ち尽くすシュヨンに、放っておくことが出来なかったのだろう。
隠れ付いてきていた護衛の一人が、傍へと近づく。

「……何でもないわ」

シュヨンはそれ以外、口に出すことが出来なかった。
認めたくはなかったから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1685o/

チートとぐだぐだ異世界トリップ

2011年3月26日01時34分発行